
機動戦士ガンダム 英雄黙示録

京勇樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム 英雄黙示録

【コード】

N7601V

【作者名】

京勇樹

【あらすじ】

新太陽暦73年人類は未だに争い続けていた。

この物語は激動の時代を生きる少年少女達の物語である。

すいません多少題名を変更しました

プロローグ2年前の戦い（前書き）

えー、此度は私京勇樹の拙い作品を読んただきありがとうございます

います

多少の無茶は眼を瞑ってください。

今後のためにコールサインを変更しました

プロローグ2年前の戦い

新太陽暦73年

人類が宇宙に進出しコロニーが建造されて住むようになってから半世紀以上が経過していた。

そんな新太陽暦73年もあと数日で新しい年を迎えようとしているある日。

人間同士の争いがここ<初音島>でも繰り広げられようとしている時
人型機動兵器MSのモビルスーツのコクピットの中でとある少年は2年前のことを思い出していた。

？「あの時の俺は無力だった、だけど今は・・・」

コクピット内に電子音が鳴り響いた、どうやら通信のようだ

柏木「こちらレーヴァティン4 柏木機、土見聞こえる？」

稟「こちらレーヴァティン3 土見機聞こえる、感度良好」

柏木「なに怖い顔してんの？リラックスリラックス！」

稟「お前ね少しは緊張しとけて、2年前の戦争を思い出してた」

柏木「あー、タイタン戦争か・・・」

そう今から2年前の新太陽暦70年〜71年

今は全滅したと言われている20mを超す巨人達、国際呼称<タイタン>との戦争があった。

今でも目を瞑れば思い出す、あの時の無力感、絶望感を稟は一生忘れないだろう。

新太陽暦70年8月某日、突然そいつらは現れた。

突如現れた巨大な門、その門から大拳として現れる頭に四角い兜を被った6眼の巨人達。

巨人達は世界中に対して侵攻を開始した、当初各国の軍隊は戦線を維持、優勢だった。

しかし約3ヶ月後、タイタン側に航空生物兵器ドラゴンが出現。ドラゴンの出現により各国の戦線は崩壊、各国は後退しつつ戦線を構築したが長くは持たなかった。

この時の世界各国の主力装備は多脚戦車と空軍の戦闘機、海軍の戦艦だった。

タイタンの装備は最初大剣に、腕に直接付いてる大砲に巨大な弓矢だった。

しかしドラゴン出現と同時期に盾を持つ各種タイタンや、巨大な盾を持つタイタンが出現したことにより、砲弾の効果は著しく低下し、意味を成さなくなった。

そこで世界各国は新兵器の開発を急務とされた。

戦車以上の火力と戦闘機並みの機動力を持ち尚且つ3次元機動を併せ持つ兵器を。

しかし開発は難航した、戦車の主砲以上となると、更なる大口径化かビーム兵器しかないからだ。

当時ビーム兵器は戦艦クラスにしか搭載されておらず、ビーム兵器の小型化は困難を極めていた。

もし小型化できたとしてもエネルギー量の問題もあった。

新太陽暦71年1月某日、しかしそこに一筋の光明が見えた。

海洋中立都市国家<初音島>の天枷研究所が新概念の機動兵器を世界に向けて発表した。

それが人型の汎用機動兵器MS<モビルスーツ>だった。

天枷研究所は世界でも名の知られたロボット研究の最先端だった。

しかし、世界は最初天枷研究所が発表したMSに対して懐疑的だった。

そこで天枷研究所は提案した、今から我らが開発したMSの威力を御見せしよう、と、

天枷研究所はMS隊を日本に派遣した。

天枷研究所がMS隊を派遣を決定して1週間後
とある町が紅蓮の炎に包まれていた。

その炎に包まれてる町を3人の少年少女が走っていた。

?「はあはあ……楓、桜急げ!」

楓「はあはあ……待ってください、……稟くん!」

桜「楓ちゃん早く!」

3人は炎の町の中を兵士に誘導されながら走っていた。

1番先を走っている少年は身長170cmくらいで顔立ちは丹精で

髪は耳を隠すくらい名前は土見 稟

真ん中に居るのは黒髪で腰に届くほど更に左右にリボンで纏めら
れる髪が印象的な大和撫子と言言葉が似合う少女名前は八重 桜
少し遅れて走っているのは明るい茶色の髪で肩まで届くくらいで赤
いリボンを結んだおとなしい印象の少女名前は芙蓉 楓

少年達は炎を避けながら兵士の居る方向へと走っていた。

稟「楓、桜!急げ後少した!」

その時だった

稟「うお!」

桜「きゃー!」

ものすごい轟音と共に衝撃が走りまともに立つことすらできなかつた。

稟「いてて、楓、桜大丈夫か?」

桜「私は平気、楓ちゃんは?」

しかし楓からの返事は無い。

稟「まさか……」

稟は恐る恐る振り向いて楓が居た辺りを見たが、そこにあったのは
巨大な足があった。

桜「そんな……楓ちゃん……」

巨大な足元には楓の髪に結んであった赤いリボンと千切れた腕が転がっていた。

稟「楓・・・そんな・・・楓ーーーーー！」

すると目の前に居たタイタンが手に持っていた大剣を振り上げた。

稟（俺ここで死ぬのかな、でもせめて桜だけでも！）

稟は後ろに居た桜を突き飛ばした。

そして稟は死を覚悟して眼を瞑った。

銃声の様な轟音が響いた、稟は何時までたつてもこない痛みを不思議に思い眼を開いた。

目の前には大剣を振り上げた状態で固まってるタイタンが居たが、そのタイタンもゆっくりと倒れた。

稟は呆然としていた、一体誰が助けてくれたのか。

その時戦闘機の様な音が聞こえた、稟は音のした方向を振り向いた。その方向から人型の巨大なシルエットがこちらに飛んでくるのが見えた。

桜「稟くん大丈夫ですか!？」

どうやら桜が駆け寄ってきてきたらしい。

稟「ああ、俺は大丈夫だ」

桜は泣きながら稟に抱きついている。

そして稟たちの前に人型の機体が着地した、目の前に着地した機体は赤青白の3色が印象的な機体だった。

？「その君達生きてるな!？」

どうやら目の前の機体から発しているらしい声を稟は聞いた。若い声だった、自分達と同年代くらいではないかとすら思えた

稟「はい、大丈夫です!」

？「よし!では少し待っていてくれ!今桜武の高機動車と歩兵部隊を呼んだから」

稟は驚いた。

稟（桜武だつて!?!あのMSを発表した初音島の軍隊!）

桜武は初音島が日本から独立した際に組織された軍隊で正式名称は初音島統合防衛軍である。

確かに機体の右肩には桜武の証の桜の花の上に盾と日本刀が斜めに

重なったマークがポイントされている。

稟（これがMS・・・人類の新たな力！）

稟は目の前の機体を見上げ、視線を下げながら拳を握った。

稟（俺は力が欲しい！大切な人を守る力が！！）

稟は改めて目の前の機体を見つめた。

これが英雄と呼ばれる少年と土見稟の出会いだった。

この戦いの後、初音島の派遣した部隊は約2週間で日本からタイタンを駆逐した、その性能を見た各国の軍関係はMSの本格的導入を決定した。

ここから人類の反撃が始まるのだった。

そして新太陽暦71年12月末日タイタンは世界から駆逐された。

ブローグ2年前の戦い（後書き）

はい、始まりました英雄黙示録ですが、一応誤字脱字は気をつけて
ますがなにかあったら一報ください

2年前の戦い *sidesy* (前書き)

遅くなりました

2年前の戦い side S Y

？「もうすぐ人間同士の殺し合いが始まる・・・」

暗い部屋の中、1人の男がベッドに腰掛け両手で顔を覆いながら呟いた

？「義之、大丈夫？」

何時の間に起きたのか、背後に体にシーツを巻きながら眼鏡をかけた女性が優しく声をかけてきた。

義之「ああ・・・正直少し怖いかな、ありがとう麻耶」

桜内義之は最愛の恋人の沢井麻耶にそう返事した

麻耶「ううん、それで良いと思う、今回は人の命を奪ってしまっただから」

そう、今回の戦いは自分と同じ生きた人間だ、前大戦の<タイタン>じゃない。

義之はそう思いながら目を閉じて、今でもはっきり覚えている2年前のタイタン戦争を思い出した

今から2年前、新太陽暦71年8月末日、場所は初音島

義之「はあはあ、これで何体倒した？」

義之は愛機の武装15・78m対艦刀シュベルト・ゲベルをタイタンの死骸から抜きながら呟いた

パイロットスーツのヘルメットの無線からは、味方の怒号や悲鳴、

救援要請の声がひっきりなしに響いている

義之「とうとう、俺だけか」

最初は義之の駆るストライクを含めて16機居たが、今は義之のG A T - X 1 0 5 ストライクだけが砂浜に立っていた。

その証拠に周囲にはM1アストレイの残骸が散乱していて、しかしそれ以上にタイタンの死骸が砂浜を埋め尽くしている。

電子音が響くとサブモニターに顔が映った

麻耶「こちらH.Q！ストライク、義之大尉聞こえますか？」

義之「こちら義之聞こえる、こっちは俺以外全滅した、繰り返す俺以外全滅した」

麻耶「H.Q了解、先ほどそちらの地区に向かう移動熱源及び震源検知、規模は連隊規模よ」

義之「おいおい、そんな数俺1人じゃ対処しきれない！」

麻耶「大丈夫、そっちに援軍が向かったから」

義之「援軍？一体誰が・・・」

そう言った瞬間コクピット内に警告音の大合唱が鳴り響いた！

義之は慌てて機体を右にステップさせた

先ほどまでストライクが居た場所に光弾が当たり、クレーターが出来た

義之は上を見た

義之「ドラゴンか！？」

上空に10数体のドラゴンが居た、しかもその内の1体が今まさに攻撃を放とうとしている

義之「やばい！」

ストライクは着地したばかりで動けない、万事休すかと義之は思った、その時だった

？「ほらほら弟くん油断しないの！」

その声と同時に攻撃を放とうとしたドラゴンにレールガンとミサイルが命中し、ドラゴンは墜落した。

義之「この攻撃はデュエルAS！アサルトユニットまゆき先輩！」

まゆき「やつほー！弟くん無事みたいだね」

その声と同時にストライクの右側にベースジャバーに乗ったデュエルASが着地した

まゆき「こっちに来たのはあたしだけじゃないよ」

？「同志桜内は無事か」

声が聞こえたと思ったら海中から現れたタイタンに3本の槍みたいな攻撃が刺さった

義之「今の攻撃はブリッツの！杉並か！？」

杉並「ふむ無事で何よりだ、同志桜内」

杉並の操るブリッツもベースジャバーに乗って現れた

？「ほらほら、油断しちゃ駄目だよ？義之君」

大量のミサイルがドラゴンの群れに飛来していくのと同時に声が聞こえた

義之「今のミサイルはバスター！ってことは菊理くくりさん！」

後ろには、今まさにミサイルを放った証拠であるランチャーから煙が出ているバスターの姿があった

菊理「間に合って良かった、流石にこの数は1人だと厳しいからね」
菊理はそう言ってウインクした。

？「ふむ、全機集合したみたいだな」

そして上にはベースジャバーに乗ったイージスが居た

義之「伊隅隊長！」

伊隅「さてここは我々が防衛するぞ！タイタン共を1匹たりとて通すな！！」

全員「了解！」「」「」

無線に仲間達の声が響く、義之は気合を入れ直して操縦桿を握りなおした

杉並「同志桜内！掴まれ！」

ストライクの上にブリッツの乗るベースジャバーが来た

義之「ああ！」

ストライクはベースジャバーの下にある取っ手を掴んだ

ベースジャバーはその強力な推力で2機まで運べるから、こういう運用も可能だ

杉並はベースジャバーをドラゴンの上まで飛ばした

義之はドラゴンの上まで来たのを確認して、ストライクの手をベースジャバーの取っ手から離してドラゴンの上に着地した

義之「はああああ！」

義之は雄たけびを上げながら対艦刀をドラゴンの首めがけて振り下

ろした

振り下ろした対艦刀はドラゴンの首を簡単に切り落とした
ドラゴンの翼が止まり自由落下に入る前に、義之は近くのドラゴンに飛び移り、また首を切り落とした

今度は左手に装備されてる、小型の盾に装着されてるワイヤーアンカー<パンツァーアイゼン>を上には伸ばして上に居るドラゴンの足の様な部位に噛ませた

義之「よっと！」

義之はワイヤーを巻き上げて、勢いを利用してドラゴンの上にストライクを乗せた

義之「は！」

義之は、ストライクの右肩に装備されてるビームブーメラン<マイダスメツサー>を左に投げた

左に居たドラゴンの翼の付け根を切り裂いた、ドラゴンは飛べなくなり落ちていく

マイダスメツサーはビーコンにより元の位置に戻った

義之は足元に居るドラゴンの背中にシュベルト・ゲベールを突き刺し、刺した状態から切り裂いた

ドラゴンは落ちていく、ドラゴンは近くには居ない、どうやら今ので最後だったらしい

杉並「同志桜内こっちだ！」

義之は後ろを見た、ブリッツが乗ったベースジャバーが飛んでくる杉並「同志桜内、機体をビーコンに同調させる！」

義之は反射的にコンソールに手を伸ばしパネルを操作した

ストライクは難なくベースジャバーに着地した

杉並「やれやれ、キリが無いな」

義之「ぼやくな杉並」

義之はエネルギーゲージを見た

義之「やばいな」

エネルギーゲージはもうすぐレッドゾーンに入る

通信が入りサブモニターに2人の女性の顔が映った

？「義之君！エールとランチャーストライカー持ってきたわよ！」

義之は砂浜を見た、そこには青いアストレイと赤いアストレイが居た
そして2機の間にはトレーラーが2台停まっ^ていて中に予備のエール
とランチャーストライカーが収まっている

義之「更識大尉！織斑中佐！ありがとうございます！」

さらしきたてなし

更識楯無大尉は青いアストレイことブルーフレームに搭乗している

女性で、ちよつと不思議な頼れるお姉さん

赤いアストレイことレッドフレームに搭乗しているのが織斑千冬中

おじむちあきふゆ

佐で、織斑中佐は黒髪が腰に届くほど長く、厳しいが面倒見が良い

義之「杉並！」

杉並「うむ！」

杉並はベースジャバーを砂浜の方向に飛ばした

砂浜に着くと義之はソードストライカーをパージした

ストライクがソードストライカーを外すと色が鮮やかなトリコロ
ルから鉄灰色に変わった、どうやらフェイスシフトがダウンしたよ
うだ

フェイスシフト装甲は一定の電圧を通电することで無重力下で精製
した合金が相転移して実弾及び実体剣に対して絶大な防御力を発揮
する画期的な装甲で通电する電圧で色が変わる、ストライクの場合
は赤青白の所謂トリコロールである

そして義之はランチャーストライカーを装備した

そうすると装甲がまたトリコロールに戻った

各種ストライカーパックには小型の予備バッテリーが内蔵されてい
る、その為にストライカーパックを装着すれば戦闘可能時間が延長
でき、尚且つストライクのバッテリーが切れても戦闘が可能になる
のだ

ストライクのエネルギーゲージが安全域まで回復したのを確認した
義之は左背中に装備されてる巨大な火砲、対艦砲<アグニ>を構えた
左前方では橘菊理の搭乗したバスターが、350mmガンランチャ

1と94mm高エネルギー収束火線ライフルを直結させたビーム砲、超高インパルス長距離狙撃ライフルを構えて連射している

義之「菊理大尉！援護します！」

そういうと義之はアグニを構えて連射して、上空や遠くにいるドラゴンを撃墜していく

そうやって撃ち続けていたら、レーダーに巨大な反応が現れた

菊理「あれは！」

伊隅「くっ！<ギガンテス>か！」

ギガンテスとはタイタンの中で一番大きいサイズで最大で80メートルを超える

菊理「義之君！」

義之「はい！合わせます！」

義之は菊理の考えに気づいてギガンテスの頭に狙いを定めた

義之&菊理「っ！っ！っ！っ！っ！っ！」

2門の火砲が同時に放たれ、2本の火線はギガンテスの頭を貫いた
ギガンテスはゆっくりと倒れて、でかい水柱があがった

と同時にストライクの右側に10数体のタイタンが海中から現れた
義之「間に合え！」

義之はストライクをタイタン達の方向に向かせ右肩に装備されてる
120mm対艦バルカンと350mmガンランチャーを撃った

義之「ギリギリ間に合った・・・」

現れたタイタンはただの肉塊に変わっていた

伊隅「各機状況を報告しろ！」

杉並「バッテリーがもう持たん・・・」

まゆき「あたしもバッテリーも無いし、ミサイルにグレネード、レ

ールガンの弾も無い・・・」

菊理「すいません、私事です・・・」

伊隅「くっ！私もバッテリーが無いな・・・」

義之「俺はエールストライカーが残ってるのでまだ行けます！」

更識「あたしはまだ行けるわよ！」

千冬「私もだ！」

それを聞いた義之は1つの決断をした

義之「伊隅隊長！まゆき先輩に菊理大尉、杉並は補給に戻ってください！ここは俺達が引き受けますから！」

全員「……！？」

義之「ここは俺と更識大尉に織斑中佐で抑えます！ですから早く！まゆき「無理だよ弟くん！5機でようやく抑えられたんだよ！？3機だけなんて！！」

千冬「大丈夫だ、既に頼りになる援軍を要請してある」

と同時にリーダーに反応が現れた、方向は真後ろ軍事式に言うと6時の方向から高速で接近する反が2機有った

伊隅「援軍か！」

伊隅は振り返って確認した、現れた機影は黄金色のアストレイと紅いストライクだった。

義之「神宮司中佐！それに草壁大尉！」

黄金色のアストレイことゴルドフレームに搭乗しているのは神宮司まりも中佐で、厳しくも優しい頼れる人物

紅いストライクことストライク・ルージュに搭乗しているのは草壁美鈴大尉で、リーダーシップがありカリスマ性溢れる女性だ

まりも「待たせてすまん！」

美鈴「皆待たせた！」

千冬「伊隅少佐ここは我らが引き受ける！義之大尉の言う通り補給に向かえ！」

伊隅「しかし！」

千冬「いいから行け！これは上官命令だ！」

伊隅「了解しました、御武運を……！！」

伊隅みちる少佐達は後ろ髪を引かれる思いで戦線を後にした

千冬「さて、義之大尉あれ程の事を言ったんだ、貴様の活躍見せて貰うぞ？」

義之「了解！して織斑中佐その刀は？」

義之はレッドフレームの腰に装備されてる刀を聞いた

千冬「ん？ああ、これは私が頼んで作ってもらった対艦刀ガーベラ・ストレートだ」

義之「直訳すると菊一文字ですか、かつての名刀の名前ですね」

千冬「私は刀のほうが慣れてるのでな」

義之「なるほど」

千冬「さてと、無駄話はここまでだ来るぞ！」

義之は愛機ストライクの向きを海の方角に向けた、海中から次々に現れるタイタンに、空を飛ぶ数10体のドラゴンがメインモニターに映った

まりも「織斑中佐どう対処しますか？」

千冬「私と義之大尉でドラゴンを処理する、神宮司中佐は草壁大尉と更識大尉を率いてタイタン共を」

全員「……了解！」「……」

義之「桜内義之、ストライク行きます！」

そう言うのと義之はストライクのスラスターを全開にしてドラゴンの群れに突撃した

尚この戦いは1昼夜続き、その戦闘の激しさから後に<初音島攻防戦>と呼ばれるようになり、この時の戦闘データはシュミレーターに使われパイロットの育成に大いに貢献したのである。

そしてこの戦いから約4ヶ月後の新太陽暦71年12月末世界中でタイタンの全滅を確認、タイタン戦争は多大な犠牲を払い終結したのであった。

これは、1年中桜が咲く不思議な島<初音島>での少年少女達の、交錯する思いと道標（道しるべ）、そして戦争と言う非日常と日常が入り乱れるなかで強く逞しく生きていく物語である。

2年前の戦いsideSY（後書き）

もう1回言いますが、遅くなってしまい大変申し訳ありませんでした！（土下座慣行）言いますと書いてたのを間違って消してしまっただのが原因ですはい
さてようやく義之が登場しました、因みに沢井麻耶が恋人なのは作者の好みです！
異論は認めん！！

それぞれの始まり前編（前書き）

駄作者の第3話でござい

それぞれの始まり前編

？「はあはあはあ」

広大なグラウンドを走る1つの人影

身長は約180cm、髪は耳が見えるあたりで切っており、顔立ちはかなり丹精でイケメンと言える

青年はどうやら目標周を走り終えたのか、ゆっくりとペースを落としいき立ち止まり膝に手を置いた

？「はあはあはあはあ・・・」

青年は汗を拭きながら乱れた息を整えてから空を見上げた

空には満天の星空と三日月が見えた

？「む？そこに居るのは土見か？」

つちみりん

土見稟は後ろに振り返ると、そこに居たのは膝まで届く髪を後ろで纏めてポニーテールにしている長身の少女が居た

稟「ん？ああ、御剣か」

みつるぎ

その少女の名前は御剣冥夜みつるぎめいやと言い、凜という言葉が似合う少女だ

稟「今日は晚かったなどうした？」

冥夜「・・・武たけるにすっぱかされた」

冥夜は不機嫌そうに言った

武と言うのは冥夜と同じ207訓練部隊に所属する訓練生だ。名前は、白銀武しろがねたけると言う

因みに御剣冥夜と白銀武は恋人である

そして稟は206訓練部隊だ

稟「はは、それはご愁傷様」

冥夜「土見はあがりか？」

稟「ああ、ノルマはクリアしたからな」

そう言つと稟は星空を見上げて

稟「もうすぐだ」

冥夜「なにがだ土見？」

稟「ああ、総合戦闘技術演習がさ」

冥夜「ああ、そうだな」

？「む？そこに居るのは稟に冥夜か」

稟「ああ、箒か」

箒とは208訓練部隊に所属している女の子で、冥夜と同じように凛と言う表現が似合う子で名前は、篠ノ之箒しののほと言う、膝辺りまで伸びてる綺麗な黒髪を後ろでリボンでポニーテールにしているのが特徴だ

稟「一夏はどうした？」

一夏とは箒と同じ208訓練部隊に所属している訓練生で名前は織斑りむらいちか一夏と言う

箒「一夏ならもうすぐ来るはずだが……」
と宿舎のほうから

？「おわー！ー！ー！ー！？」

稟「この声は一夏？」

宿舎の方向を見ると、件の一夏を逆さづりの状態で見つけた？「ふっ！その程度では私の嫁になれんぞ一夏！！」

そして逆さづりの一夏の前に身長150cmくらいの銀髪が腰に届くくらいで左目に眼帯を着けた小柄な少女が居た

一夏「ラウラ！だから嫁じゃなくて婿だ！つか降ろせ！！」

どうやら、同訓練部隊のラウラ・ボーデヴィツヒが仕掛けた罠に一夏が引っかかったらしい

まあ、ラウラは元JEU軍の特殊部隊の隊長だから仕方ないかもしれないが

稟「ラウラが来てもう3ヶ月か、だいぶ馴染めたみたいだな」

箒「ああ、最初は緊迫した雰囲気だったがな、今では大切な仲間であり友だ」

冥夜「しかし、最初来た時は驚いた、なぜ現役の隊長が来たのかとな」

稟「ユーラシア連合がJEUを攻め落としたんだっただな……」

JEUとは、日本帝国とEUの軍事同盟の名前である

?「ちよつと!?!一夏の悲鳴が聞こえたけどつて、一夏!?!」

一夏「シャルか!?!助けてくれ!!!」

見ると逆さづりの一夏とラウラの近くに金髪をショートカットで纏めた、エメラルドの瞳に中性的な顔立ちの美少年とも言える美少女が居る、名前はシャルロット・デユノアと言う

シャル「ちよつと、ラウラ一夏を降ろしてあげて!」

どどん騒がしくなってきた

稟「やれやれ、助けてやりますか?」

稟は両隣に居る人物に聞いた

冥夜「うむ」

篤「そうだな」

稟の言葉に冥夜と篤は苦笑いしながら従い、騒いでいる一夏達の方
向えと走った

稟sideEND

????side

ここは軍施設の地下にある、とある人物の執務室だ

その部屋には一通りの応接セットと木製のそれなりに大きい机があった

しかし、木製の机の上には書類が山の様に積まれていて処理済よりも処理待ちのほうに圧倒的に多い

そしてその机に一人の男が突っ伏していた

と書類の間にあった電話が鳴った

男はうつ伏せのまま受話器を取って

?「はい、どうした麻耶?」

どうやら相手は専属秘書であり恋人の沢井麻耶らしい

麻耶「義之、伊隅中佐と高坂中佐が来たわよ」

義之はそれを聞くと体を起こし、片手で髪を軽く整えながら義之「通してくれ」

と言い受話器を戻したら空気が抜ける様な音がしながらドアが開くと、そこには2人の女性が立っていた

伊隅&まゆき「失礼します！伊隅みちる及び高坂まゆき両中佐出頭しました！」

と2人はドア付近で敬礼しながら言つて、部屋に入ってきた

義之「はい、ご苦労様です、と言つか敬礼はしないでいいって言いましたよね？」

伊隅「やはり軍人としては当然ですから」

まゆき「そういうことだよ弟くん」

と言いながら二人は応接セットの近くまで歩く

義之も二人とは反対側のソファに座つてから、二人にも座るよう促した

義之「で今年はどうかな？」

伊隅「今年は大漁ですよ、大佐」

まゆき「選別に手間取っちゃったよー」

と言いながら二人は脇に挟んでいたファイルを取り机に置いてから開いた

そこには30名ばかりの顔写真とプロフィールと成績が書かれた書類があつた

伊隅「それでは我々が選んだ候補です」

まゆき「じゃあ名前を言うね、まずは206訓練部隊隊長の、涼宮すずみや
あかね茜、次に同部隊副長の」

伊隅「そして最後に210訓練部隊のライラ・フリードリヒで以上です」

義之は机の上に広げられた書類を1枚ずつ見ながら

義之「ふむ、今年は本当に大漁だな」

まゆき「まあ、210は元JEUの特殊部隊だから当たり前だけどね」

伊隅「そして、神宮司及び織斑両教官の推薦人物も高い成績を保持しています」

義之「どれどれ？・・・なるほど高いな」

まゆき「207の各員は各分野に別れて高いけど、とくに白銀訓練生がずば抜けて高いね」

伊隅「208はコンビネーションがずば抜けてますね」

義之「ふむ、流石は2大教官が育てただけあって、他の訓練生よりは高い成績だな、ん？」

伊隅「どうしました？大佐」

義之「この御剣ってあの？」

まゆき「そ、あの御剣財閥の子だよ、しかも直系の、備考見てみなよ」

義之「あの御剣財閥の令嬢がなんで居るのか知らないけど、まあ優秀ならば選ぶさ」

伊隅「たしかに、そうですね今我々には早急に戦力が必要ですからまゆき」で、意外なのが、神崎教官長が推薦を出してるのよ」

義之「え？あの神崎教官長が？」

神崎とは本名神崎恭一郎かんざききょういちろうと言い、昔は傭兵として世界中の戦場を渡り歩いた豪傑で、歳は40後半で髪型はオールバック、ヒゲを生やしていて常にサングラスをかけている見た目は所謂ダンディーなオッサンなのだが、性格に難があるそれは、「他人ひとの不幸ほど楽しい事はないね！」と笑って言う人物で、彼を良く知るK氏は度々こう

言う「いっぺん殴りたい」と

閑話休題

伊隅「それがこの訓練生です」

義之「206の土見訓練生か、……あれ？」

まゆき「どうしたの？弟くん？」

義之「なーんか見覚えがあるなーと、どこだったかな？」

伊隅「？、そうですか、しかしこの訓練生平均して成績はA判定です
ね」

義之「ほんじゃま、俺達で試しますか？」

伊隅「試すって、格闘技能ですか？」

義之「決まってるでしょ？俺達に最も必要な技能だよ」

義之はそう言いながら口端をあげた。

それぞれの始まり前編（後書き）

まず先に、遅れてしまい申し訳ありませんでした!! or s
ちよつとPCの調子が悪くてなかなか上げられませんでした!!
次回も少し遅れるかと思いますが、会社の書類がヤバイ・・・
だげど挫けません!!

皆さん何かアドバイスなどがありましたら教えてください!!

それぞれの始まり後編（前書き）

懐が寒いです、出費が痛いぜ！

理由は自転車が誰かにパンクさせまくられてるからです！

既に2回チューブを交換しましたよ……

犯人見つけたら、無事で済むと思うなよ！！（怒）

それぞれの始まり後編

? side

?「はあはあはあ・・・、く!」

狭いコクピットの中1人の少女が悪態を吐くのを堪えながら操縦桿を握っている

目の前のモニターには6眼の醜い巨人達の死骸が横たわっている

?「何体倒せば終わるのよ!」

そう少女が叫んだ瞬間だった

?「え!?なに!?!」

コクピット内に警告音の大合唱が鳴り響いた

?「どこから!?!」

と目の前にあつた死骸の山が突如膨れて吹き飛び、その下から手負いの巨人が手に大剣を持って現れた

?「しまった!仕留め損ねてた!!」

突然のことに少女の反応は遅れたが

?「く!このーーーー!!」

少女は機体の右手に保持していたビームサーベルで反撃しようとして振り回したが

突然目の前に居た巨人の振り下ろしていた大剣がピタリと止まり、

モニターと室内灯が消えてコクピット内が赤くなり、モニターには、致命的損傷により戦闘不能・・・シュミレーター終了の文字が映った

?「だー!もう!また負けた!?!」

少女はヘルメットごと頭を抱えて叫びながら、シュミレーターから出た

少女は出るとヘルメットを脱いだ、その途端に腰より少し長い位まで伸ばしてあるツインテールが現れて、その少女のトレードマークでもある髪留めの鈴が鳴った

?「うーん、あれは反撃じゃなくて回避するべきだったかな?」

と呟くと空気が抜ける様な音が聞こえて

？「あー！こんなところにおった、もーアスナ！！」

とアスナと呼ばれた少女、本名、神楽坂明日菜は声のした方向に振り向くとそこには2人の少女が居た

明日菜「あれー？木乃香に、刹那さんじゃんどうしたの？」

こちらに駆け寄ってくる人物のは1人は髪は黒く腰位まで伸びていて、ほんわか雰囲気の大和撫子と呼べる少女で名前は、近衛木乃香と言う

もう1人は右肩に担ぐ様に竹刀袋を持った少女で前髪は右側だけあり後ろの髪は左側に纏めた少女で、木乃香とは違った印象の凛とした大和撫子と言える少女と言える、名前は、桜咲刹那と言う

刹那「どうしたの？ではありませんよ明日菜さん」

木乃香「ネギくんが捜しとったで」

明日菜「ネギが？なんで？」

因みにネギとは彼女達の教官の1人の本名ネギ・スプリングフィールドのことである、詳細はまた別の機会に記す

刹那「明日菜さんだけ、今日の模擬戦のレポート出してないんですよ」

明日菜「ヤツバ！忘れてた！！今何時！？」

木乃香「もうすぐ7時だよ」

明日菜「急いで戻らないと！ご飯も食べられないじゃん！？」

食欲が先にでる辺りは、やはり花の10代乙女だからか・・・

先にレポート書いてやれよ・・・、ネギ君泣くぞ？（作者）

刹那「だから呼びに来たんですよ、急いでください！」

明日菜「ちよつと待って！今シュミレーターの電源をスタンバイモードに切り替えるから！」

そう言つて明日菜はシュミレーターのコンソール画面のキーボードを叩いてシュミレーターの電源をスタンバイモードに切り替えた

木乃香「ほら！アスナ急がんと間に合わへんよ！」

刹那「書類書くのも手伝いますから急いでください！」

明日菜「ありがとう刹那さん！」

いいのかなそれ……（作者）

明日菜「ん？」

木乃香「どしたんアスナ？」

明日菜「今誰かにツッコミされたような……？」

刹那「いいから行きますよ！急いでください！！」

明日菜「ああ！そうだった！！」

そう言つて3人はドアを開けてシュミレータールームを出た

明日菜「うーん」

明日菜は走りながら、唸^{うな}っていた

刹那「どうしました、明日菜さん？」

明日菜「いやー、やっぱりちゃんとMSに精通した教官が居ないと
厳しいなーって」

刹那「そうですね、いくらネギ先生でもMSは無理みたいですし」

明日菜「うーん誰か良い教官居ないかな？」

3人はそう言いながら走つていく

そして食堂でご飯を食べた明日菜は木乃香と刹那の手助けを借りて
3時間かけてレポートを書き上げた

？「はい、確かに受け取りました」

明日菜「良かったー、間に合ったよー、ごめんねネギ？」

そう言つと明日菜は目の前の椅子に座っている10歳くらいの小さい
眼鏡をかけスーツを着た少年に謝つた、その少年が明日菜達の教
官の1人である、ネギ・スプリングフィールドだ

ネギ「いえいえ、だけど明日菜さん」

明日菜「な、なに？」

ネギ「シュミレーターをやるのは構いませんが、ちゃんと僕には話
を通してくださいね？」

明日菜はどうやら誰にも言わないでシュミレーター訓練をしていた
ようだ

明日菜「ごめーん！、で話は変わるけどさネギ？」

ネギ「はい、なんですか、明日菜さん？」

明日菜「MSの訓練なんだけど、やっぱり教官が必要だと思つた」
ネギ「はい、僕もそう思いました、先ほど本部の月詠つくよみさんと話し合
つたんですよ」

明日菜「え？月詠さんと？」

ネギ「はい、そうしたら手配してくれると言ってくれました、ついでにMSもどうにかすると」

明日菜「本当に！？やった！私のリーオーもうボロボロだったから助かるわ！」

明日菜達のMSは前大戦終結後に各戦場跡から回収したジャンク機体をレストア《再生》した機体の為に安定稼働できず尚且つ機種もバラバラなのだ、最低でも中古機体でも機種を統一したいところだ尚、明日菜が搭乗しているリーオーは前大戦時にN・A・U《ネオアメリカ連邦》が開発した機体で操縦性は高い機体で、今尚、N・A・Uでは改修した機体のリーオーMk？《リーオーマークツー》が運用されている

ネギ「それで、僕が選んだ場所はこの人に頼もうかと打診しました」

そう言つてネギが1枚の写真を出した、そこには桜色染まったの三日月型の島が写っていた

明日菜「ここって初音島？」

ネギ「はい！ここは世界で初めてMSを作り投入した国ですから、優秀な教官が軍人さんが居るはずです！」

明日菜「私の印象に残ってるのはストライクかな？」

ネギ「初音島の英雄の守護神さんですね？なんでも明日菜さん達と年齢はそう変わらないみたいですよ？」

明日菜「ええ！？それ本当なの！？」

ネギ「はい、1度会つてみたいですよー」

ネギが眼を輝かせながら喋つたのを見た明日菜は微笑みながら

明日菜「もしかしたら会えるかもね？」

そう言っ て教官室を退出した……

明日菜 side END

??? side

? 「いつてきまーす」

そう言いながら私は玄関のドアを閉めた

朝7時45分、空は快晴

私の名前は、八重 桜風見総合学園普通科高等部2年C組に通っています

ここ初音島に来て約2年、最初は1年中桜が咲いていることに驚いてましたが慣れました

私が住んでるのは複数あるメガフロート島《人工島》の1つの通称<居住島>にある光陽町です、と言ってもこの光陽町は2番目の光陽町で、本物の光陽町は2年前の<タイタン戦争>で滅んでしまいました、その後で初音島の大統領さんが私達、光陽町の住民を受け入れて引越しました、初音島の大統領さんの名前は、芳野さくら《よしのさくら》さんと言います、見た目は10代くらいなんですけど、幾つもの博士号を持つ優しい人で、優しい金色の髪をサイドアップテールにしている碧眼が特徴の人物で、なんと私の通う風見総合学園の学園長でもあります。

? 「ああ、八重おはよう!」

桜「おはよう、美夏ちゃん!」

私に挨拶してきたのはクラスメイトの、天枷美夏ちゃんです。

いつも牛柄の帽子をかぶっているのが特徴で、今は風紀委員長をやっ ていて、気が強いですけど素直で優しい、いい子です

美夏「一緒に学校に行こう」

桜「はい」

そう言つて私達は、モノレールの駅に向かつて歩きだしました、私達は他愛無い会話をしながら駅に着いて、モノレールに乗り3駅乗つたら駅から降りて、次は電動無人バスに乗つて15分後に目的地に着いたので降りるとバス停の目の前にあるのが風見総合学園です、なんと全生徒数が、初等部、中等部、高等部、大学部合わせて合計1万人超えという超マンモス学校です

私達は門の所に居る守衛さんに挨拶して、下駄箱で上履きに履き替えながら

桜「そういえば、美夏ちゃんと由夢ちゃんは桜武さくらぶに所属してるんだよね？」

美夏「ああ、詳しい所属は機密だから言えんが、美夏はMSパイロットで由夢は衛生班だな」

ちなみに由夢ちゃんとは、クラスメイトの朝倉由夢あさくらゆむちゃんのことです。髪型はショートカットで頭の両側でお団子、所謂シニヨンが2つある子でクラスでも保健委員に所属しています

そして教室の前に着いて私が教室のドアを開けようと手を出そうとしたら

美夏「待て八重！」

美夏ちゃんが私の腕を掴みました

桜「？」

私が振り向くと、美夏ちゃんがジエスチャーでドアから離れるというので、離れたら美夏ちゃんがドアに近づいて

美夏「すーはーはーはー」

と深く深呼吸してからドアを一気に開けました、その瞬間？「おはよう！桜ちゃん！ようこそ俺様の」

美夏「ふん！！」

と美夏ちゃんは教室の中から飛び出してきた眼鏡をかけた男子に対して見事に腰の入った右パンチ、所謂右ストレートを放ちました？「ぐふ！！」

美夏ちゃんの右ストレートは教室から飛び出してきた眼鏡をかけた男子、緑葉 樹君の腹部に凄いな音と共に直撃しました

美夏「相変わらず懲りないな緑葉、それならば・・・麻弓!!」
と美夏ちゃんが教室の中に向けて呼ぶと

?「委細合点承知なのですよー!」

と教室内から聞こえたので教室を覗くと、そこには右目が赤で、左目が青のオッドアイが特徴の子が居ました、その子が本名、麻弓!!
タイム《まゆみ!!たいむ》ちゃんです

そして麻弓ちゃんは何処からか縄を取り出して

美夏「ふん!!」

樹「げふ!!」

美夏ちゃんは緑葉君を蹴り上げて

美夏「は!!!!」

樹「ごは!!」

更に、麻弓ちゃんに向けて蹴り飛ばすと

麻弓「麻弓ちゃん流縄縛術!第27弾!!」

と叫ぶと緑葉君が一瞬にして縄でぐるぐる巻きになりました

樹「新しい世界が見える!!」

そのまま縛った状態で吊るすと

麻弓「エリカちゃん!!」

と後ろ、要するに窓の方向を向き叫ぶと、窓際にスタイルの良い腰位まで伸びた金髪と碧眼が特徴の子が居ました

この子の名前はエリカ・ムラサキちゃんと言い、なんでも東欧生まれのお姫様なんだと聞きました

エリカ「準備OKですわ!!」

といつの間にか窓が全開になっていて

麻弓「美夏ちゃん!!」

と麻弓ちゃんが呼ぶと

美夏「うむ!!」

と2人同時に飛び上がると

クラスメイト一同「「「「麻弓に美夏！ぶちかませ！！！！」」」」
とクラスの皆（私に麻弓ちゃん、美夏ちゃんとエリカちゃんを除く）
が叫ぶと

美夏＆麻弓「「必殺！ライジング・インパクト！！」」
2人で緑葉君を窓の方向に蹴りました

樹「ごふあー！！」

という声を残して緑葉君が窓の外に蹴り飛ばされたら
エリカ「ゴミ掃除完了ですわ！」

と言いながら窓をピシヤリと閉めました（外では緑葉君が下に消え
ました）

桜「流石にやりすぎなんじゃ……」

と私が苦笑いしながら言うと

美夏「何を言う八重！」

麻弓「あれくらいやらないと緑葉君は止まらないのですよ！！」
エリカ「その通りですわ！！」

と3人が力説しました

桜「あははは……」

私は苦笑いしながら自分の席に座ると

麻弓「そういえば、さっちゃんこのクラスに転校生が来るらしいの
ですよ、しかも3人も！」

桜「ふーん、転校生ですか……」

私はその麻弓ちゃんの言葉を聴き、窓の外を見ると

桜（稟くん、稟くんは今何処に居るんですか……？）

1年以上音沙汰もなく、会っていない幼馴染であり、想い人である
人物を思いました

桜 side END

それぞれの始まり後編（後書き）

皆様駄作者による続編です

悲しい事に未だにコメント数0です！

誰でも構いませんから、何卒なにしろコメントや指摘、レクチャー等々あり
ましたらお願いします！！（土下座敢行中）

おまけ1VIP大騒動(前書き)

とりあえず思いついたので書きました

おまけ1VIP大騒動

? side

? 「なんでこうなった……」

俺、桜内義之は現在起きている現象に情けない声しか出せずに居た

? 「誰にもこんなこと予想できないわよ、義之……」

そう言ってくれたのは隣に居る俺の副官であり恋人である、沢井麻耶である

義之は目の前に居る人たちを見る

? 「おいこら！ さくらんぼ！ なにがどうやったらかうなる!？」

叫んでいる人物は見た目は自分と同じ年くらいの青年だが着ている服は軍服で襟についてる階級証は大総統を示している

? 「うにゃー、そう言われたって……」

そう言ってるのは金髪ツイントールで碧眼が特徴で見た目はあいかわらず10代前半の人物にしか見えない芳野さくらだ

? 「そうよ、さくらちゃん！ なんで皆若返ってるのよ!!」

そうさくらに詰め寄ってる人物は見た目は、由夢に似ているが首に猫がつけるような鈴が着いている、見た目は同年代の女性だ

義之「まあまあ、落ち着いてくださいよ、純一さんに、音夢さん」

そう目の前に居る俺と見た目同年代の人物は、音姉こと、朝倉音姫と朝倉由夢の祖父と祖母にあたる人物である、朝倉純一さんとその

奥さんである、朝倉音夢なのだ

義之「はあ……」

俺はため息を吐きながらこうなった理由を思い出してみた

回想今から数十分前

始まりは今日の仕事が終わりましたまたま帰りが純一さんと同じになったところからだ

純一「なんだ、義之か」

義之「おや純一さん、仕事ちゃんと終わらせましたか？」

純一「お前ワシをなんだと思ってる？」

義之「かつたるいが口癖の我らが上官です」

純一「かつたるい……」

言ったそばから言ったよこの人……

義之がそう呆れていると

麻耶「義之、車が用意できたわよ、って純一大総統閣下！」

と麻耶は慌てて純一さんに敬礼した

純一「だから、敬礼はいらなと言っただろ……」

純一さんは呆れながら言った、そうこの人物はかつたるいからと儀式や祭典以外はあまり敬礼や敬語をさせないのである

義之「純一さんも車に乗りますか？」

純一「おう！ありがとうございます」

そう純一さんが微笑みながら言う

そうして俺達は車に乗った

純一「そうだ、さくらの所に寄ってくれるか？」

義之「わかりました」

麻耶は無入電気車の行き先を変更した

そうして到着したのは天枷研究所だ、ここにさくらさん専用の研究スペースがあるのだ

義之たちは守衛に挨拶して、受付係りにさくらさんの居所を聞いて確認して廊下を進んだ

そうしてしばらく進むとドアにく芳野さくら研究室>>と書かれたプレートが見えた

純一「ここだな、さくら、入るぞ？」

と言いながら純一さんはドアを開けた、その瞬間

さくら「うにゃー！？今はダメー……！！！」

とさくらさんが叫ぶ声が聞こえた途端だった

カツ！！ともの凄い光が溢れ

麻耶「眩しい！」

義之「麻耶！」

俺は反射的に麻耶を庇った瞬間

ボン！！と爆発がした

義之「ゲホ！一体なにが？」

と俺は研究室のほうを見た

さくら「ケホケホ・・・、みんな大丈夫？」

義之「俺と麻耶は大丈夫です！」

俺は腕の中で真っ赤になって固まっている麻耶の無事を確認してか

ら言った

義之「純一さん！大丈夫ですか！？」

さくら「お兄ちゃん、大丈夫?!」

と先ほどまで純一さんが居た場所を見る、最初は煙で全然見えなかったけど少しすると晴れて、そこに居たのは・・・

? 「げほげほ・・・義之お前俺じゃなくて恋人を守ったな？」

義之「・・・え？」

麻耶「・・・はい？」

自分と同じ年くらいの青年だった

義之「えっと・・・どなた？」

とりあえず俺は聞いてみた

? 「え、誰って俺は朝倉純一だが・・・ってなんだこれ？」

目の前に居る青年は自分の体をみて驚いている

さくら「けほけほ・・・えらい目に・・・ってお兄ちゃん!？」

さくらさんは目の前に居る青年を見て驚いたように言った

麻耶「お兄ちゃんって・・・ええ!？まさか純一大総統閣下!？」

義之「なに!？」

流石の俺でも驚いた、だって目の前に居るのはどう見ても同じ年しか見えないからだ、とその時だった

？「ミステリー……だ……！……！！！」

と叫びながら天井の通風孔から1人の若い男性が逆さづりで現れた
純一「杉並！？お前どこから現れてるんだよ！？」

杉並だと！？そう言われると確かに杉並に見えるが、少し違和感が
……

麻耶「ねえあの入って情報省の代表の杉並中将じゃ？」

義之「ああ、あの飄々としてて掴みどころがない爺さんの……
え？」

そう言われると確かにあの服は情報省を現している襟が黄色だ（軍
は黒）

としているうちに旧杉並が通風孔から綺麗に着地して

旧杉並「ふ、ミステリー有る所に、この俺アリだ！！」

ああ、杉並は何処まで行っても杉並だと納得してしまう言葉だ、と
次に

後ろのドアが開いた

？「朝倉君！これはどうなってるんですか！？」

と現れたのは赤い髪が膝くらいまで伸びている若い女性

純一「ことりまでか！？」

ことりだと？まさか……

麻耶「ことりって、あの白河プロモーションの白河ことり社長！？」

やっぱりね……、と俺が半ば思考停止しかけた時

？「朝倉！これはどういうことだ！？」

と現れたのは和服を着た髪がショートカットの和式美人だった

ことり「叶かなえちゃん！？」

叶だと？

麻耶「今度は内務省の工藤叶くどうかなえ大臣！？」

もうどうにでもなれ……と思ったら

？「朝倉！これはどういう事よ！」

とショートカットの勝気な女性と

？「朝倉君！どうなってるんですか！？」

とちよつとオツトリした女性が現れた

純一「眞子に萌先輩!？」

今度は誰よ

麻耶「水越総合病院の水越萌院長に水越眞子副院長まで……」

VIPばつかな……

?「朝倉様!これは一体!？」

と今度は巫女服の女性が来た!?

純一「環!？」

その名前は確か……

麻耶「今度は、湖ノ宮神社の代表さんまで……」

若干一般人寄りだな……(かなり失礼)

?「朝倉さん!なんなんですかこれは!？」

?「なんで若返つてるんですか!？」

と清楚な服を着た頭にリボンを着けた女性とメイド服を着た女性が

さくら「うにゃ!?!美咲ちゃんに、明日美ちゃんまで!？」

その2人は確か……

麻耶「鷺沢輸送会社の会長にその侍従長さんまで……」

と次に

?「朝倉先輩!何が起きたんですか!？」

と犬を連装する元気な人物が

純一「うお!?!わんこ!？」

わんこ?

さくら「うにゃ!?!美春ちゃん!？」

その名前は……

麻耶「天枷研究所の副所長まで……」

こここの副所長かよ……

?「あわわわ!?!朝倉君なんなんですかこれは!？」

と眼鏡をかけた、ちよつと落ち着きのない女性

純一「うをう!?!ななこか!？」

ななこつてたしか……

麻耶「初音島最大の雑誌社の桜花講談社の社長さん!？」

あー、あの元作者さんか

?「先輩……!!？」

と今度は小柄な人形みたいにかわいい人が

純一「アリスか!？」

もう驚かないよ……

麻耶「月城財閥の代表さん……かわいい(ボソリ)」

ん?麻耶?今なんて言いました?

そして、最後に

?「兄さん!どうなってるんですか!？」

と現れた人物を見て俺は

義之「え!?!由夢!?!……じゃない?」

見た目は由夢に似ているが、お団子頭じゃないし何より首に鈴が着いている

純一「音夢!?!」

さくら「音夢ちゃん!?!」

なんですと?

麻耶「国境なき医師団代表の、朝倉音夢さん!?!」

どうやって来たんだ?

純一「お前確かパキスタンに行ってたんじゃ!?!」

音夢「仲間に頼んでジェット機で送ってもらったんです!」

ああ、脇に抱えてるパラシュートがそうか

麻耶「なんで全員若返ってるの……?」

そんなの俺が1番知りたいよ

で始まりにいたるわけで

さくら「うにゃー、とりあえずここじゃなんだし家に行こうか?」

とさくらさんが言ったので

芳野家に全員集合したら

義之「流石に狭いな」

いくら広い芳野家とはいえ、10数人は狭い

純一「で、なんでこうなったのか説明しろ、さくら」

さくら「うん・・・、それはね僕が作った魔法薬が原因なんだ・・・」

全員「魔法薬?」「」「」

なんじゃそりゃ?

さくら「簡単に説明すると魔法の力を強める薬なんだ」

音夢「なるほど・・・」

さくら「で、あの時僕は昔を思い出してて、懐かしいって思ったから、多分だけど魔法の桜が願いを叶えて」

純一「それを、その魔法薬が強くしたってことか?」

さくら「うん・・・」

うーむ、これぞ

旧杉並「摩訶不思議まかふしぎだな」

音夢「で、何時戻るの?」

確かに気になるなそれは

さくら「うにゃー、それがね・・・わからないんだ」

全員「なーーーーー!?」「」「」

鼓膜が破ける!

さくら「だって、こうなるなんて予想してなかったんだよー!」

まあ出来たら凄いな

麻耶「では、どうするんですか?」

さくら「とりあえず、戻るようにはして見るけど、今日は皆家に

泊まってね?」

純一「ま、仕方ないな」

音夢「こんな姿じゃ戻れないしね」

全員「お世話になります!」「」「」

さくら「それじゃあ、ご飯にしようか」「」

END

おまけ1VIP大騒動(後書き)

つてことで、思いつきで書きました、因みに紫和泉子と霧生香澄は都合により出せませんでした。

2人のファンの方は申し訳ありません!(土下座敢行)
だって幽霊と星に帰った宇宙人なんてどないせーと!?
ではここからは

あとがきコーナーダゼ!

作者「はい、始まりました、あとがきコーナーです、司会は俺、作者の京勇樹と」

雪音「田原雪音でお送りいたします」

作者「このコーナーは皆さんからお送りいただいた、要望に答えます!」

雪音「まだ一通も着てないけどね」

作者「ぐは!?!それは言わないで!悲しいから!?!」

雪音「では本日のゲストはこの方!」

さくら「どうもー 芳野さくらです!」

作者「なんか無視されたけど、ではさくらさん、これを読んでください」

さくら「うにゃ?これを言うの?」

雪音「はい、お願いします」

さくら「わかった ではではー」

と深呼吸するさくらさん

さくら「全力!全壊!(誤字では無い)ディバイン・スター!!!
カッ!

作者「マジで!?!」

背後にあった壁に穴が開いた!?!

雪音「本当になにか出たわね・・・」

さくら「にゃははーやりすぎちゃった」

作者「まあ、次回までに直せばいいや」

雪音「直るのこれ？」

多分

作者「では、本日はここまで」

さくら「みなさん、また次回まで」

雪音「さよーならー」

要望がある方は言わせたいセリフ（番組名や本の名前も書いて）、
言わせたいキャラ名を書いてください
感想も待ってます！！

運命の分岐点 *side* 軍 (前書き)

なんとか早く書き上げました
さてここから話はどつなるのか

運命の分岐点 side 軍

ここはある軍施設の地下にある会議室

義之「さて推薦された人物についてだが」

と義之が発言した時

書類が詰まれた机の上に備え付けられた電話が鳴った

麻耶「義之外線よ？しかも直通」

麻耶が電話の光つてる部分を見て言った

義之「直接とは珍しいな」

軍施設では外部の電話は一度オペレーターに繋がり、そこから各部署の各人に繋がる仕組みになっている

しかも、今義之達が居る施設は特殊部隊専用の施設のため、なおさらセキュリティは高い

従ってこの軍施設に直接外部から電話をかけられるのは僅か一握りしか居ない

義之は受話器を取り耳に当てた

義之「はい、桜内さくらないです、……………あ、さくらさんですか」

さくらとは本名、芳野よしのさくらといい年齢不詳の金髪ツインテール、碧眼が特徴の義之の保護者で、現在は初音島の大統領だ

義之「はい、確かに居ますね、……………え！？ちょっとどういうことですか！？」

義之は成績とプロフィールが書かれた書類を見てから驚いた声を上げた

室内に居る人達、ワルキューレ隊の隊員は全員頭上に？マークが出ている

義之「はい……………はい、これから直接そちらに向かいます、はいでは」

と義之が受話器を戻したら

？「弟くんどうしたの？」

と聞いてきたのは腰まで伸びた髪を後頭部のあたりで大きなリボンで纏めた女性だ、名前は朝倉音姫あさくろねと言い、なんで弟くんと呼ぶのかと言うと、昔一時期さくらが忙しかつた時期に朝倉家に預けられていた為に、音姫やその妹の由夢ゆめと兄妹同然で育つたからだ、因みに由夢は兄さんと呼ぶ

因みに高坂まゆきの義之の呼称の仕方は音姫の影響である

義之「いや、それがさ、音姉おとねえよく要領がわからないから、今からさくらさんの所に行つて来る」

義之はそう言いながらハンガーフックに引つ掛けておいた仕官服を羽織ると

義之「麻耶、悪いけど一緒に来てくれ、それと会議は中止で朝倉大佐に伊隅中佐、高坂中佐はその書類の処理を頼みます」

音姫「わかつたよ、お姉ちゃんにお任せ！」

と音姫は胸を張りながら言い

伊隅「は！お任せください」

とみちるは敬礼しながら言い

まゆき「任せてよ弟くん」

まゆきは右手の親指を立てながら言つた

そして3人以外の隊員は解散して通常シフトに戻つた

空気が抜けるような音がしてドアが開き義之と麻耶は廊下に出て歩き出した

麻耶「それにしても、さくらさんから直接電話なんて珍しいわね？で用件はなんだつたの？」

義之「いや、それがさ、ほれ候補の訓練生に土見稟つて居たる？」

麻耶「ええ、居たわね、その訓練生がどうしたの？」

義之「それがさ、採用しても実戦部隊には入れるなつて」

麻耶「え！？なんで!？」

義之「そんなの俺が知りたいよ、それにさくらさんもなんか困つてた様な言い方だつたし」

麻耶「困つてた？」

2人は長い廊下を歩きエレベーターに乗った

義之「ああ、だから今からさくらさんの所に向かうのさ」

麻耶「なるほどね」

エレベーターが止まりドアが開いたので2人は降りて、玄関の自動ドアを超えると

？「御2人とも車は回しておきました」

そう敬礼しながら言ってきたのは、眼鏡をかけていかにも出来ませぬ的な雰囲気の女性だった

義之「ありがとうございます、のほとけ布仏技術大尉」

その女性の名前は、のほとけ布仏虚と言いつつワルキューレ隊の整備班の副主任をしている、因みに主任は麻耶だ

虚「行き先は既に入力済みですから、後は自動操縦で行きますよ」

麻耶「ありがとうございます、本当なら私の仕事なんですけど」

麻耶は申し訳無さそうに言った

虚「いえ、好きでやってることですから」

虚さんは微笑みながら言うと

虚「では、お気をつけて！」

と敬礼で見送った

麻耶と義之は軍用電気自動車に乗って出発した

義之「あの戦いからもう2年か、大分復興したな」

義之は窓の外を見ながら言った、あの戦いとは「タイタン戦争」のことだ

麻耶「ええ、そうね」

麻耶もそれに同意した

そして車は橋を渡り始めた

初音島は三日月型の島の周囲に9個の、メガフロート巨大人工島を浮かべている、義之達が居たのは1番端の9番島で通称「軍艦島」と呼ばれている

島で、名前で分かると思うが軍事関係の施設が集中している

そして橋を渡ると義之達の視界に閑静な住宅街が入った

麻耶「だいぶ、神族や魔族の人たちが増えてきたわね」

麻耶は窓の外を見ながらそう言った

義之「ああ、確かにそうだな」

義之も窓の外を見ながらそう返事をした

窓の外住宅街を色んな人達が歩いている、だがしかしその人達の中に耳が長い人達がちらほら居るのが見えた

麻耶「<開門事件>からもう10年たつのね……」

義之「ああ、そうだね」

<開門事件>とは、今から10年前に太平洋上に存在していたとある島の遺跡に突如巨大な門が出現して、門から神族と魔族と呼ばれる人達が現れ、更に神界と魔界が存在して、その2つの世界に繋がった事件だ

しかも、その事件により今まで絵空事だと言われていた魔法の存在が実証されたのである

義之「(ボソリ)まあ、俺達は大して驚かないけどな……」

なぜ義之達は魔法に驚かないのかは後で記す

そして車はまた橋を渡った

麻耶「もうすぐ<本島>ね」

義之「ああ」

初音島の<本島>とは三日月型の島をさす

周囲に2重に展開しているメガフロートは外側に軍関係と湾口が集中して

内側のメガフロートには民間用が集中している

そして中央にある本島には初音島の政府関係と統合軍司令部、更に

天枷研究所が存在している

その本島にさくらの居る大統領執務室のある施設がある

義之「純一じゅんいちさんはちゃんと仕事してるだろうな？」

義之は普段から「かつたるい」が口癖の自分の上官を思い出した

麻耶「大丈夫よ、やよいさんがついている筈だから」

やよいとは本名、伊隅やよい《いすみやよい》と言い伊隅みちるの姉だ

義之「まあ、やよいさんが居るなら平気かな・・・」

そうこうしている間に目的地に到着したようで、車のドアが開いた
義之「さてと入りますか」

と義之は呟き建物に入った

受付嬢「本日はどういったご用件ですか？」

受付カウンターに座っていた女性が聞いてきた

義之「統合軍特務隊桜内義之大佐と秘書官の沢井麻耶少佐です、芳
野さくら大統領に呼ばれたので来ました」

受付嬢「はい、かしこまりました、確認しますので少々お待ちくだ
さい」

そう言つて受付嬢は受話器を取つて電話をかけ始めたので、少し待
つと

受付嬢「はい、確認しました、そちらのエレベーターへどうぞ」

と受付嬢は右手にあるエレベーターを示した

義之「ありがとうございます」

と言つて義之が受付から離れると後ろから

「ねえ、今のつてあの英雄よね？」とか「間違いないわよ、あの守

護神よ！」やら聞こえる

麻耶「相変わらずの人気者ね義之？」

と麻耶がからかう様に言つた

義之「英雄なんてガラじゃないんだけどなー」

と義之はため息をついた

エレベーターに乗り地下8階のスイッチを押す

エレベーターがゆっくりと地下に下りていく

そして地下8階についてドアが開くと、目の前を自身より高く書類
を持ってフラフラ歩いてる小柄な銀髪の女性が居た

義之「よつと、大丈夫かアイシア？」

？「え！？あ、ありがとうございます！」

そう言つたのは見た目10代の銀髪赤目の小柄な女性だ、名前はア
イシアと言つ、因みにさくらと同様年齢不詳である、だが少なくとも

も純一やさくら、音夢と同一年くらいの筈だが・・・若い
義之「さくらさんの補佐ありがとうな」

アイシア「ううん、これくらいやらないと、だって私副大統領だも
ん！」

そうなんとアイシアは副大統領なのだ

義之「そうだったな」

アイシア「そういえば、義之くんはどうしてここに？」

義之「さくらさんに呼ばれてきたんだよ」

アイシア「さくらに？」

義之「ああ、さくらさんはいつもの部屋か？」

アイシア「うん、そうだよ」

義之「じゃあついでに運ぶか」

麻耶「そうね」

アイシア「ええ！？悪いよ！」

義之「道すがらだし、どうせ隣の部屋なんだし、構わないさ」

そうアイシアの部屋はさくらの部屋の隣なのだ

と、その時

？「桜内さん、アイシアさんの荷物は私が持ちますよ」

と優しい声が聞こえた、声の聞こえた方向を見るとそこにはメイド
服を着た物腰の柔らかい女性が居た

麻耶「あら、美冬調子はどうか？」

美冬「はい、オールグリーンです」

どうしてこんな言い方かというと美冬はロボットなのだ

正式名称はH M I A O 8型 美冬みふゆといい現在初音島で広く普及して
いるロボットμ《みゆ》のオリジナルなのだ、ただしこちらは普
及しているのとは違い感情モーションのリミッターが外されている
ので普通の人間と対応などがほとんど変わらないのである

義之「美冬さん、ありがとう」

美冬「いえいえ、それより早くさくらさんのところに行って下さい、
大分お困りの様子でしたよ？」

義之「はい、わかりました」

麻耶「それでは」

アイシア「義之くん、麻耶ちゃん、またね」

義之達はアイシアを美冬に任せて先に進んだ

そしてしばらく歩くと目の前に木製の立派な扉が見えて扉の上には

<大統領執務室>と書いてある

義之「相変わらず立派な扉で」

義之はそう言いながらノックをすると中から

?「あ、義之くん?入って入って」

と言う声が聞こえたので、義之は扉を開けて

義之「失礼します!初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊長桜

内義之大佐!」

麻耶「及び副官沢井麻耶少佐出頭しました!」

と2人そろって敬礼しながら名乗った

すると

?「もう硬いよー2人共?いつもどおりでいいのにー」

と2人の前に金髪でツインテールそして碧眼が特徴の小柄な女性が

走ってきた

義之「これは礼儀みたいなものですよ」

麻耶「そうですよ?さくらさん」

そうなにを隠そうこの10代前半の子供にしか見えない人物こそ初

音島大統領芳野さくらその人なのだ

義之「で、あれはどういうことですか?土見訓練生を採用しても実

戦部隊に入れるなっつのは」

さくら「うにゃー、それは・・・」

とさくらがしゃべりにくそうにしていると

?「それは」

?「俺達から説明させるや」

義之は声のした方向を見ると2人の男性が居た、ただしそれは人族
ではなく

麻耶「神族と魔族？」

そうその2人は神族と魔族なのだ

義之（この2人どこかで見たような？）

義之がそう内心首を傾げていたら

？「おっと自己紹介が遅れたね、私はフォーベシイ魔界で王をやらせてもらっているよ」

と黒い服を着た、耳が異様に長く全体的に線が細い男性が言う

？「俺はユーストマだ、神界で王をやってる、まあよろしくな」

と着流し（和服の1種）を着たガタイのいい魔族ほどではないが耳の長い男性が名乗った

義之「自分は初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊長桜内義之大佐であります！・・・え？」

麻耶「私は同部隊の副官沢井麻耶少佐であります！・・・え？」

義之&麻耶「えええー！ー！ー！ー！？」

2人は敬礼した状態で驚いた

義之（そうかこの2人資料で見たんだった！）

麻耶「王様でありましたか！失礼しました！！」

魔王「いやいや、私達も自己紹介していなかったからね」

神王「気にするな嬢ちゃん」

そう2人は笑いながら言った

義之「で御2人が居ることが先ほど言っただけの説明に繋がるんですね？」

神王「おう！その通りでい！」

魔王「察しが良く助かるよ」

さくら「まあとにかく座ろうか？」

そうさくらに促されたので全員ソファに座った

因みに席順は右側に義之・さくら・麻耶で左側に神王・魔王だ

義之「で、御2人も土見訓練生を実戦部隊に入れるなっていうのはどうですか？」

神王「あー！」

魔王「それはだね……」

と2人が喋りにくそうにしていると

義之「そもそも、わかってるんですか!? 貴方達、御2人がやるうとしてるのは条約違反ですよ!？」

条約とは今から8年前に人族・魔族・神族の交流都市を世界中に作った際に制定されたもので、その内の1つにく魔法の軍事転用は禁止（医療は別）>とありそれに付随する形でく神族と魔族は如何なる理由があるうとも軍に介入することを禁ずる>とあるのだ

神王「まあ、そうなんだがな……」

魔王「これには訳があつてね……」

義之「訳ですか……お聞かせください」

神王「うむ、実はうちの娘のシアと」

魔王「私の娘のネリネちゃんかね」

神王&魔王「土見稟ちゃん（殿）のことを好きになつててね（なつちまつててな）」

麻耶「それって、つまり……」

神王&魔王「次期王様候補さ（だ）」

義之&さくら&麻耶「なにー！ー！？」
部屋が揺れるくらいに3人の叫びが響いた

流石に3人揃って驚いたようだ

義之「確かに、それは出しにくいですね……」

義之も流石に唸るしかなかった

魔王「頼む！」

神王「たつた1人の娘の願いを叶えてやってくれ!!」

なんと2人の王は義之に対して土下座までしてきた

義之「ちょ!?! 頭を上げてください! 王がそんな簡単に頭を下げないでください!」

義之も流石に慌てて2人に頭を上げるように促した

魔王「じゃあ、聞いてくれるのかい!？」

2人の王は嬉しそうに頭を上げて義之を見た

義之「いえ、流石にそれは・・・、それにせつかく見つけた新人ですし、なにより・・・」

神王「なにより？」

義之「これは彼の人生です、彼が望んで訓練生に、軍人になると決めたんです、我々にとやかく言う権利はありません」

それを聞いた神王と魔王は、ハツとしたように

神王「すまねえ・・・」

魔王「少し焦りすぎたようだね・・・」

義之「いえ、御2人のお気持ちもわかります」

と義之が言い全員が悩んでいると

麻耶「そうよ！義之！総戦技演習よ！！」

義之「そうか！その手が有った！」

義之は麻耶の言葉を聞いて思い出すように手を打った

魔王「なんだい？」

神王「その総戦技演習ってのは？」

義之「正確には、総合戦闘技術演習と言います」

麻耶「総合戦闘技術演習は簡単に言うと、訓練生の卒業試験でして

義之「その最終日に面接があるんです、その時に自分が直接言います」

魔王「ネリネちゃん達のことをかい？」

義之「はい、それで土見訓練生に直接選んでもらうなら、御2人も

文句は無いですね？」

魔王「そうだね」

神王「ああ、ねえな」

義之「よかった、じゃあ麻耶頼んだ」

麻耶「ええ」

麻耶は返事をするに携帯端末を操作した

魔王「なにをしたんだい？」

義之「データを書き換えて自分が面接官というふうに変更しました」
神王「おいおい、それはいくらなんでもやり過ぎじゃあないんか？」

さくら「うにゃー、そうでもないんだよ、ワルキューレ隊は表向き大総統直轄ってなってるけど」

神王「けど？」

さくら「じつは僕の直轄部隊でもあるんだよね、にしても義之くん、やるなら言ってよね？」

気付くとさくらの手元には球状のフルカスタマイズの空中投影式キ―ボードと空中投影式モニターが展開していた

義之「すいません、さくらさん」

どうやら義之がやった事をさくらが許可したらしい

魔王「つまり君達には大統領並みの権限があるってことかい？」

義之「まあ、そうですね、あまり使いませんが」

と言うと義之と麻耶はソファから立ち上がり

義之「では我々は職務がありますので、失礼します！」

と敬礼して部屋を退出した

神王「若いのにいい眼をしてるじゃねえか」

魔王「そうだね、優しく、力強い意思、何より覚悟を持っている者の眼だね」

さくら「にゃはは、それは当たり前だよ、義之くんは<初音島の守護神>なんだから」

運命の分岐点 side 軍（後書き）

はい、親ばかズとのファーストコンタクト完了です！！
ようやくここまで来たぜ、長かった
ってわけで

ここからは後書きコーナーダゼ！！

作者「はい、始まりました！このコーナー司会は私、京勇樹と」

雪音「アシスタントの、田原雪音たはひゆきねでお送りします」

因みに前回壊れた穴は補修済み

作者「では、本日のゲストはこの2人だ！」

義之「呼ばれたから来ました、桜内義之さくらいよしゆきです」

麻耶「ここに来たのは初めてね、沢井麻耶さわいまやです」

作者「はい、主人公とその恋人です！！」

雪音「狭くてごめんね？」

義之「いえいえ」

麻耶「で呼ばれた理由はなに？」

作者「はい！御2人にこれを読んでもらいたくたくて

とゲストに紙を渡す作者

義之「これを？」

麻耶「読むの？」

雪音「ええ」

作者「では、どうぞ！！」

麻耶「お願い、無事に帰ってきて・・・」

義之「うあーーーーー！！」

作者通信役「米国宇宙総軍よりハイヴ攻撃中の全部隊へ通達、至急
退避せよ、繰り返す、至急退避せよ、米国宇宙総軍は新型の対ハイ
ヴ兵器の使用を決定した、攻撃範囲内より至急退避せよ」

義之「もう・・・、この町で、誰も、誰も死なせたくないんだー
ー!!!」

作者「はい、おつかれさん」

義之&麻耶「……………（顔真つ赤）」

雪音「あら顔真つ赤」

作者「初々しいねー」

ジャキ!

作者「あれ?なに銃抜いてるの?しかも38口径の拳銃を」

麻耶「なにやらせるの……………」

義之「この野郎はー!」

ドドドドドドドド!!!

作者「甘いわ!」

トリックスの オやエー エント並に避ける作者

義之「なに!?!」

麻耶「全弾避けた!?!」

作者「ふははは!命中率85%回避率99%、Nタイプ評価Aを舐めるな!」

雪音「これは作者がZガンダムで実際に叩き出した評価です」

義之「なんて、出鱈目な回避率!」

雪音「また壁が壊れた……………」

作者「まあ次回には直ってるよ、ってな訳で」

雪音「今回はここまで」

全員「……………またねー!」「……………」

作者「引き続き要望、アドバイス等お待ちしております!相変わらず
1通も来ないからさびしいです……………」

運命の分岐点 *side* 学校 (前書き)

今回は難産でした、時間が掛かってすいませんでした

運命の分岐点side学校

?side

?「みんな、おはよ・・・」

今日、私、八重桜やえさくらは今日いつもの様に学校に登校して教室に入って驚きました、だって

?「ここは、何時から女子高になったのだ?」

そうなんです、教室に居るのは女子だけで男子は誰1人として居なかつたのです

あ、因みに先ほど私の代わりに言ってくれたのは、いつもの様に一緒に登校した天枷美夏ちゃんです

?「おはよーなのですよ、さっちゃんに美夏ちゃん」

そう挨拶しながら近づいてきたのは右目が赤で左目が青のオッドアイが特徴でクラスメイトの麻弓あしな「タイムちゃんです

美夏「で、麻弓よどうしてこうなったのだ?しかもあの変態メガネまで居ないとは」

と美夏ちゃんは麻弓ちゃんに質問しました、因みに美夏ちゃんが言った変態メガネとはクラスメイトの緑葉樹君みどりばいつきのことです

麻弓「あのね今日転校生が来るって皆職員室に行っちゃったのですよ」

と言いました

美夏「ふむ、確かに風紀委員会でも話題になつてたな」

と美夏ちゃんが言いました

桜「へー、そういえば前に麻弓ちゃんが教えてくれたよね」

私は以前登校した際に麻弓ちゃんが言った言葉を思い出しました

美夏「だからといって、男子全員が居なくなるとは・・・」

麻弓「それがね美夏ちゃん、その転校生凄極上なのですよ!しかもさっちゃんクラスの!」

と麻弓ちゃんは私を指差しながら言いました、麻弓ちゃん人を指差

すのは・・・って!!

桜「私はそんな極上じゃないよー!」

私は必死に反論しましたが

美夏「何を言う八重、八重は十分極上だぞ」

麻弓「そうなのですよ! さっちゃんには知らないだろうけどファンクラブまであるんだから!」

うう、噂には聞いていましたが本当に存在したなんて・・・

桜「それを言うなら美夏ちゃんや麻弓ちゃんだって十分極上ですよー!」

と私は必死の反抗を試みましたが

美夏「いや、八重には負ける」

麻弓「さっちゃんには負けるのですよー」

と一蹴されました、うう・・・

とその時チャイムが鳴ると同時に教室のドアが開き

? 「いやー、世の中は広いね、まさか桜ちゃんクラスがまだ居たとは!」

と眼鏡をかけた男子、緑葉樹君が言いました、うう・・・また言われた・・・

? 「たく! 今回は見逃してやらんでもないが、お前ら次やったら問答無用でタイヤ引きグラウンド50周させるからな!」

と言いながら入ってきたのは腰まで伸びた綺麗な黒髪にスタイル抜群の担任の、紅薔薇撫子先生ベニばらなでしこの通称、紅女史ベニしよしです

? 「あははは、皆さん席に着いてくださいね?」

と次に入って来たのはサイズが合っていないのかダボダボの大きい服と、同じようにサイズが合っていないのかすぐにズレル眼鏡をかけた女性で副担任の、山田真耶先生やまたまやです

因みに学校のグラウンドは平均して1キロあり、最大だと陸上競技が練習できるようにと5キロまであります

紅薔薇「さて!、既に知っている者も多いと思うが今日からこのクラスに新しい仲間が加わる!」

と撫子先生が行ったら男子が全員クラッカーを出しました、何処からだしたんでしょうか？

紅薔薇「さて、では入れ！」

撫子先生が行ったらドアが開きました、その瞬間男子が一斉にクラッカーを鳴らしました

？「おう、なかなか面白いクラスみたいじゃねえか、なあまー坊？」

？「そうだね、神ちゃん《しんちゃん》このクラスなら楽しく過ごせそうだね？」

入って来たのは2人の男性でした・・・あれ？

桜「麻弓ちゃん、この2人が転校生？个性的って意味では確かに極上だけど・・・」

私は後ろの席の麻弓ちゃんに聞きました

麻弓「ぶんぶんぶんぶん！違う違う違う！！」

と麻弓ちゃんは高速で首を振りました

桜「緑葉君？」

私は次に右斜め前に座っている緑葉君に聞きましたが樹「そ、そんなわけないって！？」

と緑葉君は即答しました

真耶「な、なんで御2人が来るんですかー！？」

山田先生は混乱しながら聞きました（まるで子犬みたいです）

？「いや、なにな、シア達が過ごすクラスがどういうクラスか気になつてな」

？「うん、ついでに釘を刺そうかと思つてね？」

真耶「釘ですか？」

なんででしょうか？

？「いいかお前ら！シアとネリつこには婚約者が決まつてる！」

と言つたのは着流しを着たガタイの良い神族の男性でした、もう婚約者が決まつてるんだ！

？「もし、その仲を引き裂こうなんて考えたら、分かつてるよね？」
そう言つたのは魔族の男性の顔は笑ってましたが・・・

クラス男子一同「「「「サー・イエツサー!!」「」「」」
と男子全員が一糸乱れずに返事しました、気持ちは分かるよ、だっ
て……怖いんだもん

?「お・と・う・さ・ん!」

?「おご!?!」

ドゴ!

という音とともに神族の男性の頭が横にズレました、なんで?

?「シア、椅子はやり過ぎだつて教えてただろうが?」

神族の男性が後ろを向きながら言いました

え?椅子?

?「普段血の気が多いからこのくらいがちょうどいいんです!!」

と両手にパイプイスを持った腰まで髪が伸びた神族の女の子が居
ました、まさかあれで殴つたのかな?

?「お父様もやり過ぎです、クラスの方々が怖がつてるではありません
せんか」

と魔族の男性の横に腰まで伸びた髪と胸の大きい魔族の女の子が居
ました、……かわいいです

?「いやー、ごめんねネリナちゃん、ネリネちゃんの恋を応援した
くてつい」

娘さん思いのお父さんです

?「おい、そういやあ嬢ちゃんはどした?」

あ、そういえば3人つて話でしたね、3人全員このクラスに入れる
つてのはやり過ぎなんじゃ

?「そうだね、このクラスに知り合いが居るつて言うから入れても
らったけど」

へー、知り合いですか、誰でしょうか?

?「あれ?そういえばカエちゃん?」

と神族の子が周囲を見回しました

?「あら?カエデさんは?」

え?かえで?そんな……ただの偶然のはず……

美夏「む？どうした八重？そんな顔して」
麻弓「そうなのですよ、まるで幽霊でも見たような顔しちゃって」
だって、楓ちゃんは2年前に死んだはずなのに……
？「ほーら！カエちゃん、早く入るの！」
と神族の子がドアの所から1人の手を引っ張ってます
？「あ、あの！シアちゃん！？まだ心の準備が！！??」
え……？この声は……
クラスに入って来たのは明るい茶髪を肩のあたりで切りそろえた赤
いリボンがトレードマークの女の子でした……
紅薔薇「それで、そろそろよろしいでしょうか？」
撫子先生の顔は笑顔でしたがプレッシャーが凄いです……
5人「……はい……」「……」

閑話休題

シア「リシアンサスです、少し長いのでシアって呼んでほしいっす
！」
クラスの男子のボルテージが高いです
ネリネ「ネリネと申します、よろしければリンとお呼びください」
礼儀正しい子です
神王「俺の名前はユーストマだ！シアの父親でもあるし神界の王を
やってる、よろしく頼むぜ？」
え？
魔王「私の名前はフォーベシイ、ネリネちゃんの父親であり魔王で
もある、見知っておいてくれたまえ」
はい？
紅薔薇「御2人は結構です、それにまだ1人終わってません！」
撫子先生ご苦勞様です
楓ふようかえで「芙蓉楓と申します、よろしく願います」

ガタンー!!

美夏「どうしたのだ、八重？」

麻弓「どうしたのですよさっちゃん？」

美夏ちゃん達がなんか聞いていましたが、今の私の耳には聞こえて
ませんでした

楓「桜ちゃん、・・・お久しぶりです」

楓ちゃんは優しく微笑みながら言いました

桜「楓ちゃん！」

私は楓ちゃんの駆け寄り抱きつきました

真耶「ちょー!? 八重さんいきなりなんですか!？」

神王「あー、止めるなよ先生さんよ？」

紅薔薇「どういうことですか？」

魔王「この2人はね、2年ぶりに再会したんだよ、しかも楓ちゃん
は死んだことになってる」

クラス一同「「「「「え!?!?」「」「」」」」

神王「まあ、詳しくは嬢ちゃん達に聞きな」

魔王「それではこれにて・・・」

と去ろうとしたら

麻弓「ちよつと待つて欲しいのですよ!? 先ほど御2人の口からな
んか、とんでもない発言があった気がするのですよ!？」

撫子先生はやっぱりなという顔をして

紅薔薇「えー、まあ・・・、そういうことだ・・・、非常に残念・
・じゃなくて、非常に嘆かわしい・・・でもなくて」

撫子先生本音が出てます

紅薔薇「非常に信じられないことではあるが・・・、この御2人は
それぞれ神界と魔界の王の立場にあるお方だ。そして転校生はその
娘さんと友人・・・私の言いたい事は分かるな? 緑葉?」

撫子先生は樹君を見ました

樹「もちろん。大丈夫ですよ。俺様が必ず幸せにしますから!」
と樹君は右手の親指を立てながら言いました

紅薔薇「お前は一切近づくなと言ってるんだよ!!」

撫子先生から凄い殺気を感じました

紅薔薇「あー、次の時間だが自習にする、麻弓、後は頼んだ」

と撫子先生は教室から神王と魔王の2人を押し出しながら去り、山田先生はその後を着いていきました

そこからは質問攻めでした

そして昼休みです

私達は屋上でお弁当を食べながら話してました、すると

？「楓が生きてたつて本当!？」

そう言つてドアを凄い勢いで開けたのは緑の髪をショートカットで切りそろえて左前に一房だけある前髪をリボンで纏めた女子の先輩です(制服のリボンの色が違うので分かります)

楓「お久しぶりです、亜沙先輩」

そう楓ちゃんが挨拶すると

亜沙「楓ー!!」

と亜沙先輩こと、時雨亜沙先輩は楓ちゃんに抱きつきました

楓「すいません、ご心配をおかけしました」

亜沙「本当だよ!？なんで連絡の1つもくれなかったの!？」

楓「すいません、怪我の治療とリハビリに時間が掛かりまして」

亜沙「怪我つて・・・」

？「それについては私から説明します」

と現れたのは膝まで届きそうな金色の髪に青紫の瞳が印象的な神族の女子の先輩でした

桜「あなたは確か生徒会長の」

瑠璃「瑠璃^{るり}マツリと申します、楓さんは2年前のタイタン戦争の時に左手を肘の辺りから失っており、気絶しているのを私が発見し保護しました」

私達は驚きました、だって

桜「え!？でも左手普通に有るよ!？」

そうなんです左手が普通にあつて、しかもちゃんと動いています？「それは神界の医療技術のなせる業ですわね」

と声が聞こえたので見るとドアの辺りに輝く程の金色の髪が腰の辺りまで伸びていて右前に亜沙先輩と同じようにリボンで髪を纏めている緑色の瞳が印象的な神族の女子の先輩が居ました

亜沙「あ、そういうえばカレハも居たっけ」

あー、お料理部の双璧の

瑠璃「発見した後、神王様に頼んで治療を施していただきました」

楓「それで、リハビリに1年近く掛かつちやいました」

瑠璃「しかも、人間界（こちら）の日本では楓さんは死んだことになっていて、更に桜さんや稟殿は初音島に移住なさってましたから探すのに苦労しました」

桜「え！？稟君を知ってるんですか！？」

瑠璃「はい、私は光陽学園の出身です」

桜「あ、じゃあ、・・・あの噂も？」

私は恐る恐る聞きました

瑠璃「はい、存じてますが、楓さんから全て聞いてますので、ご安心ください」

良かったー

瑠璃「それで楓さんはリシアンサス殿下と一緒に人間界に来たんです、私はすぐに初音島に移住しましたが」
なるほど

亜沙「でも稟ちゃんはこの学園には居ないよ？」

桜「そうなんです、私ですら1年以上会ってすらいらないですし・・・」

ー

亜沙「え？そうなの？」

ネリネ「それなら大丈夫です」

桜「え？どうして？」

シア「稟君の居場所なら知ってるっす！」

桜「え！？本当ですか！？」

ネリネ「稟様は訓練校に居ます」
訓練校？

樹「それって、統合軍の訓練校のことかい？」

桜「え！？稟君、軍隊に居るの！？」

ネリネ「はい、以前お父様が交渉に行っていました」

桜「交渉？」

シア「うん、でも確か特務隊の隊長さんと話し合って終わったって
言ってたっす」

美夏「なに！？」

エリカ「隊長と！？」

由夢「兄さんと！？」

桜「え！？3人とも知ってるんですか！？」

美夏「む・・・」

エリカ「え、えーと・・・」

由夢「そ、その・・・」

ジーーーー×複数

由夢「仕方ないですね、このことは口外無用でお願いします」
やった根勝ち！

由夢「まず特務隊長は私の兄さんの、桜内義之兄さんさくらいよしゆきです」

桜「え！？由夢ちゃんのお兄さんって隊長さんだったんだ！しかも

あの英雄！？」

まさかく初音島の守護神>さんがお兄さんとはビックリです！

由夢「ええ、しかも私達はその特務隊に所属しています」

軍隊に所属してるのは知ってたけど、まさか特務隊とは・・・

由夢「それで、先ほど言ってた、土見訓練生ですが、兄さん達が目
をつけてまして」

亜沙「ってことは特務隊に入れるってこと？」

由夢「はい」

桜「早く会いに行かないと！」

美夏「待て！今は無理だ！」

桜「なんでですか？」

エリカ「今、訓練生は総戦技演習真っ最中なんです」

亜沙「総戦技演習？」

なんででしょうかそれ？

由夢「正確には総合戦闘技術演習と言いまして、訓練生の卒業式みたいなものなんです」
なるほど

美夏「総戦技演習は1週間かけて行われるんだが、今はちょうどその期間中なんだ」

桜「なるほど、だから今行っても会えないってことなんですね」

由夢「それに期間が終わっても会えるかどうか・・・」

桜「どうしてですか？」

由夢「特務隊ですから、秘匿性が高いので、情報漏洩を防ぐために面会もかなり制限されてるんです」

桜「そんな・・・」

由夢「私の名前を使えば面会できるかもしれないですよ・・・」

美夏「まあ、奥の手で同じ部隊に所属するという考えもあるな」

楓「そんなことが可能なんですか？」

由夢「まあ短期課程を優秀な単位で卒業すれば可能ですが・・・」

桜「なるほど・・・」

私は楓ちゃんのほうを見ました、どうやら楓ちゃんも同じ考えに至ったようで眼が合いました・・・

楓&桜（稟くん待っててくださいね？）

私達は青空を見上げました・・・

運命の分岐点 side 学校（後書き）

今回は長かった……

はい後書きコーナーですよ！

作者「はい、どうも作者の京勇樹です」

雪音「アシスタントの田原雪音です」

前回穴だらけになった壁は補修済みです

作者「今回のゲストはこちら！」

冥夜「御剣冥夜だ」

まゆき「高坂まゆき《こうさかまゆき》です」

音姫「朝倉音姫です」

作者「いやー綺麗な花ばかりで」

雪音「本当に」

音姫「あはは、綺麗だなんてお世辞でも嬉しいな」

作者「いえ、お世辞ではありませんよ、では今回はこれをお願いします！」

ます！

まゆき「なになにこれを読むの？」

雪音「はい頼みます」

ではスタート！！

音姫「およしなさい、イルフリーデー！もう間に合わないよ……」

まゆき「そんなのやってみなくちゃわからない！！」

冥夜「馬鹿者！この様な……力押しなぞ！！」

まゆき「お願い行かせてヘルガ！人類はまだ戦っている、諦めるなんて絶対に出来ない！！」

作者「はい、おつかれさま」

雪音「どうでした？」

音姫「うん、たのしいねこういうの」

まゆき「うん、なんか新鮮だね」

冥夜「・・・のだ」

作者「うん？なぜに刀を皆瑠神威を抜くのかな？」

冥夜「なぜ私が上官を馬鹿者呼ばわりせねばならんのだ!!」

作者「あぶね！」

壁が切り裂かれて刃が作者に向かう

冥夜「なに！？真剣白刃取りだと!？」

作者「ふはははは！俺は格闘家でもあるのだよ!」

雪音「これは事実です、作者は空手にテコンドーにムエタイに八極拳に合気道に柔道に八卦掌を使います」

まゆき「なにその1人多国籍軍は!？」

音姫「ワルキューレでも十分隊長格で行けるね・・・」

作者「また壁が壊れたよ・・・」

雪音「まあいつものように直るでしょ、では今回はここまで!」

全員「・・・また次回まで、さよーならー!」「」「」「」

引き続き要望や、ご意見感想などをお待ちしております、相変わらず1通も来ないので寂しいです・・・

設定 (11月23日追加) (前書き)

設定ですよ

まずはキャラで

新しく数人追加しています、ネタバレ注意です

設定 (11月23日追加)

桜内義之、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の現隊長、コ
ールサインはオーデイン1、階級は大佐、現在の搭乗機はGAT
-X105ストライク、副官の、沢井麻耶とは恋人同士である、元
は空軍の戦闘機パイロット候補生で優秀な生徒だったが、タイタン
戦争数ヶ月前にMSパイロットに転科した

沢井麻耶、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、コール
サインはオーデインマム、階級は少佐、主には、CPこと通信を
担当、指揮官適正も高いため現在艦長育成コースも勉強中メカニッ
クも兼任しており整備班の班長でもある

朝倉音姫、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、階級は
大佐、特装艦アークエンジェルの艦長を勤める、柔軟な指揮に定評
が有る、容姿端麗、成績優秀であるが、義之にはとことん甘いので
ある、高坂まゆきとは友人関係

伊隅みちる、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊のMS隊副
隊長を勤める才女、コールサインはオーデイン2、階級は中佐、
搭乗機はGAT-X303イージス、何より努力することを怠らず、
今の力も彼女の努力によるものである、結構完璧主義である
4人姉妹で、みちるは次女、姉の伊隅やよいは大総統の朝倉純一の
秘書官を務めていて、3女の伊隅まりかは統合防衛軍の参謀本部に
勤めていて4女の伊隅あきは統合軍の即応MS部隊に所属している

高坂まゆき、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、コ
ールサインはオーデイン3、階級は中佐、搭乗機はGAT-X10
2ASことデュエルAS、アークエンジェル艦長である朝倉音姫

とは旧知の間柄であり、義之や音姫の妹である、朝倉由夢あさくらゆむとも友人である、運動神経は抜群で、訓練生時代は男子女子問わずに高い人気を誇っていて、非公式にファンクラブまで存在している

杉並すぎなみ、初音島統合防衛軍所属であり、以前はGAT-X207ブリッツのパイロットであったが、<初音島防衛戦>で機体が被弾しほぼ大破状態になりその際に負傷しパイロットを引退した。階級は少佐、現在は諜報部に所属していて滅多に姿を見せない

橘菊理たちばなぐくり、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、階級は中佐、搭乗機はGAT-X103バスター、コールサインはオーディーン4、長い黒髪に大きな目にちよつと広い額が特徴である、物腰が柔らかく、いつも柔らかい微笑みを絶やさない、ラウンズ隊に所属している、皐月さつき駆と付き合っている

土見稟、現在訓練生で、206訓練部隊に所属している、2年前の<タイタン戦争>で幼馴染である、芙蓉ふよう楓かえでが死んだと思ひ込み、無力な自分が許せなくて、初音島統合防衛軍に志願した、八重やえ桜さくらとも幼馴染である、右手首に楓が結んでいた赤いリボン巻いている

芙蓉ふよう楓かえで、2年前のタイタン戦争で左手を失う重傷を負い気絶していた所を、瑠璃るりマツリに保護される、その後は神界にて治療を受けて、リハビリを兼ねて神王に仕えていたため家事スキルに磨きがかかり、もはや一流である

八重やえ桜さくら、現在は初音島総合学園高等部普通科2年C組に所属している、クラスメイトの天枷あまかせ美夏みなつとは仲がよく、登校するさいは何時も一緒に登校する、2年前に楓が死んだと思ひ込んでいたため、再会した時は泣いていた、趣味は人形作りで、スタミナが異様に高く、陸上競技の持久走ではいつも上位にランクインしている、家事スキ

ルは高い、稟のことが好きだがなかなか告白できないでいる

朝倉由夢^{あさくら ゆめ}、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属、普段はアークエンジルの衛生班に所属しているが、予備MSパイロットでもある、階級は准尉、朝倉音姫は姉であり、桜内義之とは兄妹同然に育ったため、義之のことを兄さんと呼ぶ、総合学園では八重桜と芙蓉楓とクラスメイトで、天枷美夏、エリカ・ムラサキとはクラスメイトであり、訓練部隊の同期でもある

搭乗機はアストレイ3型スナイパーカスタムが多いが基本オールレンジ対応のオールラウンダー

出撃する際のコールサインはアテナ4もしくはウルド3

天枷美夏^{あまかせ みなつ}、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属、階級は中尉、普段は風見総合学園に通っている、MSパイロットを務めていてコールサインはウルド1、搭乗機は前大戦時に大破したGAT-X207ブリッツと中破したMBF-P03ガンダムアストレイ・ゴールドフレームを合わせて改修強化した機体の、ガンダムアストレイ・ゴールドフレーム^{アストレイ}を神宮司^{じんぐうじ}まりもから引き継いでいる、朝倉由夢とエリカ・ムラサキとは訓練生時代からの同期で、八重桜^{やえざくら}と芙蓉楓^{ふぶつかえで}とはクラスメイトである、本当は今から50年前に作られたロボットで沢井麻耶とちよつとイザコザがあつたが義之の活躍で問題は解決されている、その会があり沢井麻耶とは親友同士だ、今一般に普及しているμ《ミュー》のプロトタイプであるHM-A07美秋^{みあき}やHM-A08美冬^{みふゆ}の更にプロトタイプ、麻耶のお父さんは美夏を参考に美秋や美冬を開発したようだ

エリカ・ムラサキ初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属、階級は少尉、普段は風見総合学園に通っている、MSパイロットでコールサインはウルド2、搭乗機は中距離を中心にカスタムしたアストレイ3型、どうやら東欧のある小さな国の王族の一族とかで教養

は十分

梟月駆、初音島統合防衛軍特務ワルキューレ隊所属、階級は大尉、普段は風見総合学園に通っている、学年は3年生で同クラスに同ワルキューレ隊の田島賢久と天見修、照屋匡、奈月香央里、吾妻汐音、紅野漣、百野栞、水奈瀬ゆかが所属している、過去に両親に姉の梟月菊理と共に捨てられそれ以降は孤児院に居てそこで水奈瀬ゆかと出会った、そしてそこで起こった事件により3人以外殺された、そして孤児院が閉鎖になる際にゆかは引き取り手が見つかったが梟月姉弟は見つからず結果2人だけマンションに住んでいたが姉の菊理が謎の自殺をしましてからは無気力に怠惰に生きていたが訓練生のある日姉そっくりの橘菊理と出会った、それからはお互いに惹かれあい、菊理が訓練生を卒業する際に恋人になった、コールサインはラウンズ2で機体は近接格闘戦重視の機動近距離万能型にカスタムされたアストレイ3型

草壁美鈴、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属階級は少佐、尚、草壁家は昔からの法師陰陽師で本人も術式だけでなく草壁流剣術の達人で免許皆伝の腕前を持つ、副官の梟月駆は美鈴が手ずから草壁流剣術を教えた、その会があつて駆は流石に美鈴ほどではないが剣は達人クラスの腕前を持っている、愛刀は童子切安綱、駆の恋人である橘菊理とは訓練校の同期で義之や杉並とも同期、コールサインはラウンズ1で機体は前大戦時はMBF-02ストライク・ルージュだったが今は織斑千冬が乗っていたMBF-P01のガンダムアストレイ・レッドフレームを引き継いで乗っている

天見修、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属階級は少佐、両親は生死不明、祖父の天見完爾に小さい頃に引き取られ育てられた。髪は濃い栗色でくせつ毛なのか少し外に所々はねていて、長さは耳にかかる程度で切られている。

掛けているメガネは伊達で視力は悪くない、首にヘッドセットをかけており音楽をよく聞いている様だ。

コールサインはウィザード1で機体はオールレンジ対応だが中距離戦闘に比重を置いているアストレイ3型、同隊の奈月香央里中尉と付き合っている。

紅野漣、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属階級は大尉、父親は医者で水越総合病院に勤めている、髪は赤く後頭部の左右で1回お団子状になっていて肩より少し長い位まで伸びていて毛先にかけて少しウェーブしており前髪には三日月型の髪留めが着いている訓練生時代は部隊長を務めていたがその頃から成績では修に負けていたためにライバル視している、負けん気が強く天邪鬼だが基本的に素直な性格で、親友の吾妻汐音には素直に接している。

コールサインはウィザード2で機体は遠距離戦に比重を置いてカスタムしたアストレイ3型

奈月香央里、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属階級は中尉、同隊の天見修と付き合っておりかなりラブラブの模様、整備員の照屋匡軍曹とは幼馴染で腐れ縁、よく喧嘩する姿が見受けられるが仲は良いようだ、髪は淡いピンク色で肩にかかる程度で切り揃えられておりチョココンとはねている前髪が特徴、運動神経は良好で本人もかなり活発な性格な為ムードメイカーの役割も持っている。

コールサインはウィザード3で機体は修とよく2機連携を組むためか近距離戦闘に比重を置いてカスタムされたアストレイ3型

百野栞、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属階級は中尉、以前は別組織に所属していたが、本人の意思により亡命してきた、感情表現が苦手なためか表情も乏しいがよく見ると分かる。

小柄でかわいらしい印象を受けるが時折吐き出す毒舌は凄まじい、髪は淡く青い光沢を放つ銀髪で腰くらいまで伸ばしており、両側頭

部で1房ずつ赤いリボンで纏められており長いリボンは何回か交差
して毛先でもう1回結ばれている。

尚、瞳の色は赤く、肌は透き通るような白い肌。

何時も何かしら本を読んでいて手には黒い革表紙の本を所持してい
る。

コールサインはウィザード4で機体は遠距離戦闘に特化しているア
ストレイ3型。

吾妻汐音^{あづましほね}、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属階級は少尉、
優しく穏やかな性格で訓練生時代は少し引つ込み思案な所があつた
が親友の紅野漣に付き合っているうちに改善された。

紙は美しいピンク色で全体的にふわふわのウェーブが入っている、
お気に入りのストールは漣が買ってくれたものらしく勤務中も身に
つけており、手入れが行き届いているのかいつもふわわりとしている。
コールサインはウィザードママ^{ママ}でCP将校を担当^{コマンダースター}していて、的確に
状況判断するのが好評のようだ。

設定 (11月23日追加) (後書き)

今回は設定を書きましたが、今後ちよくちよく追加で書く予定です
今回都合により後書きコーナーはお休みいたします

新しく追加しました

設定その2（前書き）

設定その2ですよ

今回は世界の状況をお送りします

設定その2

海洋中立独立国家初音島

新太陽暦20年に日本帝国から独立した中立国家、当初は三日月型の島の初音島のみだったが、月城財閥の出資によりメガフロートを建設して国土を広げた

最初の代表者は工藤叶の祖母だった、しかし一族の世襲式だと歪みが発生してしまうと判断して次代からは選挙式になった

なお初音島統合防衛軍は志願式の為、脱走者は滅多に出ない

主な主力機体は現在M1アストレイの後継機のアストレイ2型

JEU

日本帝国とEUこと欧州連合が同盟を結んで誕生した

しかし新太陽暦73年3月にユーラシア連合が武力により制圧

一部の者達は脱出して現在逃走している、そのうちの1部が初音島に亡命している

ラウラ・ボーデヴィツヒは祖国を守れなかった自分の無力さが許せなくて志願したもよう

日本帝国は徴兵式だが脱走者は無し、EUは志願式の為脱走者は無し

日本の主力機は一般は、烈空れっこうと近衛軍は烈空の改良機の、蒼空そうくうと、新型機の、龍閃りゅうせん

EUの主力機はコロニーにて生産されたZGMF-1017ジンを改良して空戦能力と火力を強化したジン・トーナードとAMF-101デインの強化機のデイン・ラファールをライセンス生産している

ユーラシア連合

人口が爆発的に増えすぎた為、経済が破綻した中国をロシアが吸収した形で生まれた巨大国家

しかし、貧富の差が激しく国家内では凶悪犯罪が多発しており、治

安は最悪

軍は徴兵性になっているが、脱走兵が多い、更には1部で強化人間計画も持ち上がっているようだ

主な主力機は前大戦期のストライクダガーの後継機のダガーLと現在ウィンダムが続々とロールアウトしている

N・A・U ネオアメリカ連邦

アメリカ合衆国が中心となり、カナダ、南アメリカ大陸の各国が1つになって生まれた

治安は良好で、貧富の差は大してない

軍は志願式で脱走は無し、優秀ならば黒人だろうと重用するため人種差別は1部はないが、未だ根強い

主力機は前大戦のリーオーの強化改修のリーオーMk?と同じく強化改修したエアリーズMk?

アフリカ共同機構

アフリカ大陸の国家が集まってできた

砂漠の緑化計画により砂漠は減少したが未だに残っている
スラム街があるため治安は悪い

軍は徴兵式だが脱走兵は少ない

主力機はジンの砂漠対応型のTMF/S-3ジン・オーカーとTMF/A-802バクウとバクウの技術を流用したティエレンタイプと最近ロールアウトしたバクウの改良機のTMF/A802W2バクウ・ケルベロスハウンド

赤道連合

赤道下にあつた島国が合併して生まれた
各島に自警団がいるため治安はそれなり

軍は志願式の為脱走兵は無し、しかし他の国に比べると数は少ない
中立国家

主力機はユーラシア連合の払い下げのストライクダガーを改良して使っている

オーストラリア合衆国

オーストラリア諸島が合併して生まれた国家

治安はかなり良い、経済的にもかなり潤っている

軍隊は少なく、非常時には国民皆兵制度により徴兵され義勇軍として機能する

主力機はVMS-15リアルドと最近ロールアウトしたSVMS-01フラッグである

後はどこの国家にも所属していない独立国が多数存在する
主力機は様々

設定その2（後書き）

今回も後書きはカットします

設定その3（前書き）

設定その3です

今回は作者オリジナルMSの紹介です

設定その3

MBF - M1TYPE2 アストレイ2型

17・54m

53・6t

固定武装

頭部75mm対空自動バルカン砲システム イーゲルシュテルン

腰部70式改ビームサーベル

主な違いは背部に準ストライカーシステムを搭載して色々な戦局に対応が可能になっており、今存在しているストライカーパックは

アサルト強襲襲撃パック

スナイパー超遠距離狙撃パック

キャンオン遠距離支援砲撃パック

フライト空戦パック

となっている、更に装甲も新しい発泡金属になっており重さは大して変わらず防御力は向上している

更にOSも、とある人物が考案した新型の物に交換してあり即応性が3割上昇している

更にビームライフルをエネルギーパック式と従来の機体からのパイプ式を用意してパイロットが任意で選べるようにした、エネルギーパック式はアストレイ3型やGATシリーズも使用可能

現在の初音鳥統合防衛軍の主力機

MBF - M1TYPE3 アストレイ3型

17・53m

53・2t

固定武装

手首装甲収納式72式ビームサーベル

頭部バルカン砲を固定式にせずオプション式に変更した（イメージ的にはZガンダムのガンダムMk-?）更にビームサーベルを手の装甲に収納式に変更して取り出し時間を短縮する目的で考案された（イメージ的にはユニコーンガンダムのRGZ-95リゼル）更に背部だけだったストライカーパックシステムを全身にした、その際に装甲と腕部の肘と肩部及び頭部、両脚部の膝部分をブロック式にして整備性の向上も成功した、ストライカーパックは2型と共通で使用可能でパイロット1人1人に合わせて更に装備を変更可能になっていて個人専用機にもなる

現在試験評価中で配備されているのはワルキューレ隊のみでMVF-M11Cムラサメと一緒に評価試験されている

ZGMF-1017/T ジン・トーナード

21.41m

85t

固定武装

背部フライトユニット兼用多目的ミサイルランチャー

腰部 折りたたみ式ハルバート

選択式武装

MMI-M8A3C80mm重突撃機銃

MK-71 120mm突撃長距離支援砲

脚部取り付け式 3連装ミサイルランチャー

M-68 キャトウス500mm無反動砲

L4コロニー群で生産されたMS ZGMF-1017ジンをEUが独自改良強化してライセンス生産している機体、新太陽暦72年11月に近代化改修した、主な改良は頭部のセンサーユニットを新型の小型の高性能のものに換装して頭頂部のトサカを小さくして故障率を低減、更に大気圏内で空戦能力が無かったのを、背中に取り

付けられてた大型スラスタをミサイルランチャー兼用のフライトユニットに換装した（イメージ的にはザクウオーリアのブレイズユニットにM1アストレイのシユライクユニットを合体させた物）、更に腰に装備されていたMA-M3重斬刀を折りたたみ式のハルバート（重斧槍）に交換したことにより格闘攻撃力の向上を図った、それに合わせてマニピュレーターの関節強度を4割程上げた、更に支援能力を得る為に120mm突撃長距離支援砲を新規生産して、部隊運用性を向上させた

最近強化機のリーダーと通信機能、スラスタ推力が強化された
ジン・トーナードADVアドヴァンストがロールアウトされている

AMF-101/D-R デイン・ラファール

19・33m

37・9t

固定武装

胸部多目的6連装ミサイルランチャー

選択式武装

MMI-M8A3C80mm重突撃機銃

95mm対空散弾銃

M-68 キャットウス500mm無反動砲

MK-71 120mm突撃長距離支援砲

L4コロニー群で生産されたAMF-101デインをEUのフランスの軍需産業デユノア社が改修強化してライセンス生産している
主な改修点は全身のスラスタを強力な低燃費のものに換装して推力を強化し、それに合わせて機体に内蔵されていたプロペラントタンクを大型化した

速度はデインよりも約2割強化、航続距離は飛躍的に強化された
スラスタが強化されたことに合わせて武装も強力なものを保持出来るようになった

MSJ-06?AICティエレン無限軌道型

18.3m

122t

固定武装30mm機銃

両肩部固定シールド

選択式武装

200mm×25口径長滑空砲

バッテリー内蔵式380mm単装レールガン

大型カーボンブレード

バッテリー式ビームサーベル

新太陽暦71年に製造されたティエレンにL4コロニー群で製造されたバクウの技術のレールガンとビームサーベルを追加武装で作った更に大きな変更として歩行式だったため遅かったのを早くするため脚部にバクウの無限軌道を採用して砂漠での機動力の強化を図った更にティエレンの地上バリエーションシリーズの脚部も無限軌道式に換装して機動力を強化した
なお選択式武装はティエレンシリーズの共通武装である

JMS-TYPE71(日本以外での表示) 71式MS 烈空^{れっくう}

18.5m

75t

固定武装

頭部 70mm対空自動バルカン砲

腰部 日本刀型近接格闘兵装 斬鉄刀

左腕部 小型ABシールド^{アンチビーム}

右手 71式ビームライフル

日本帝国が初音島からの技術提供により開発した国産MS、主に近接戦闘を重視しており、肩周りの装甲は他の国に比べるとスマートになっている、全体的に鎧武者をイメージさせる造形になっているカラーリングはダークグレーで統一されている、背部に飛行ユニット

トの、飛鳥ユニットあすかを装着することにより空戦能力を得ている、翼の下にドロップタンクを装着することにより航続距離を延長できる、更に無誘導式8連装ミサイルランチャーと対艦大型ミサイルも装着可能

JMS-TYPE71C（日本以外での表示） 71式改MS 蒼空そうくう

20.5m

81t

固定武装は烈空と共通

飛鳥ユニットも装着可能

71式烈空を元にして作った帝国近衛軍専用機体

烈空より大きくなった理由はスラスタの強化や、内蔵式プロペラントタンクの大形化などが要因である

なお烈空よりも全体的に性能は高く、出自と階級によって色分けと機体性能が異なる

一般武家の出身は機体色は烈空と同じくダークグレーが基本色で烈空より推力は3割ほど高い

白は一般より少し階級が高い所謂、豪族生まれの機体で一般機より推力は2割ほど強化されていて、センサーも多少高性能なものを装備している、更に関節強度が2割増しになっていてより格闘戦を重視しているのがわかる

山吹色は中階級の生まれの機体で推力は白より1割高い程度である、関節強度は白より3割増しになっていてセンサーもより高性能なものになっている

赤は御3家に仕える者しか使うことを許されておらず、表示は蒼空高機動型と表示されるほどである、そのため推力は山吹色の3割り増しになっており関節強度も2割増しになっている、センサーは更に高性能のものを装備している

青は御3家しか搭乗できず機体の起動方式も網膜認証であるため完全に個人専用機である

推力は赤の2割増しで関節強度は3割増しとなっておりセンサーも最早別物と言っているほど高性能なものを装備している
紫は征夷大將軍専用機で機体の起動方式は音声認証に網膜認証とかなりのセキュリティになっている

機体性能は最早完璧別物で限界までチューンナップされている

これらの性能から分かると思うが生産性と整備性は度外視されている

JMS - TYPE 73 (日本以外での表示) 73式MS 龍閃りゅうせん

22m

82.8t

武装は全て烈空と共通

専用武装として72式ビームサーベル 春雷しゅんらいが新規生産された
飛鳥・改が専用ユニットとして用意されている

機体性能は蒼空の一般機よりも全体的に3割り増しになっており
機体色の色分け及び性能の高低差はすべて蒼空に準じる

これまた生産性及び整備性は度外視して作られており、近衛軍専用機体として作られた

OZ - 06MS/Mk? リーオームk?

17.5m

8.3t

武装

110mmマシンガン

ビームライフル

500mm無反動バズーカ

ドライバーガンTYPE2

ビームサーベルx2

N・A・U《ネオアメリカ連邦》が前大戦期に生産した機体、OZ - 06MSリーオーを強化改修した機体、主な改修点は装甲及びフレームに使用されていたチタニウム合金が新しくなり、重さは大

して変わらず防御力が向上している、更にスラスターも強力なものに換装されており、それにあわせて内蔵式プロペラントタンクを大きくしている、更にバッテリーも新型のものに換装されているために、以前より戦闘時間は長くなり、ビームライフルも多少強化されている

武装は対して変更されていないが、大きく変わったのはドーバーガンだろう、ドーバーガンTYPE2はスイッチ1つで実弾とビームの両方が撃てるようになっていて、パイロットや地形により様々なバリエーションが存在している

OZ - 07AMS / Mk ? エアリーズMk ?

18.3m

9.2t

武装

100mmチェーンライフル

ビームライフル

ミサイルポッド

N・A・Uが前大戦期に生産したOZ - 07AMSエアリーズを強化改修した機体

主な変更はリーオーMk2と一緒に、武装で新たにビームライフルが追加された為、改修前で指摘されていた攻撃力の貧弱さは多少改善された

設定その3（後書き）

オリジナルMSを考えるのって大変ですね・・・
作者の頭脳フル回転1歩手前まで行って少し頭痛がします
後書きコーナーは今回も割愛させていただきます

激動の予感（前書き）

ようやく書きあがった・・・

そして気付いたらアクセス数が7000突破！！

嬉しいですねー

作者はがんばりますよー！！

欲しがりません！勝つまではー！！（何に？）

激動の予感

? side

? 「きらり桜雪の舞う愛に包まれたら」

俺、桜内義之は歌いながら愛機ストライクの操縦桿を握っていた

義之「おっと」

俺は機体を一気に噴射下降させると先ほどまで愛機の居た位置をビ

ームが走った

義之「風間か流石いい腕してるじゃないか」

俺はそう言いながら更に機体を左にずらした

また、ビームが駆け抜ける

義之「ふむ、大体この位置かな?」

俺はそう言いながら右手に保持していたビームライフルをとある地

点に3連射した

数秒後、着弾したのかモニターに爆煙を確認した

義之「ビンゴ!」

俺はそう言つと機体の高度を下げて旧市街地の廃ビルの間を飛んだ

義之 side END

? side

? 「風間が落とされた! ? しかもロックもせず撃ったですって!

?」

私、速瀬水月は自機のアストレイ3型のコクピットの中で驚愕する
しかなかった

? 「大佐は本当に化け物ですね……、距離1万離れた袴子に気

付くとは……」

そう言ったのはサブモニターに映っていた僚機のパイロットの宗像
美冴だった

水月「それには深く同意するわ、まったく相変わらず化け物染みた反応してくれるわね!!」

風間は口ツクを機体に任せずにマニュアルでやったのに避けられた、つまり警告音は一切出てなかったのだ、それなのに義之は避けただけで終わらずに、風間の居た位置にビームを撃ち込んだのだ、恐らくビームの角度で位置を割り出したのだろう

？「あはは、こちらアテナム、オーデイン1は現在アテナ1の2時方向位置5000をアテナ隊に向けて高速移動中」

そう言ったのはサブモニターに映った仕官服を着た少しウェーブが入った髪を腰まで伸びていて少しオトリした雰囲気の特徴の女性だ、私の幼馴染の涼宮遥すずみや はるかだ

水月「わかった、・・・アテナ2は右に移動して待機してて」
美冴「了解」

水月「今日こそ負けるもんか！負けたら大台に到達してしまう!!」
私はそう言っつて機体を隠した

水月sideEND

第3者side

義之が機体を廃ビルの間を飛行させるとリーダーに反応が現れた
義之「ん？ようやく反応が出たか、距離は5000か」

義之はリーダーを見て呟いた

義之「反応はアテナ2つてことは宗像か・・・」

義之はそう呟くと機体を加速させた

そして数秒後

義之「おっと！やっぱり出てきたか!!」

義之は飛来してきた閃光を機体をバレルロールして回避し、その後になぜか後ろ回し蹴りを前に居る機体ではなく後ろに放った

水月「うきゃ！」

なんと後ろにビームサーベルを振りかぶった黒いアストレイ3型が居たのだ

美冴「少佐！」

前に居た宗像機は水月機に当たることを恐れて右に跳躍しながらビームライフルを撃った

義之「甘いー！」

義之は左手で保持していたシールドで防ぐと右手で下腿部に収納していたアーマーシユナイダーを抜いて投擲した

美冴「しまった!?!」

アーマーシユナイダーはコクピットに刺さり宗像の搭乗していたアストレイ3型は機能停止した

水月「このー！！」

水月のアストレイ3型は盾を前にしながら突撃してきた

義之「はい、残念賞！」

義之は機体を宙返りさせながら水月機に踵落としを当てた

水月「がは！」

水月機はうつ伏せに倒れた

義之「はい、終了！」

義之は倒れた水月機にビームライフルを撃ち込んだ

第3者sideEND

水月side

水月「ちくしょう……」

私は目の前のモニターを睨みながら呟いた

モニターにはコクピット直撃によりパイロット即死、戦闘不能、シユミレーター終了の文字が点滅していた

水月「大台に行った……」

私は呟きながらシユミレーターから出た

水月 side END

第3者(時々キャラ) side

空気が抜けるような音がしてシュミレーターから4人現れた

?「300戦1勝299敗だな、速瀬?」

そう言ったのは外に居た伊隅みちる中佐だ

水月「言わないでください・・・」

私はヘルメットを脱ぎながら言った、ヘルメット内から腰まで伸ばした髪が出た

それに私的には300敗だ・・・、最初の1勝は義之がわざと負けたからだ

遥「あはは、訓練生時代から義之くんの方が強かったからね」

そう言いながら来たのは先ほどCP将校をやっていた涼宮遥だ

義之「今回は作戦は良かったが、まだまだ甘い」

義之はヘルメットを脱ぎながらそう言った

水月「むきー！その余裕な態度がむかつくー！！1発殴らせるー！！！！」

水月そう叫ぶ様に言うと義之に飛び掛った

義之「あー、それは痛そうだから勘弁な?」

義之はそう言いながら水月の突進を軽く避けた

水月「避けるなー！！！！」

水月は再び突撃を敢行した、水泳で鍛えられた身体能力をフルで活かしている

だが義之は次々とくる突進を軽く避けていく

みちる「やめとけ、速瀬では桜内大佐には勝てんぞ?」

みちるは腕組みしながら速瀬を嗜めた

水月「止めないでくださいー！！この異常は1発殴らないと気がすまないー！！」

義之「異常って随分な言い方で」

水月「なによ！文句あるつての！？」

義之「俺は至つて普通のMSパイロットだが？」

水月「あれの何処が普通だつての！？ステルス機の奇襲を見もせず蹴り飛ばすなんて！？」

そう水月の使用していたアストレイ3型はステルス使用だったので、レーダーには反応しにくく事実、義之のストライクのレーダーにも反応してなかったのだ

義之「ん？勘でわかった」

水月「勘だと！？それが異常だつてのよ！？なんで勘でわかんのかな！？」

水月は頭を抱えながら叫んだ

義之「で？どうだった新型のアストレイ3型は？」

そう今回は新型機の試験評価だったのだ

水月「・・・流石新型だけあつて反応もいいですし、V・I・S《音声入力システム》も2型より良いですね」

義之が聞いたことに水月はパイロットとして真剣に答えた

先ほどまでのふざけた感じは一切無くなっていた

？「ええ、スナイパーパツクの最大レーダー範囲も格段に上がつてましたね」

そう答えたのは綺麗な黒髪が腰まで伸びた優しそうな雰囲気な女性だった、名前は、風間^{かまいたつこ}禱子と言う

美冴「ただ、まだ動きが硬い部分が幾つかありましたね」

義之「ふむ、まあそれに関しては追々直させるとして、次は・・・？「同志桜内」

義之と麻耶と伊隅以外「うわあ！」「」「」

いつの間にか天井の通風孔から1人の男が宙吊りの状態で居た（あれデジャヴユ？）その男の名前は・・・

麻耶「杉並^{すぎなみ}あんたね・・・」

義之「もう少しまともな登場の仕方できんのか？それに大分その登場の仕方読めてきたからな？」

遙「って今は諜報部所属の杉並くんか、あーびつくりした」

そうこの不審者としか言えない男が杉並である

杉並「ふむ、次からはもう少し趣向を凝らしてみよう」

杉並以外「「「「いや普通で良いから」「」「」」

全員で突っ込んだ

そして一拍おいて義之は杉並に聞いた

義之「で、諜報部外務2課所属の杉並少佐殿、なにか話があるんじゃないか？」

杉並「うむ、3つほどな」

麻耶「3つ？」

義之「で1つ目は？」

杉並「同志桜内よ、最近ストライクに不満があるんじゃないかな？」

義之「・・・どうしてそう思った？」

杉並「ふ、同志桜内がシミュレーターから出た際に顔を見たんだが

な、少し考えてる様子だったからな違うか？」

義之「・・・誤魔化したと思ったんだがな・・・」

みちる「ってことは大佐？」

麻耶「義之？」

義之「ああ、確かに最近ストライクの動きが以前より遅く感じる」

水月「あら、もしかしてOSの設定ミスったんじゃないの？」

水月が近づきながら言った

義之「いやそれはないな、OSはずっといじってないし」

麻耶「ええ、それは間違いないわ、機就き整備長の私が月に1回は

総確認するけどOSのパラメーターは変わってないわね」

水月「となると・・・」

杉並「ストライクが最早同志桜内の操縦に追いついてないんだな、

まあストライクも最早2年前の機体だからな仕方あるまい、だが喜

べ、今、天枷研究所で新型機が作られている」

杉並以外「「「「新型？」「」「」」

義之「新型って、3型やムラサメじゃなくてか？」

杉並「ふん、その何処が新型だ、今お前の部隊に配備されているではないか」

麻耶「いや、十分新型なんだけど・・・」

麻耶は呆れながら呟いた

杉並「それに新型はGタイプだ、しかも3機も」

義之「ガンダムタイプが3機もだと!？」

義之は純粹に驚いた

杉並「ただ、何時完成するかはわからん」

義之「なるほどな、他には?」

義之は先を促した

杉並「うむ、ユーラシア連合に怪しい動きがあるのと、ユーラシア連合がGATシリーズの開発に成功したようだ」

みちる「なんだと!？」

義之「ユーラシア連合がついにガンダムタイプの開発に成功したか・・・」

義之は口元を左手で覆いながら呟き、みちるは驚いた

杉並「流石に詳しいスペックなどは分からなかった、俺より先に入った奴からの連絡が途絶えたからな」

杉並の言った”連絡が途絶えた”の言葉が指し示すのは・・・

義之「そうか・・・、遺族には遺書や手当金は?」

杉並「先日既にな・・・、しかしやはり仲間が死ぬのはなかなか慣れんな・・・」

杉並は俯きながら言った

義之「慣れたくないな、本当は・・・」

それは全員同じだった、しかし慣れないと心が死んでしまい人として壊れてしまう

杉並「このUSBに機体の名前と特徴が書かれている、仲間が送ってくれたのを纏めたものだ」

そう言つて杉並は懐から1個のUSBメモリを義之に渡した

義之「確かに受け取った、それで、最後の情報は?」

義之は再び杉並に聞いた

杉並「うむ、宇宙そらなんだがな、L4コロニー群でどうも怪しい動きがある」

みちる「L4コロニーで？」

麻耶「L4コロニーは確か、ユーラシア連合の管轄ね」

義之「L4コロニー・・・、ユーラシア連合・・・、っ！ダルクスカ！」

杉並「ふ、流石は同志桜内だな、正解だ」

遥「コロニーダルクスがどうしたの？」

遥は首を傾げながら聞いてきた

義之「これは俺の予想だが、武装蜂起を行そうとしているのか？」

麻耶「え！？あのダルクス人が!？」

杉並「ああ、間違いない、新型機も確認したし、あれは明らかに軍の練習だった」

義之「まあ、それも仕方ないだろうな、それだけの理由があるからな・・・」

義之の言う理由とは今から約50年前、初音島が日本帝国から独立したばかりの頃に起きた事件が発端である

新太陽暦20年人類が宇宙に進出して約30年が経過したころ宇宙だけでなく地球をも震え上がらせた事件が発生した、それはユーラシア連合では通称<ダルクスの災厄>と呼ばれたバイオハザード事件だ

それはある日突然起こった、最初はL3コロニー群の1つのマンションから始まった、ある朝幼稚園の送迎バスが到着した時園児どころか親すら誰1人居なかった事から気付いた、警察と消防がマンションの1室に入るとそこにあつたのは住んでる家族全員の死体だったしかも傷跡すら一切なく直前まで生きていたことが手に取る様に分かった、そして警察は全ての部屋を調べたが結果は全て一緒だったマンションの住人が全員同じように死んでいたのだ、警察は当初こ

れは集団の一酸化炭素中毒による死亡と適当に判断した

しかし事件はこれは始まりに過ぎず続いた、次は近くに住む家族が死んでいた、その次はその家族の知り合いが同じように死んでいたそして死亡人数がコロニーの総人口の5%に到達した時によろやく違うと分かったのだった

遺体を詳細に調べた結果、未知のウイルスを検出したのだった、そこから爆発的に死亡人数が増えあつという間に1つのコロニーが壊滅状態になったのだ、それを受けてL3コロニー群を管理していたN・A・UはL3コロニー群の閉鎖を決定した

しかし事件は終わらなかつた、次はL4コロニー群そしてL5コロニー群と続いて被害にあい、次は月に、そして最後は初音島が管理するL2コロニー群で事件は発生した

死者が続々と出るなか、初音島のウイルスの博士号を含めて複数の博士号を持つ芳野さくらをはじめとした研究者達は早急にワクチンの精製を始めた

そしてワクチンが完成すると朝倉音夢あさむねはそれをツテを使い国際医療機関に送った

それによりバイオハザードは3ヶ月で終息した、しかし当時のコロニーの全総人口の約4割が死亡した

その未曾有の重大事件のなかほとんど被害を受けてないコロニーがあった、それがL4コロニーのダルクス1〜3だった

それを知ったユーラシア連合は声高に『今回のバイオハザードの真犯人はコロニーダルクスのダルクス人共だ！』と、もちろんそれは根も葉もなく根拠もない暴論だ

しかし世間は憎しみのはけ口を求めていたようで、ユーラシア連合の暴論に世界は賛同した

しかしそれに待ったを出したのは初音島と日本帝国を含めたJEUだった

理由は『コロニーダルクスには金属精製技術及び研究機関はあるが、ウイルス関係の研究施設は存在せず、尚且つダルクス人には先天的

にウイルスに対する抗体が存在していた、更に彼らはウイルスに関する知識は乏しい』という理由だ、しかも事実であった

それによりN・A・Uとアフリカ共同機構は納得まではいかないまでも引いてくれたが、ユーラシア連合は引かずに一方的にある判決を下したのだった

それは”コロニーダルクス生まれの者は姓を名乗るのを禁ず”と”コロニーダルクスは今後一切本国の政治に関わるのを禁ず”というものだった

しかもユーラシア連合はコロニーダルクス生まれ、所謂ダルクス人に対して苛烈と言える弾圧を行った

当然ダルクス人達は猛抗議した、しかしユーラシア連合は一切無視した、それに業を煮やしたダルクス人はデモ行進を行った

それに対してユーラシア連合は最悪の方法で対処したのだった、それは圧倒的武力によるデモ行進者の圧倒的殺戮だった

それによりデモ行進に参加したダルクス人の内9割が死亡した、しかもユーラシア連合はそれだけで飽き足らず、見せしめとして参加したダルクス人の親族を処刑したのだ

それによりダルクス人は報復を恐れてデモ行進を止めた

そして、それからはユーラシア連合は長年にわたりダルクス人を虐げてきたのだ、奴隷のように扱いまともな人権すら与えず、ダルクス人というだけで殺したなどが日常茶飯事になっている状況だ

そしてそれにより15年前に1回デモ行進があったがそれも圧倒的武力により制圧したのだ

麻耶「本当にユーラシア連合は戦争をしたがっつてるとしか思えないわね・・・」

義之「ああ、武装蜂起しようとしてるダルクス人の気持ちもわかる、それに今の初音島のアストレイタイプの開発には彼らが居ないと難航していたはずだしな・・・」

アストレイに使用されている発泡金属は独自の金属精製技術を有するダルクス人の協力が有ったからこそ成り立ったと言っても過言ではない

なぜダルクス人の技術が有るのかと言うと答えは簡単だ、ユーラシア連合の領地からダルクス人が初音島に亡命してきているからだ
更にダルクス人は基本的に手先が器用で勤勉なために、練習や勉強をすればすぐに技術を習得するために初音島でも各分野に分かれて広くダルクス人は重用されている、もちろん軍でもだ
麻耶「でもダルクス人には”武力による報復はしない”って暗黙の了解があるのよね？」

義之「恐らく我慢の限界が来たんだろう、それに武装蜂起したのは1部の奴らだろ？」

杉並「その通りだ、同志桜内よ」

義之は壁に寄りかかって一息つく

義之「これから世界は一体どうなるんだ………」
と腕組みしながら唸るように呟いた………」

激動の予感（後書き）

はい、駄作者による最新作です
気がついたら7500アクセス突破ですよ
読んでくれる皆さんありがとうございます！！

ではここからは後書きコーナー出撃せー！！

作者「はい、ここからは私作者の京勇樹と！」

雪音「アシスタントの田原雪音たはらのゆきねでお送りいたします」

作者「まあ、スタートはここまでにしといて」

以前壊れた壁は修理済みです

雪音「今回のゲストはこちらー！！」

美夏「呼ばれてきた天枷美夏あまかせみなつだ」

作者「では早速ですがこちらを読んでください」

美夏に紙を渡す作者

美夏「ふむ、これを読めば良いんだな？」

雪音「はい、よろしく願います！」

ではスタート！！

美夏「別にいいじゃないか、あんただけじゃないよ……、私に
だって有ったよ帰りたい場所くらい……、私にだってあったよ・

……」

作者「はい、ありがとうございました」

雪音「どうでした？」

美夏「なんか、心に響くセリフだったな……」

作者「はい、これはある戦争によって家族と家を失ったとある少女
のセリフです」

美夏「戦争か・・・、美夏達にも無関係ではないな・・・」
雪音「うん、そうだね・・・、でも失わない為に軍人になったんでしょ?」

美夏「うむ、その通りだ!」

作者「では、今回はこちら辺で」

全員「・・・また次回まで、さよーならー!」

作者「珍しく壁が壊れなかった・・・、あそうだ、相変わらず1通もメッセージやこの後書きコーナーへの要望が来ないので寂しいです・・・、皆さん是非ともお願いします!」

設定1の続き

(208訓練部隊編)(前書き)

設定1の続きです
多少ネタバレ注意

設定1の続き

(208訓練部隊編)

織斑一夏おりむらいちか、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属になったの新任少尉、篠ノ乃箒しののほつきと鳳鈴音ファンリンインは幼馴染であり同期の訓練生、とある理由で初音島に男装して訓練生に紛れていたシャルロット・デュノアを女の子の姿に戻してあげたりと何かとフラグをよく建てる、一夏本人は知らないが208に所属している女子は全員一夏に好意を寄せているが本人が鈍感で朴念仁の為気付いておらず女子達は密かに一夏にく朴念仁オブ朴念仁>や<キングオブ朴念仁>などのあだ名をつけている、教官の織斑千冬おりむらちふゆは姉で時々千冬姉ちふゆねえと言つてはシバかれる、コールサインはアストレア1で搭乗機は試験評価機体のアストレイ3型の近接戦重視にカスタムされたもの

篠ノ乃箒しののほつき、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属になった新任少尉、織斑一夏とは幼馴染で篠ノ乃家が営んでる剣道場の元同門、家が剣道道場のため近接格闘戦はかなりの腕前、織斑一夏にほのかな恋心を持っているが彼女の性格の為になかなか告白できないで居る、一夏に嫁宣言をしたラウラが来た最初は敵対心を持っていたが今は和解して友と認識している、コールサインはアストレア2で機体は一夏と同様近接戦闘重視にカスタムされたアストレイ3型

鳳鈴音ファンリンイン、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属になった新任少尉
織斑一夏に好意を寄せているが彼女の強気な性格が災いして告白できないで居る、家族は3人家族で家は中華料理屋を経営している、自分の腕に相当自身があり時たま上から目線になるが基本素直、コールサインはアストレア3で機体は近中特化型にカスタムされているアストレイ3型

セシリア・オルコット、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属となった新任少尉

元々はイギリスの資産家の家の生まれだったが両親はタイタン戦争の時に亡くなっており初音島に来た理由はメイドのチエルシー・ブランケットの助言でも有り両親から引き継いだ遺産を守るためだ、初音島に来たとき初めて会った一夏に一目惚れしてしまい、一夏を追って訓練生に志願したとちよつと不純な動機だが彼女の体力面は恵まれていて更に教官である織斑千冬おりむらちふゆの教育もあつて狙撃適性で開花した、コールサインはアストレア4で機体は彼女の狙撃適正に合わせたスナイパーカスタムのアストレイ3型

シャルロット・デュノア、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属となった新任少尉

本来はフランスの軍需企業のデュノア社の令嬢にあたるが彼女は本妻ではなく愛人の娘であり、母親はタイタン戦争で戦火に巻き込まれて亡くなっている、引き取られたのはタイタン戦争終結後半年経つてからで本人はデュノア社にはあまり興味は無かったが1人で生きるのは到底無理であつたため引取りに来た父親の部下についていた、しかし待つていたのは義理の母親の激しい虐待と新型機体のテストパイロットという役目のみで父親とは1回しか会っていない、初音島に来た理由は父親に『初音島の技術を盗んでこい』という命令でその時になぜか無理やり男装させられた、一夏にバレたのは偶然でお風呂上りの時に見られてしまったのが理由、最初は騙してごめん」と謝罪して拳銃自殺しようとしたのを一夏に止められて一夏に『俺が居場所になってやる!!』と言われたので亡命という形で初音島に移住した

そして一夏に恋した乙女のシャルロット・デュノアは一夏と共に生きると決心した、そして今の家は一夏と千冬の好意で一緒の家に住んでる

尚移住した際にフランスのデュノア社にはシャルル（男装時の名前）は訓練中の事故で亡くなったと偽りの情報を流した（義之と杉並が計画して芳野さくらが結託した）コールサインはアストレア5で機体は彼女の器用な操縦にあわせて基本近中距離のマウントラック多めにカスタムされた万能型アストレイ3型

ラウラ・ボーデヴィツヒ、元JEUドイツ軍特殊部隊シュヴァルツエア・ハーゼ通称<黒ウサギ隊>の隊長でJEUでの階級は少佐だったが新太陽暦73年3月にユーラシア連合に攻め滅ぼされた後初音島に亡命して訓練生に志願した、志願した理由はユーラシアに復讐するためでありその為には手段は選ばなかった、そしてその為に一緒に亡命した仲間さえも道具扱いしようとしたが、それを尊敬していた千冬に『そんなのではお前は一夏には勝てない』と言われたので一夏にMSで決闘を挑み最初は押していたが、一夏に無線越しに説教され尚且つMS戦でも負けた、そして保健室で本音で語り合ってから一夏に惚れた、その際にJEUの副官だったクラリツサ・ハルフォーフに間違った日本知識を刷り込まれた結果が一夏に対する口付けと共に言った『お前を私の嫁にする！』宣言である、そして一夏に仲間の大切さと力の意味を聞いて一夏に対する認識をいい方向に改めた、初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属になった新任少尉となった、コールサインはアストレア6で機体は基本近中距離だが遠距離用に肩にデュエルASのシヴァを基にした折りたたみ式レールカノン^{アサルトシュラウド}を装備したアストレイ3型

更識^{たいていしきかんてい}簪、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属になった新任少尉、ワルキューレ隊に姉の更識^{さらしき}楯無^{たてなし}が居る、最初は他の訓練生とは一定の距離を置いていて内気な性格だったが一夏の努力により他の訓練生との距離は無くなり、更に嫌いだった姉とも和解できた、よくある勸善懲悪の子供の特撮物の戦隊物と魔法少女系のアニメが好きで見る、プログラミングや機械をいじるのも得意、

ラウラとは蕎麦のかき揚げでよく論議しあう（本人曰くタップリ全身浴派かさつくり派で、因みに簪は全身浴派、ラウラがさつくり派）、コールサインはアストレア7で機体は基本遠距離からの火力支援のMLRS^{マルス}（多目的ミサイルランチャー）が得意だがオールレンジ対応のアストレイ3型

設定1の続き

(208訓練部隊編) (後書き)

はい、書き上げました！！そして気付いたらアクセス数8000突破してました！！
嬉しいですよ！！！！

つてことで後書きコーナーいざ参る！！！！

作者「はい、始まりました！！このコーナーは私作者の京勇樹けいゆうきと！」

雪音「毎度おなじみアシスタントの田原雪音たはらのゆきねでお送りします」

作者「はい！では今回のゲスト出でませい！！！！」

純一「どうも、朝倉純一あさくらじゅんいちじゃ」

雪音「はい、気をつけて座ってくださいね？」

純一「うむ、ありがとう」

作者「では早速で、すいませんがこれをお願いします」

純一に紙を渡す作者

純一「ふむ、これを読めばいいんじゃないかな？」

雪音「はい、お願いします」

ではスタート！！

純一「種は飛んだ……。これで良い、……オープも世界も……ヤツらのいいようにはさせん！」

作者「はい！ありがとうございました！！」

雪音「どうでした？」

純一「ふむ、凄い覚悟を感じたな」

作者「はい、それはガダムSE Dのオープ 合首长国の前代表が自国と共に自爆する際に言ったセリフです、いやーあの瞬間は眼

が潤んだ」

雪音「では今回はここまでです」

全員「」「また次回までさよーならー!!」「」「」

選定試験前編（前書き）

ここから物語りは一気に加速します

選定試験前編

? side

? 「さて、これが最後の実技試験だ……」

俺、土見稟つちみりんは自分の機体の今は型落ちで主力機を譲ったM1アストレイの中で呟いた

とちょうどその時コクピット内に電子音が聞こえた

? 「20601より206全機！試験開始まで後3分よ！準備はいい？」

そう言ってきたのは部隊長の涼宮茜すずみやあかねだ、髪は肩の辺りで切りそろえて、それをヘアバンドで纏めてる活発な少女だ

? 「20602異常なし！何時でも行けるよ！茜ちゃん！！」

そう言ったのは、一応副長を務める築地多恵つきじたえだ、髪は背中半ばまで伸ばしてそれを後頭部で右側に髪留めで纏めている、時々変な方言が出るのが特徴で……若干百合気味だ

稟「こちら20603異常なし、オールグリーン！何時でも行けるぜ！」

俺は機体の状況と何時ものセリフを言った

? 「20604異常なし、何時も通り！支援は私に任せて」

と若干緊張感が抜けるように言ったのは大体俺と2機連携エレメントを組むか柏木晴子しらかははるこだ、髪はショートカットで切りそろえており、身長は高めで結構スタイル抜群、運動神経も抜群で隊内のムードメイカーを勤める、割り切った性格も持ち併せている

? 「20605異常なし、何時でも行けるよ！」

そう答えたのは明るい性格の高原陽子たかはらようこだ、隊内では明るい性格で柏木と同じくムードメイカーを勤める子で、髪は腰まで伸ばしたのをポニーテールにしている

? 「20606異常なし何時でも行ける！」

そう答えたのは活発さが風紀委員的な役回りの子で名前は、麻倉陽あしかぐらひるな

菜で、通称ひなと呼ばれてる、髪はベリーショートで切りそろえてある、少しクセつ毛なのか常に外に撥ねているのが特徴だ
晴子『で茜？香月教官（かづき）に言われたことどうする？』

と柏木が涼宮に聞いた、教官に言われたことって確か・・・

茜『あー、確か207を全滅させるだっけ？』

多恵『でも、207はあの神宮司教官の教え子達だよね！？あの狂犬のー！』

狂犬ってのは神宮司教官（じんぐうじ）につけられた2つ名だ、何でも鬼のようなシゴキに昔の訓練生がつけたあだ名らしい

稟『どうせまたクダラナイ賭けでもしたんだろ？』

香月教官と神宮司教官はなんでも昔からの知り合いらしくて時々俺達を賭けに巻き込むのだ、はた迷惑極まりない

陽子『あゝそれありえるねー、確か試験直前になんか2人で話し合ってたよ？』

陽菜『それで確定したね、完全に巻き込まれた』
やっぱりね、勘弁してほしいぜまったく

茜『うーん、とりあえず当たった敵と片っ端から戦い続けて、お互い生き残ってたらやりあうってことで、OK？』

涼宮が薄く笑いながら言った、やれやれ涼宮の奴乗ってきたな？仕方ない

稟『それでいいんじゃない？』

晴子『異議なし』

多恵『茜ちゃんに従うよ！』

陽子『右に同じく』

陽菜『それで行こう』

おお、全員一致しましたか

茜『んじゃ、全員行くよー！』

全員『了解！』

そんじゃ始めますか！

稟SideEND

?side

俺、白銀武しろがねたけるは自機のM1アストレイの中で眼を瞑って軽く眠っていたとその時、コクピット内に電子音が鳴り響いたので俺は眼を開けて姿勢を正した

? 『20701より全機！試験3分前よ！準備はいい?!』

そう言ってきたのは眼鏡に少し太い眉毛が特徴の女の子だった、名前は榊千鶴さかきちづると言う俺は委員長と呼ぶ

? 『20702機体は正常だ！何時でも行けるぞ!』

そう言ったのは勝気な瞳に少し古い侍みたいな言葉遣いが特徴の俺の彼女で御剣冥夜みつるめいやだ、俺は当たり前前に冥夜と呼ぶ

? 『20703オールグリーン！何時でも出撃でれるよ!』

そう言ったのはボーイッシュな印象を与える小柄な女の子だ、名前は鎧衣美琴よろいみことと言う、俺は美琴と呼ぶ

? 『20704機体正常・・・異常なし』

そう答えたのは不思議な雰囲気おやみねけいの女の子で、まるで孤高な猫を彷彿させる雰囲気おやみねけいをもった子で名前は彩峰慧あやみねけいだ、俺は彩峰と呼ぶ

? 『20705機体異常なし、何時でも行けます!』

そう答えたのは猫を彷彿させる髪型に首に鈴をつけた小柄な女の子だ、名前は珠瀬王姫たませみきという、俺はたまと呼ぶ

武 『20706異常なし！何時でも行けるぜ!』

俺は機体の状況を伝えて何時ものセリフを言う

とその時だった、メインモニターにサブウィンドウが開きそこに映ったのは・・・

? 『皆々お願い！夕呼ゆいの部隊にだけは負けないで!』

と言ったのは俺達の教官の通称狂犬じかんこと神宮司じんぐうじまりも教官だ、俺はまりもちゃんと呼ぶ、時々シバかれるが

俺達にとっては良い教官で厳しいが優しい教官で全員慕っているが
武「まりもちゃんどうしたんだよいきなり？」

なんか様子がおかしい、いつもの凜然とした態度じゃないな

王姫「そうですね、どうしたんですか？」

まりも「負けると、あんな格好で……、うう……」

といてまりもちゃんは頭を抱えた

それを聞いて俺は大体予想出来た、つまり……

武「また夕呼先生と賭けしたんですね？」

まりも「そうなのよ、うう……有明はいやー！ー！」

有明「秋葉原エリアと隣り合わせであるアソコか、あく大体予想
出来た」

冥夜「神宮司教官落ち着いてください」

武「そうそう要は俺達が勝てばいいんだからな！」

俺は右手の親指を立てながら言った

まりも「白銀君、お願いね」

まりもちゃんが両手を組みながら言ってきた

千鶴「それじゃ神宮司教官の面目を守るためにも勝つわよ！」

「『『『『『了解！』』』』』」

そんじゃ出撃せー！！

武sideEND

?side

俺、織斑一夏は緊張しながらも自機のM1アストレイの中で時計を
見た

一夏「そろそろだな、……よし！」

俺は深呼吸してから無線のスイッチを押した

一夏「20801より208全機準備はいいか？試験3分前だ！」

？『20802機体正常！異常なし！何時でも行けるぞ！』

そう答えたのは腰まで伸ばした黒髪をリボンでポニーテールにした侍を彷彿させる雰囲気纏う俺の第1幼馴染の篠ノ之箒^{しののへ}だ、俺は箒と呼ぶ

？『20803機体異常なし！何時でも行けるわよ！』

そう答えたのは小柄な体躯にツインテールが特徴の俺の第2幼馴染の鳳鈴音^{ファンリンイン}だ、俺は鈴^{りん}って呼ぶ、鈴^{りん}って呼ぶはNGな、ちよつとトラウマがある、後は貧乳^{びんち}って言う^いと羅刹のごとくキれる

？『20804機体に異常はありません、何時でも行けますわ！』

そう答えたのは腰まで伸ばした金髪と両前髪の縦ロールと青い瞳が印象の淑女と呼べる女子で名前はセシリア・オルコットと言う、俺はセシリアと呼ぶ

？『20805機体異常なし！何時でも行けるよ！一夏！』

そう言ったのは肩で切りそろえて少しだけ伸ばした後ろの髪を髪留めで纏め、エメラルド色の瞳に中性的な顔立ちが特徴の女の子で名前はシャルロット・デュノアと言う、俺はシャルと呼ぶ

？『20806システムオールグリーン！何時でも行ける！』

そう答えたのは小柄な体に腰まで伸ばした銀髪に左目の眼帯に右目の赤眼が特徴的な女の子で名前はラウラ・ボーデヴィツヒと言う、俺はラウラと呼ぶ元々はJEUの特殊部隊隊長だ、時々間違ってる日本知識が出るのが困る、犯人は誰だ！（作者、クラツリサ・ハルフォーフだ！）

？『20807機体正常、不具合無し・・・行ける！』

そう言ったのは水色の髪を肩のあたりで切りそろえているが少しクセっ毛なのか内側に向いてる、内気な性格に眼鏡（伊達、小型ディスプレイらしい）が特徴の女の子で名前は更識簪^{むかしかんじ}という、俺は簪^{かんじ}って呼ぶ

一夏「よし！全機確認した！今回の試験は絶対負けられないからな
！！」

全員『『『『『わかってる！（ますわ！）』』』』』』

とその時メインモニターの真ん中に見慣れた顔が映った、その人物は？『お前ら！何時も通りに行けば勝てる！いいな！！』

それは腰まで伸ばした黒髪に強気な眼が特徴の俺の姉の織斑千冬だおりむすぢふゆ

一夏「分かってるって、千冬姉ちふゆねえつと、織斑教官！」

千冬「ふん、今のは聞かなかったことにしてやる、織斑」

よし、セーフ！俺は心中で両手を広げた

ラウラ「教官！教官に勝利を謙譲します！！」

おう、なんてかっこいいセリフでしょ

一夏&ラウラ以外「『『『訓練の成果を見せます（わ）！』』』

おお、息ピッタリで、これぞ以心伝心か！！

一夏以外「『『『一夏さん、くだらないこと考えてる（ますわね）

でしょ？』』』

なぜに！？

千冬「しかし今回の試験なんかありそうだな、（ボソリ）桜内大佐の動きが今まで無かったのが気になる」

ん？千冬姉なんて言った？最後聞き取りづらかった

千冬「とりあえず、お前ら最後まで気を抜くなよ！いいな！？」

全員「『『『『了解！！』』』』

さて勝ちに行きますか！！

一夏sideEND

?side

?「ふむ、そろそろか」

私クラリツサ・ハルフォーフは機体内の時計を確認しながら呟いた
クラリツサ「21001より210全機準備はいいか！？」

?「21002機体正常何時でも行けます！」

そう答えたのは部隊最年少の子で名前はレティシア・ライゼンバツ

八だ、今やラウラ隊長（元隊長だ！）も含めて部隊全員の誇りとなつてる眼帯を今日もつけてる

？『21003オールグリーン！行けますよ！お姉さま！！』

お姉さまと呼んでくれたのは（妹ではないからな？）クリステイア
ーネ・ホーエンフェットだ、部隊内では年長者でよく私の副官を勤める

？『21004異常なし動けます！』

そう簡潔に答えたのはマルギツテ・エーベルハイトだ部隊内では年少組みだが冷静な判断力を持ち合わせており頼りになる

？『21005システム正常出れます！』

そう答えたのはエルトリンデ・アーシュベルクだ、部隊内ではムードメイカーでよく部隊を盛り上げてくれる

？『21006システムオールグリーン行けます！』

そう言ったのはエルシア・ハーヴェンスだ、エルトリンデと一緒によく行動してて小柄なため部隊内ではマスコットのな役割だが広い視野を持つてるため頼りになる

？『21007オールグリーン動ける！』

そう若干男口調で答えたのはライラ・フリードリヒで、部隊をよく纏めてくれて私が居ない時にご意見番になって頼りになる

クラリツサ「今回の試験は全訓練生部隊同時参加のバトルロイヤルだ！」

全員『『『『は！』』』』』

クラリツサ「今回の試験をなんとしても合格して我々を受け入れてくれた初音島に恩を返すぞ！！」

全員『『『『了解！！』』』』』

クラリツサ（今回はやはり隊長といえライバルですよ！）

私はそう気合を入れて機体の中で試験開始の合図を聞いて

クラリツサ「210訓練部隊！出撃ぞ！！」

全員『『『『了解！！』』』』』

私は機体のスラスタを噴かして機体を進ませた

クラリツサsideEND

?side

俺、桜内義之は機体から降りて廃ビルの屋上から電子双眼鏡で試験会場全域を見ていた

義之「おーおー、やってるねー、なつかしいことで」

このバトルロイヤルは、MSや戦闘機、多脚戦車で全訓練生対象で行われる1大イベントだ

義之「お？201が全滅したか、開始5分で全滅かーこりゃ1からやり直し確定だな、やったのは208か、麻耶208のデータを」

俺はCPを勤めている恋人の沢井麻耶にデータを送るように頼んだ

麻耶「了解、今送るね」

少ししたら手元に置いてあった情報端末にデータが来たので俺は確認した

義之「ふむ、208は遠中近のバランスが良いな、部隊に入れてもそのまま運用するか」

俺は送られてきたデータを見ながら決めた、この部隊マジでバランスが良いな、逆に下手に崩したら逆にバランスが悪くなりそうだ

義之「さて、今回選んだ訓練生達はちゃんと生き残ってくれるかな？」

そうじゃないと今回のサプライズ意味無くなるんだがね？

俺はそう思いながら戦況を見守った

数10分後

義之「む、202が全滅したか、やったのは・・・206か、麻耶
206のデータを」

麻耶『了解、今送るね』

そして206のデータを確認した俺は気付いた

義之「ん？土見訓練生が囮役をやってるな、しかも被弾0で撃破数
は3機か」

囮役は大体その部隊で腕が劣ってる奴が担当する、そういう意味で
は確かに土見訓練生は劣ってるが勘が鋭い、なるほど囮に適してる
義之「で、2機^{エレメント}連携を組む柏木訓練生は狙撃適正に視野の広さが売
りか」

俺は2人で動かすことを決めた

義之「さて、そろそろ準備しますか、ちょうど生き残ったのも選ん
だ訓練生くらいになつたし、時間的にもあれだし」

この試験は訓練生には知らされていないが実は残り時間が20分切る
と試験会場全域に強力なジャミングが発生して、スナイパーみたい
に強力なリーダーを搭載してないと100mくらいしか効かなくな
るのだ

俺は膝たち状態で待機モードにしておいた愛機エールストライクに
乗り込んだ

すると通信が入った

？『本当にやるんですか、兄さん？』

そう聞いてきたのは妹分の朝倉由夢^{あさぐらひゆむ}だ

義之「おう、やるよ、何言ってるの？」

俺は言いながら機体を待機モードから立ち上げたすると画面に

General

Unilateral

Neuro-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver

の文字が映った、因みに頭文字をとってGUNDAMでガンダムと読む

そしてストライクは立ち上がった

そしてスイッチを押すとストライクの装甲が鉄灰色から鮮やかな赤青白の所謂トリコロールに変わった

義之「さてと、オーディーン1からワルキューレ隊各機準備はいいか!？」

みちる「オーディーン2準備完了行けます」

そう答えたのはMS隊の副官の伊隅みちる中佐だ、今回は俺とは別の機体と組んでる

水月「アテナ1準備完了、何時でも行ける!」

そう答えたのは今回伊隅中佐と2機連携エレメントを組んでる、速瀬水月だ

「オーディーン4準備完了何時でも行けますよ」

そう答えたのはバスターに搭乗している橘菊理だ、今回はある3機と行動を共にしてもらってる

「ラウンズ1機体正常何時でも行ける!」

そう答えたのは腰まで伸ばした赤い髪をリボンで纏めてポニーテール状くまかへみすずにしているリーダーシップとカリスマ性溢れる女性だ、名前は草壁美鈴という

「ラウンズ2オールグリーン!何時でも行ける!」

そう答えたのはラウンズ隊の副官を務める皐月さつき駆だ、菊理と付き合ってる、髪は耳が見えるくらいで切りそろえてる

「こちらオーディーン5機体はオールグリーン、何時でも行けるわよ」

そう陽気に答えたのはショートカットに切りそろえた水色の髪で少しくセツ毛なのか外側に撥ねていて不思議な雰囲気とカリスマ性なまじきたてなしと人を惹きつけるナニかを備えてる女性で名前は更識楯無という、機体は前大戦時に搭乗していた、ガンダムアストレイ・ブルーフレームを改修強化したガンダムアストレイ・ブルーフレームセカンド・

リバイだ

？『アイギス1準備完了、何時でも出撃^{でれ}る！』

そう言ったのは中性的な顔立ちに少し小柄な体にショートカットの黒髪が特徴の男性で、名前は如月修史^{きさらぎしゅうじ}という、重要なのもう1回言うが”男”だ

？『アイギス2準備完了』

と簡潔かつ、無表情かつ無感情に答えたのはアイギス隊の副官の真^ま田^な設^た子^こだ、腰まで伸ばした紫色の髪に赤紫の瞳が特徴的な女性だが、かつては修史の敵として現れて戦ったが仲間と思っていた組織に裏切られた時に修史に助けられてそれ以来、修史の副官を務めている？『アイギス3準備完了、何時でもいけるよ』

そう陽気に答えたのは腰より少し高い位置で切りそろえた緑色の髪茶色の大きい瞳に右の八重歯が特徴の女性だ、名前は穂村有理^{ほむらあり}という、元々は別組織の諜報員^{かんざききょういちろう}だったがトカゲの尻尾きりにあいそれを修史の養父の神崎恭一郎^{かみざききょういちろう}が相手を脅して引き抜いた、情報収集が得意で、このアイギス隊の3人で通称<アイギスの3枚楯>と呼ばれる

？『ウルド1準備完了している』

そう答えたのは左隣に待機している機体からで、機体は金色と黒色が混じっている機体で、名前はガンダムアストレイ・ゴールドフレーム^{アムテム}天である、パイロットは何時も被っている牛柄の帽子と同じ配色のヘルメットを被っている小柄な女の子で名前は天枷美夏^{あまかせみなつ}だ

由夢『ウルド3準備完了してます』

そう答えたのは右隣に待機している由夢だ、機体は両手でハイブリットスナイパーライフルを保持している

そう今回参加した全員が言う

麻耶『試験会場全域にジャミング確認！！』

と言う麻耶の言葉が聞こえたので

義之「そんじゃ、新たなエインフェリアとワルキューレの選定を始めるぞ！！」

と言つと

全員『『『『『了解!』』』』』

と聞こえた

そんじゃ始めるか!!

選定試験前編（後書き）

うーむ、長かった、ここから物語りは一気に加速していきますからね？

そして気付いたら9000アクセス突破しました！

嬉しいです！皆さんサンクス！！

さてここからは後書きコーナー始まる！

作者「はい！ここからは私作者の京勇樹と！」

雪音「アシスタントの田原雪音たははゆきのねでお送りします」

作者「では今回のゲストを召喚！！」

武「召喚された（？）白銀武しろがねたけるだ」

雪音「ようこそ後書き《混沌》コーナーへ」

武「なんか今嫌な言葉が聞こえたぞ！？」

作者「気のせいです」

雪音「では今回はこれね」

武に紙を渡す雪音

武「ん？これを読めばいいんか？」

作者「うむ！頼んだ！！」

ではスタート！！

武「その命は君1人の物だ！だから君だ！彼じゃない！！」

作者「はい、終了！」

雪音「どうだった？」

武「なんか、こう心に響いたな、人は代用品なんて居ないってこと

だな」

作者「うむ、その通り！」

雪音「では今回はここまでね」

全員「」「また次回までさよーならー！」」「」

選定試験後編（前書き）

文才が欲しい・・・

選定試験後編

稟 side

俺達は少し混乱していた、なぜなら

茜「ちよつとどうなつてんのよ!? ジャミングが発生するなんて聞いてないわよ!？」

そうなのだ、恐らく試験会場全域なのだろう、ジャミングが発生しているのだ、おかげで大体100mくらいしかレーダーが効かない
晴子「茜いいから落ち着いて、これは恐らく予定通りなんだと思うよ?」

稟「俺もそう思う、恐らくはこの状況下でも冷静に判断し、行動できるか検査するためだろうな」

茜「そうね、じゃあこっちは脱落した機体も居ないしそのまま行くわよ?」

全員「『『『『異議なし!』』』』」

晴子「そんじゃ2時方向に進みましょう?」

稟「ああ、そうだ・・・っ! 柏木!」

俺は右に居た柏木機にタツクルを当てた

晴子「ちよ!？」

茜「土見なにを!?!?!?!」

その瞬間、先ほどまで柏木機が居た地点を轟音をたてて弾丸が通り過ぎて廃ビルをに当たり崩した

多恵「な、なんだべ!？」

あ、方言が出た

稟「全機ビルの陰に隠れる!」

俺の声を聴いて柏木機以外はすぐに隠れた

稟「間に合え!」

俺は倒れてる柏木機の前に出てシールドを構えた
シールドを構えた瞬間シールドにビームが当たった

稟「柏木！早く隠れてくれ！このままでは保たない！」
晴子「わかっているよ！でもこうなったのは土見のせいなんだけど？」
稟「それについては謝罪する！それに仕方ないだろ！あれしか間に合わないと思ったんだから！」
俺は、返事をしながらも飛来してくるビームや砲弾をシールドで防いだ
晴子「よつと！土見も早く！」
稟「了解！！」
俺は柏木機の後ろに回りこんで隠れた

稟sideEND

義之side
義之「ほー、今のに反応して回避して防いだか、なかなか良い勘してるね」

俺は素直にそう評価した

由夢「あれを良い勘で済ませますか？私がトリガーに指をかけた瞬間に反応しましたよ？」

由夢は呆れた表情で言ってきた

義之「俺はそう思ったか？」

美夏「桜内よ、今度美夏達とお前の機体の制御ログを比べてみる？今度は天枷まで」

由夢「ええ、自分の異常さが分かるはずですから」

義之「むう、普通だと思っただがな？」

由夢&美夏「いえ（いや）、異常です（だ）！」

俺に味方は居ないのか！？

義之「お？ビルを切って煙幕を作ったか、今の判断は隊長機かな？」
美夏「どうする、美夏が切り込むか？」

義之「いや、俺が切り込む、由夢は引き続き狙撃を続行、天枷は由夢の護衛を」

2人『了解』』

俺はその声を聴いたら愛機のスラスタを噴かして206に向けて飛行した

エールストライカーはこの2年で大気圏内では滑空しか出来なかったのを改良して、大気圏内でも1級品の飛行能力を得ている

義之「さて、楽しませてくれよ!？」

義之 side END

みちる side

私は僚機の速瀬と共に戦闘している207を見ていた、すると速瀬から

水月『中佐、見てください!あの6番機なんですけど?』

私は言われた通り6番機をズームして見た、なるほど

みちる「なるほど、独創的な動きが多いな」

水月『ええ、OSの姿勢制御関連のパラメーターを相当いじってるんですね、あれは私達ほどではありませんが』

みちる「ああ、すぐに追いつくな」

私は素直に評価した、そして

みちる「流石は今2型に搭載されてる新型OSの基礎概念提唱者だ」
水月『ええ!?!それってマジですか!?!』

やれやれ、驚きのあまり言葉遣いが怪しくなってるな、まあ仕方ないが

みちる「本当だ、因みにこれは重要機密だからな?しゃべるなよ?」
水月『了解!』

さてと、どうやらあちらの戦闘も終わったようだし

みちる「そろそろ行くぞ？それと、間違つて殺すなよ？」
水月「了解、わかってますって！」
さて、始めるか

私は愛機のイージスのスラスターを噴かした

みちる side END

武 side

俺達は今危機的状況にあつた

武「くそ！なんだこの機体！？」

俺の前にはアストレイタイプの新型と思われる機体が居て攻撃を仕掛けてきてる

千鶴「白銀、無事！？」

武「なんとかかな！彩峰！？」

慧「こつちも、……ギリギリ！」

そう俺達はたつた1機の敵に押されてるのだ

千鶴「このままじゃ埒が明かない！御剣こつちに来れない！？」

冥夜「無茶を言うな！こつちの相手はイージスだぞ！？」

イージスだと！？ガンダムタイプじゃねーか！

壬姫「こちらの攻撃が当たりませんか！？」

たまも相当パニくってる

美琴「どうするの〜！？」

おう美琴の眼が回ってる

千鶴「御剣達はなんとかこつちに合流して！珠瀬！あのアストレイタイプに1発撃つて！！」

なるほど、俺は委員長の考えを見抜いてビームサーベルを抜刀した
壬姫「ええ！？でも当たりませんよ！」

千鶴『いいから撃つて！相手が避けるなり防ぐなりしたらその隙に白銀に突撃させるから！』

武『おう！任せろ！！』

壬姫『わかりました！でも止められるとしても数秒が限界です！』

武『わかっている、にしてもこの試験考えた奴相当ドSだな！』

機体性能もそうだが、腕の差が激しいっての！

壬姫『撃ちます！』

武『おう！！』

俺は機体を構えた

武sideEND

水月side

水月『あははは！なかなか楽しませてくれるね！』

私は自機のアストレイ3型のコクピットの中で笑いながら機体を操縦していた

すると少し離れた位置に居た訓練生の機体が71式狙撃砲を撃った
71式狙撃砲は旧式のMS用狙撃砲で単発式だ、1発撃ったらレバ
ーを引かないと薬莢が廃莢されない、その為1発撃つと少なくとも
数秒は隙が出来るけど、命中率は高い

水月『おっと！なかなか際どい位置を狙ってくれるじゃないの！』

私はペイント弾を最小限の動きで避けて、突撃してきた機体に蹴りを当てた

弾はペイント弾だから致命傷にはならないけど、私の目標は義之に勝つこと！当たってやるもんか！！

みちる『やっつてるようだな？』

おっと中佐からだ

水月『はい！中佐はどうですか？』

私は牽制を含めてEパック式ビームライフルを乱射しながら聞いた
みちる『ふむ、予想以上でな少々手こずってるが、まあ問題ないだ
ろ』

確かに中佐は結構余裕みたいで

水月「そろそろ、本気出します?」

私は口端を上げながら言った

みちる『そうだな、やるか、速瀬もつ1回言うが殺すなよ?』

水月「わかってますって!では行きますか!」

私は本気を出して訓練生達に突撃した

水月sideEND

一夏side

俺は目の前の機体、赤いアストレイタイプが繰り出した刀による斬
撃を紙一重で避けながら冷や汗をかいた

一夏「くそ!この機体なんだ!」

俺達に攻撃してきた機体はアストレイに似ているがM1より赤いし、
なにより細かい造型が違う

簪『もしかしてガンダム!』

おお!?あの簪が大声をだした!??って!?!??

一夏「マジか!これがあの!」

簪『多分そうだと思う・・・確かアストレイの前にガンダムを基
盤にアストレイのプロトタイプを造ったらしいから・・・』

なるほど、それなら納得できる!!

シャルロット『簪!後ろ!!』

何!?あれは青いアストレイタイプ!?

青いアストレイタイプは見たことも無い大剣を簪に向けて振り上げ
ながら高速で接近してきた

ラウラ『く！近すぎて撃てない！』

ラウラが悔しそうに歯噛みした

簪『く！！』

そして簪は間一髪でビームサーベルで防いだ

鈴音『あーもう！なんなのよ！！このアホみたいなミサイルの数は
！！』

そう、実は先ほどからの凄惨な数のミサイルが雨霰あめあられと周囲に飛んできては着弾しているから鬱陶しい！！

セシリア『な！？あれはガンダムですわ！！識別照合・・・GA
T-X103バスター！！』

第『バスターだと！？』

おいおい、あの青いアストレイタイプを含めたらガンダムタイプが
3機もかよ！？

一夏『全員！今まで以上に連携を重視！！なんとかバスターから落
とすぞ！』

全員『『『『『了解！』』』』』

絶対乗り越えてやる！！

一夏sideEND

美鈴side

私は自機のガンダムアストレイ・レッドフレームの中で機体を操縦
していた

美鈴『ほう、これを超えるか！！』

私は目の前の訓練生の駆る機体にガーベラストレートの斬撃を加え
たが、避けられたことを驚きながらも喜んだ

美鈴『これは将来有望だ！！』

私は素直に賞賛を口走った

すると

菊理『美鈴さん、ちゃんとコクピットは外してくださいね？』

と後方からミサイルを撃っている菊理に通信越しに窘められた

美鈴「わかつているさ、それよりもそろそろ予定通りそちらに合流するぞ？」

駆『了解！流石に数が多いですね』

楯無『そうね、流石に7機は厳しいわね、それに簪ちゃんもかなり出来るようになってたし』

そう言いながら楯無は軽くウインクした

美鈴「妹が居たのか？」

私は楯無の言い方から分かった

楯無『そ、7番機ね？』

ふむ、あの機体が、火力支援を中心に遠中近距離対応出来るのか

駆『それでは俺も攻撃及び菊理の援護を開始します！』

美鈴「了解、楯無よ後退しながらやるぞ？」

楯無『了解』

では草壁美鈴押して参る！！

美鈴 side END

クラリツサ side

私達は今翻弄されていた

クラリツサ「我々がたった3機に押されるだ！？」

そうこちらは7機に対して相手はたった3機なのに圧倒的に押されてるのだ

レティシア『隊長こいつら相当の猛者ですよ！』

レティシアが叫び声で捲くし立ててきた

クラリツサ「わかつている！！」

私は思わず怒鳴ってしまった、それほどまでに余裕が無いのだ
クリステイアーネ『お姉さま！マルギツテが！！』
ちい！喰われたか！！

マルギツテ機が機能停止して廃ビルに機体を半分めり込ませていた
エルトリンデ『エルシア！離れすぎないで！カバーしきれない！！』
エルシア『わかってるけど！！』

ちい！！部隊間の距離がうまいように離されてる！！援護しづらい
！！

クラリツサ「ここで負けてなるものか！！」

私は雄たけびを上げながら突撃した

クラリツサ side END

修史 side

修史「流石は元JEUドイツ軍の特殊部隊だ！俺達と戦ってまだ損害が1機だけか！！」

俺はこいつらの評価を心中で改めた

設子『流石は修史だな、パイロットを気絶させるとは』

設子が薄く微笑みながら言ってくれた

有理『ふーむ、こいつら連携が凄いね！ここまで保つとは予想外だ』

有理が無頓着に言った、本音かね？

修史「そんじゃ、ちゃっっちゃと終わらせるぞ！！」

2人『了解！！』

俺は突撃してきた機体に蹴りを当てながら言った

修史 side END

稟 side

稟「くそ！なんて正確な狙撃だよ！」

俺は次々撃ち込まれて来る砲弾やビームを見ながら悪態を吐いた

晴子「確かにね！、……っ！こちらに接近する反応アリ！距離400！！」

なに！？そうか柏木の機体はスナイパー使用だから通常機よりレダーが強力なんだった！

茜「機種はわかる！？」

晴子「機種特定……GAT-X105ストライク！！」

と柏木が叫んだ瞬間だった、廃ビルの隙間に赤青白の機体がメインモニターに映った……あの機体は！！

茜「な！？ストライク！？？？守護神がなんで！って土見！？」

俺は気付いたらストライクに向けて機体を突撃させていた

稟「ストライクは俺が抑える！涼宮達はスナイパーを！！」

俺は右手に保持されていたペイント弾のライフルを投棄していて、気付いたらビームサーベルを抜刀していた

稟「ストライク！俺はようやくここまで来た！！」

俺がビームサーベルを抜刀したのに合わせたのかストライクもビームサーベルを抜刀していて、お互いのビームサーベルがぶつかりあ

い拮抗して激しく火花を散らした

晴子「私が土見を援護するから茜達はスナイパーをお願い！！」

稟「おおおおおー！！！！」

アストレイとストライクの額がぶつかる

義之「なるほどあの時の君か」

と聞こえた、間違いない！あの時のパイロットの声だ！！

稟「やはり、あなたでしたか！あれから2年！ようやくここまで来た！！」

俺は叫びながら鏢迫り合いを続けていた

稟 side END

晴子 side

稟『ストライクは俺が抑える！涼宮達はスナイパーを！！』

そう言つて土見はペイント弾ライフルを捨ててビームサーベルを抜
刀して切りかかった

あの土見があそこまで感情を爆発させてるのを初めて見た私は少し
放心していた

稟『ストライク！俺はようやくここまで来た！！』

更に土見は叫びながらストライクとビームサーベル同士で鏖迫り合
いをしている、あの言い方は昔なにかあったのかな？

晴子「私が土見を援護するから茜達はスナイパーをお願い！！」

ようやく気を取り直した私はそう言いながらストライクに照準を合
わせるために銃を向けた

茜達は私の言葉を聴いてくれて離れていった

稟『おおおおおー！！』

更に土見の叫びが聞こえた、そうすると機体同士の額がぶつかった
のが見えた、すると

義之『なるほどあの時の君か』

と聞こえた、土見の機体がくつついたから無線が混線したのかな？
でもこの言い方はまるで守護神は土見を知っているの？

稟『やはり、あなたでしたか！あれから2年！ようやくここまで来
た！！』

つて土見も知ってるの！？

晴子「よくわからないけど」

私はストライクに向けて照準を合わせた

晴子「狙い撃つ！！」

晴子 side END

義之 side

俺は206を見つけてスラスターの出力を上げようとした

義之「おや？1機突っ込んでくるな？」

そう1機だけ俺に向かって突撃してきた機体が居た、その機体は右手に保持していたライフルを放り投げて変わりにビームサーベルを抜刀した

義之「ほう、面白い！乗ってやるか！！」

俺も相手に合わせてビームサーベルを抜刀した

といつの間にか俺と目の前の機体同士の額がぶつかっていた、とその時だった

稟「おおおおおー！！！！」

と雄たけびが聞こえて、モニターに相手の顔が映った（俺の顔は向こうには見えない様に設定済み）、そしてその顔と声を聞いて俺は思い出した

義之「なるほどあの時の君か」

俺はそう言った、思い出したよ彼は2年前のタイタン戦争の時に日本帝国の光陽町で俺が助けた、あの時の少年か！

稟「やはり、あなたでしたか！あれから2年！ようやくここまで来た！！」

では少し本気を出してあげようか！！ちょうど俺を狙っているスナイパーも居るがまあ余裕だ！！

俺は少年の機体を蹴り飛ばして

義之「さて、お気の毒だが仕留めさせてもらおう！！」
本気を出した

義之 side END

第3者 side

結果的に言えば訓練生達は交戦開始してから10分で全滅したが、その結果は義之達にとっては満足いく結果だった
そしていよいよ総合戦闘技術演習は最後に面接を残すのみとなった

選定試験後編（後書き）

ようやくここまでキタ！

そして気付いた最近の作者の口癖が「かつたるい」になっている事に！！

気付いたら俺、純一になってきてるよ！！

戯言はここまでにしといて

後書きコーナー始まるヨ！！

作者「はい！始まりました！このコーナーは私作者の京^{けい}勇^{ゆう}樹^きと！」

雪音「アシスタントの田原^{たはら}雪音^{ゆきね}でお送りします」

作者「では早速今回のゲストよカモン！！」

一夏「呼ばれたから来た、織^{おり}斑^{むら}一夏^{いちか}だ、よろしくな！」

雪音「よろしくね」

作者「では早速ですがこれをどうぞ！！」

一夏に紙を渡す作者

一夏「これを読めばいいんだな？」

雪音「はい、お願いね？」

では

スタート！！

一夏「俺は、・・・俺は死なない！！」

作者「はい、乙！」

雪音「どうだった？」

一夏「ああ、なんか気合入る言葉だったな」

作者「左様でしたか」

雪音「では、今回はここまでね」

全員「」「」また、次回まで！さよーならー！！」「」

作者「気付いたらアクセス数がもうすぐ1万です！！嬉しいですが、未だにレビューが1つも来ないので寂しいです、どうか応援メッセージでも、この後書きコーナーへの要望でもアドバイス等で構いませんのでお願いします！！（土下座敢行）」

設定1の続き

(206訓練部隊編)

(前書き)

さてと、またしても設定です
そして祝1万突破ですよ

設定1の続き

(206訓練部隊編)

涼宮 茜^{すずみやあかね}、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属となった新任少尉

訓練部隊では隊長を受け持っていた、速瀬水月^{はやせみづき}に憧れて水泳部にも所属したほどである、高機動での近接射撃戦闘を中心に近接戦闘を得意とする、コールサインはレーヴァティン1
機体は高機動近接戦重視にカスタムされたアストレイ3型

築地 多恵^{つきしたえ}、訓練生から初音島統合防衛軍特務隊ワルキューレ隊所属となった新任少尉

訓練部隊では涼宮の補佐をしていたが涼宮曰く『何回貞操の危機を感じたか』と言わせるほどの百合っ子で、茜LOVEなのだ、パニックになったりすると何処かしらの方言を口走る、コールサインはレーヴァティン2
機体は茜と2機^{エレメント}連携を組むので高機動中距離重視にカスタムされたアストレイ3型

土見 稟^{つちみりょう}、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属になった新任少尉

以前は日本帝国の光陽町に住んでいたが、タイタン戦争時に町は炎で焼かれて初音島に移住、その後、幼馴染の八重^{やえさくひ} 桜にも言わずに軍の訓練学校に入った、最初は成績は最低のCランクだったが本人の血の滲む努力によりAランクまで上がった所謂秀才だ、勘が鋭く敵の攻撃を紙一重で避けるのを得意とする、尚タイタン戦争時に幼馴染の芙蓉^{ふゆ} 楓^{ふう}が死んだと思いでおり右腕の手首には楓の赤いリボンが巻かれている、志願した理由は無力な自分が許せなかったから。

コールサインはレーヴァティン3、機体は稟の耐G体性に合わせて

カスタムされている高機動近接戦重視にカスタムされたアストレイ3型

柏木 晴子、かしわはなこ訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属となった新任少尉でよく稟と2機連携を組む、エレメント視野の広さと瞬間的な判断力は高い、背は稟と同じくらい高い、スタイルも抜群で性格はかなり気さく、訓練学校に入る以前の普通の学校ではバスケットボールのPGだった、弟が2人居るためか面倒見がよく、しょっちゅう暴走する多恵を落ち着かせることが多い。

コールサインはレーヴァテイン4、機体は彼女のスナイパー適性に合わせてカスタムしたアストレイ3型

高原 陽子、たかはらひつし訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属となった新任少尉、性格は明るく部隊内ではムードメイカーの役割を受け持つ、コールサインはレーヴァテイン5

機体は彼女の得意な近接密集格闘戦に合わせて肩に3銃身式ビームガトリングを装備して手首にビームサーベルを固定装備しているアストレイ3型

麻倉 陽菜、あさくらひな訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊所属となった新任少尉、兄妹が男ばかりのため男言葉が少し目立つが優しく少し規律に厳しく学校だったら風紀委員になっただろう、コールサインはレーヴァテイン6、機体は彼女の得意な火力支援に合わせて両肩に2連装低反動250mmキャノン砲を装備しているアストレイ3型

設定1の続き

(206訓練部隊編) (後書き)

祝100000アクセス突破!!

嬉しいです!! (号泣)

今回は土見稟の所属する206を紹介しました

ここからは後書きコーナー押し通る!!

作者「はい、はじまりました!このコーナーは私作者の京勇樹けいゆうじゅと!

雪音「アシスタントの田原雪音たはらのゆきねでお送りします」

作者「まずは祝1万アクセスだ!!」

ドンドン!パフパフ!!

雪音「では、今回のゲストさんどうぞ?」

稟「つちみりんども、土見稟つちみだ」

作者「へい!いらっしゃい!!」

雪音「あなたは、どこぞの板前さんですか?」

作者の亡くなった祖父は元すし屋でした

作者「では、今回はこれを読んでください」

稟に紙を渡す作者

稟「これを読めばいいのか」

雪音「はい、よろしくね?」

ではスタート!!

稟「人はな痛みと悲しみを知るからこそ、強く、そして優しくなれるのね」

作者「はい、終了!!」

雪音「どうでした？」

稟「なんか、心に響いた・・・」

作者「それは俺の命題の1つです!」

雪音「暴力を振るうのは人の痛みと悲しみを理解していない最低な屑のすることよ」

作者「後は俺の心に刻んでる言葉は、力はただ力、人の心次第で善にも悪にもなる、って言葉がある」

稟「それも大事だな」

雪音「作者が格闘を覚える際に一番最初に覚えた言葉ね、時々格闘家が暴力事件を起こすけど、自分の力を理解してるのかしら？」

作者「俺達格闘家は自分の力を私利私欲で使ってはいけない、力は弱き人や大切な人を護るために使うべきなんだ!!」

稟「だな、武器を持つてるからって強くなった、強くなったから弱い奴を攻撃していいって考える奴は人間のクズだ」

雪音「と、ここまでにしときましようか」

作者「うむ、では」

全員「」「また、次回までさよーならー!!」「」

設定1の続き

(207訓練部隊編)(前書き)

引き続き設定です

しつこくすすいません

設定1の続き

(207訓練部隊編)

神 千鶴ちかづる、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となった新任少尉、少し太い眉毛に腰まで伸びてる2房の三つ網の髪、眼鏡が特徴の女の子で気が強い、よく彩峰あやみねけい 慧あやみねけいとは口論する、委員長肌でそれが原因か不明だが白銀しろがねたけ 武は委員長と呼ぶ、コールサインはバルキリー1で機体は彼女の得意な火力支援の為に両肩に3銃身式ビームガトリングを装備したアストレイ3型

御剣 冥夜めいや、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となった新任少尉、伸ばしたら膝辺りまである髪を一回後頭部あたりでわっか状態のポニーテールにしている、家の教育のためか少し侍のような言葉遣いになっている、彼女は本来、世界的大財閥の御剣財閥の令嬢なのだが、なぜか初音島の軍隊に居るどうやら日本帝国に深い縁があるのか日本帝国の刀術むげんきとつじゅうの無限鬼導流むげんきとつじゅうを免許皆伝で体得している、体得した際に師匠から現在の愛刀、皆瑠神威みなるかむいを貰っている、その為かMS戦でも近接格闘戦を得意としている、同訓練生だった白銀 武とは恋人同士である、呼称は武と呼ぶ、尚MS戦では白銀とよく2機連携エレメントを組みお互い息のあったコンビネーションで支援要請の頻度はあまり高くない

コールサインはバルキリー2で機体は彼女の得意な近接格闘戦にカスタムされたアストレイ3型

鎧衣 美琴みこと、訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となった新任少尉、ボーイッシュな顔立ちにショートカットの髪に1人称は僕とまるで男の子の様な女の子、父親の影響かサバイバル技術が長けているのと、かなりのマイペースで人の話をしよすきなみつちゆうスルーする、尚父親は諜報部の外務2課の課長で杉並の上司にあたり、初音島に居ることのほづが珍しい、コールサインはバ

ルキリー3で機体は彼女の得意な火力支援の為に両肩に8連装式M
ルス LRS”多目的ミサイルランチャー”を装備しているアストレイ3型

彩峰 慧、あやみねけい訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となった新任少尉、独特な雰囲気と少し寡黙なため少し孤高な感じはするが身体能力はかなり高く、ナイフの扱いに長けている、少し独断専行が多いがそれは自分の感覚を頼りにしているためで本人には悪意は無い、しかしそれが原因で榊 千鶴としょっちゅう口論しているのが見受けられる、コールサインはバルキリー4で機体は高機動近接戦闘重視にカスタムされたアストレイ3型

珠瀬 壬姫、たませみき訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となった新任少尉、本人と同じくらい長い髪をまるで猫みたいな髪型にしていて更に首には鈴をつけているのが特徴でかなりすばしっこい、家が弓道の道場を営んでるために狙撃の腕は当代随一だ、ただしアガリ癖があるため緊張すると体が震えるがそれは武と出会い一緒に訓練して克服した、父親は初音島の政府の外交官で壬姫を溺愛している、コールサインはバルキリー5で機体は彼女の狙撃適正に合わせてカスタムされたアストレイ3型

白銀 武、しろがねたけ訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の所属となった新任少尉、副隊長の御剣冥夜とは恋人同士でお互い名前前で呼び合っている、現在初音島統合防衛軍で正式採用されている新型OSの基礎概念を提唱した張本人、他人には真似できないような独創的な機動が特徴で機体の負担はあまり考えていないため”整備班泣かせ”で有名となってしまっている、だがそのかいあって機体制御ではかなり優秀な成績を誇っている、コールサインはバルキリー6で機体は白銀の機体制御と高機動に合わせてカスタムされている高機動近接戦闘万能型アストレイ3型

設定1の続き

(2007訓練部隊編) (後書き)

引き続き設定です、今度はマブラヴでも有名な第2007訓練部隊です

では後書きコーナーです！

作者「はい、ここからは私作者の京勇樹と！！」

雪音「アシスタントの田原雪音がお送りします」

作者「では早速今回のゲストよカモン！！」

義之「ここでは2回目だな、桜内義之だ」

雪音「よろしくね？」

作者「では早速これを」

義之に紙を渡す作者

義之「今回はこれか・・・」

雪音「はい、お願いね？」

では、スタート！！

義之「思いだけでも・・・力だけでも・・・」

作者「はい、終了！」

雪音「どうだった？」

義之「なんか、言うのに覚悟が必要なセリフだな」

作者「でしょうね、これは新たな力を得たがそれは強大な力で間違えれば世界を滅ぼしかねない力だったから」

義之「なるほどな」

雪音「では、今回は」」までね」

全員「」」また、次回までさよーならー！...」」」

設定1の続き

(210訓練部隊編) (前書き)

今度は210こと元JEUドイッ軍の皆さんです

設定1の続き

(210訓練部隊編)

クラリツサ・ハルフオーフ、元JEUドイツ軍特殊部隊シュヴァルツエア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の副隊長、現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の新任少尉、ラウラの副官を務めていた人物で祖国のドイツでは日本帝国の少女マンガを愛読していた、ユーラシアに敗れて復讐鬼となったラウラを見て心を痛めていた、しかしそんなある日ラウラから好きな男性(一夏だが)が出来たと聞いて安心かつ喜んだ、そしてラウラに間違った日本知識を植えた張本人である、尚シュヴァルツエア・ハーゼ隊内では唯一の20代の女性で10代ばかりの部隊の頼れるお姉さま的存在、コールサインはロスヴァイセ1で機体は基本オールレンジ対応にカスタムされたアストレイ3型

レティシア・ライゼンバツハ、元JEUドイツ軍特殊部隊シュヴァルツエア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の新任少尉だ、ユーラシアに敗れた後ラウラとクラリツサの判断に従い一緒に初音島に亡命して訓練生に志願した、一時は復讐鬼になっていたラウラに恐怖を感じていたが信じて待っていた、尚これは部隊全員だが、左目に黒い眼帯を装着している、コールサインはロスヴァイセ2で機体は近接格闘戦に比重を置いたアストレイ3型

クリステイアーネ・ホーエンフェット、元JEUドイツ軍シュヴァルツエア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の新任少尉、ラウラとクラリツサの判断に従い初音島に亡命してきた、クラリツサをお姉さまと呼び慕っている、部隊内では比較的年長者でクラリツサの副官的な立場だ、コールサインはロスヴァイセ3で機体は中距離戦闘

を主体にカスタムしたアストレイ3型

マルギツテ・エーベルハイト、元JEUドイツ軍シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の新任少尉、ラウラとクラリツサの判断に従い初音島に亡命した、部隊内では年少組みだが年齢にそぐわない冷静な判断力を持っている、コールサインはロスヴァイセ4で機体はスナイパー重視にカスタムされたアストレイ3型

エルトリンデ・アーシュベルク、元JEUドイツ軍シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊の所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の新任少尉、ラウラとクラリツサの判断に従い初音島に亡命して訓練生に志願した、部隊内ではムードメイカーの役割を担っている、明るい性格だ、コールサインはロスヴァイセ5で機体は彼女の得意な近接戦闘に比重をおいてカスタムされたアストレイ3型

エルシア・ハーヴェンス、元JEUドイツ軍特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の新任少尉、ラウラとクラリツサの判断に従い初音島に亡命して訓練生に志願した、エルトリンデとよく行動を共にしており、戦闘でも2機^{エレメント}連携を組む、部隊内でも小柄なのとエルトリンデと一緒に居ることが多いため部隊内ではマスコットキャラ的な扱いだ、コールサインはロスヴァイセ6で機体はエルトリンデと組むことが多いから中距離に比重をおいてカスタムしているアストレイ3型

ライラ・フリードリヒ、元JEUドイツ軍特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼ、通称黒ウサギ隊所属だったが現在は訓練生から初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊の新任少尉、ラウラとクラリツ

サの判断に従い初音島に亡命して訓練生に志願した、家は軍人家系で父親は艦隊の指揮官を務めており、上2人の兄はMS部隊のパイロットだ、尚彼女の口調が若干男口調なのは男が多かったためその影響なのだ、身体能力も高いので白兵戦も得意としている、コールサインはロスヴァイセ7で機体は基本オールレンジ対応にカスタムされたアストレイ3型

設定1の続き

(210 訓練部隊編) (後書き)

うーむ、設定ばかりですみません!!

ここからは後書きコーナーデス!!

作者「はい、ここからは私作者の京勇樹けいゆうきと!!」

雪音「アシスタントの田原雪音たはらのゆきねがお送りします」

作者「ではでは、今回のゲストよカモン!!」

駆「どうも、皐月さつき駆かけるです、よろしく」

雪音「よろしくね?」

作者「ヨロシク!!」

駆「なんか若干ヤンキーになりかけてる?」

作者「気のせいだ」

雪音「じゃあ、これを読んでくれる?」

駆に紙を渡す雪音

駆「これを読めばいいんだな?」

作者「はい!」

ではスタート!!

駆「道連れにするのはここにある戦争と兵器だけにしようぜ!!」

作者「はい、ゴール!!」

白黒の旗を振る作者

雪音「あなたはレースのフラッグーですか・・・」

作者「で、どうだった？」

駆「平和えの思いを感じた」

雪音「大切よね」

作者「では、今回はここまで！！」

全員「・・・では、また次回までさよーならー！！」

イメージOP&アンケート (12月17日若干修正) (前書き)

今回は作者のイメージOPを紹介します

あとアンケートに答えてくれると嬉しいです

イメージOP&アンケート (12月17日若干修正)

イメージOP曲

Gジェネレーションスピリッツの森口博子さん

「もうひとつの未来」あすstarry spirits」

まず最初に満天の星空が映つてすぐにイントロが入る

イントロが入ると同時に機動戦士ガンダム 英雄黙示録と文字が入る

文字は大体3秒くらいで砂みたいに消える

燃え盛る町の中を走る土見稟つちみりん、八重桜やえさくら、芙蓉楓ふようかえでの3人

突如3人の間に現れた6眼の四角い兜を被った全長約20m近くの
タイタン

そのタイタンにビームライフルを打ち込みながら画面を横切るエー
ルストライク

ストライクが画面を横切つたら風景が変わり炎が消えて満天の星空
と満月が映る

満月の下1人グラウンドを走る土見稟

ランニングを止めて星空と満月を見上げる土見稟

そんな土見稟の後ろから走りよつて左右から肩組みして笑いかける
おりむらいちか織斑一夏しるがなたけると白銀武(右に一夏、左に武)

そんな2人を見て笑う土見稟

そんな3人を離れて微笑みながら見ている同期の訓練生の女の子達
(206、207、208、210)

そして2階の教官室の窓から嬉しそうに見ているおりむらじふゆ織斑千冬と神宮司
まりも

画面が変わつて広い部屋に居る30人くらいの軍服(イメージ的に
はオーブ軍の軍服)を着た男女(真ん中に義之、義之の右に麻耶、
左にみちる)

更に変わつて和風な部屋の真ん中にある机、机から立ち上がり走り
よつてくるよしの芳野さくら

そんなさくらを笑いながら見ているアイシア

画面と場所が変わって学校

授業中の教室、黒板に文字を書いている紅薔薇撫子^{べにばらなでしこ}

それをノートに書き留めている天枷美夏と朝倉由夢^{あまかせみなつ あさくらゆむ}

窓際の1番後ろの席に座って同じようにノートに書き留めている桜と楓

桜と楓がふと気付いたように視線をずらして桜の花びらの舞う窓の外を見る

桜の花びらが強風に煽られて勢いよく舞う

画面いっぱい青空が映って、次の瞬間火花が散る

エールストライクとM1アストレイがビームサーベルで切りあう

画面が2つに分かれて左側にヘルメットを被った義之、右側には同じくヘルメットを被った稟

そんな稟を援護しようとする1機のスナイパーライフルを構えたアストレイ

カットインが入り真ん中にヘルメットを被った柏木晴子^{かしわきはるこ}

砲撃を後方宙返りして避けるストライク、避けて機体の方向を画面に向ける

画面にストライクが迫り、過ぎてストライクが消えるとアークエンジェルが映る

ブリッジが映って艦長席に座って指示を出す朝倉音姫^{あさくらねむ}

アークエンジェルが動いて左に舵を切る

そしてアークエンジェルが消えると初音島の全体が横向きに見えて、その上空に10枚の翼を持つガンダムタイプの影が見えて胸部から煙を出して一気に機体が上昇して太陽が映る

そして最後にもう1回機動戦士ガンダム 英雄黙示録の文字が映る

はい作者のイメージOPでした、分かりにくかったらごめんなさい
でここからはアンケートです

このようにOPは簡単に曲決め出来た作者ですが

EDがなかなか決まりません

ですので読んでくださった皆さんに聞きます

この曲がEDに良い！と思ったらどうか教えてください！！

一応考えているのが同じくGジエネレーションスピリッツに使用さ
れている

森口博子さんの「それでも生きる」

なんですけどなんかしっくり来ないんです

どうかこのおバカな作者に入れ知恵を！！

それと後書きコーナーの要望も受け付けます！ ドシドシお送りく
ださい！！

ご応募お待ちしております

あ、それとこの曲もOPに良いんじゃないかなという曲も受け付け
ます。

どしどし応募ください、作者が良いと思ったら、前書きに推薦して
くださった方の名前と曲名を書きます。

応募待ってます！！

イメージOP&アンケート (12月17日若干修正) (後書き)

今回は後書きコーナーは割愛します

驚愕の配属日と再会（前書き）

今日は後書きは割愛しますが宣伝があります

驚愕の配属日と再会

俺、土見稟は少し憤っていた

稟（俺に会いに来てくれた子達には悪いけど・・・）

それはつい1週間前の総合戦闘技術演習の最終日の面接の時だった

回想

義之（稟は気づいてない）「（若干低い声で）実は神界と魔界から君に会いたいと言ってる子達が居てね？もし君が望むなら実戦部隊から外れて風見総合学園に通うことも可能だが、どうする？」
と言われたのだ、もちろん断ったが

回想終了

稟（それじゃ、なんの為に軍に入ったんだ！意味無いだろ！！）

俺は俯きながら歩いてた、すると

晴子「土見 なに暗い顔してるの？今から新しい配属先に行くんだからさ！」

そう言いながら柏木は背後から俺に寄りかかってきた

柏木の身長は俺と大差ないのでつま先が引きずる形になってズルズルと音が聞こえる

そして背後数mには涼宮 茜達が居る、そう今俺達は昨日言い渡された第8機動軍に向けて歩いているのだ

そしてしばらく歩いたら

一夏「あ」

武「お？」

クラリツサ「おや」

なんと同期の訓練生（元）に交差路で出会ったのだ

稟「もしかしてお前達も第8機動軍か？」

俺は半ば確信を持ちながら聞いた

一夏「ああ、武もか」

武「おお、クラリツサさんも？」

クラリツサ「ああ、これは偶然か？」

稟「どうだろ？そっぴやお前達ももしかして、所属不明の機体に襲撃されたか？」

俺は一応聞いてみた

一夏「ああ、ガンダムタイプが3機も居た」

武「3機！？俺達は1機だけだったな、あとはどうも新型のアストレイタイプだった」

クラリツサ「私達は3機ともアストレイタイプだったが1機ずつ装備が違ったし、相当の手練だった」

稟「俺達は確か3機だったな、しかも1機は英雄、ストライクだった」

206以外全員「……英雄だと！？」「……」

おお全員驚いてる

晴子「しかも、土見は英雄とどうも知り合いみたいだよ？」

晴子と土見以外全員「……なに！？」「……」

茜「ちよつと土見！それ本当！？」

稟「ああ、そうだが、つて近い！近いから！」

気づいたら俺の周囲は完全に囲まれている！怖いわ！！

武「どうやって知り合った！？」

稟「俺は元々は日本帝国の出身なんだよ、でタイタンに殺されそうになった時にストライクに助けられたんだよ、でも直接的には面識は無いな」

全員「……なるほど」「……」

シャルロット「ねえ、そろそろ行かないとこんな所で喋ってたら間に合わなくなるよ？」

一夏「そうだな」

稟「確かこつちだったな」

俺達は歩き出した

武「あれー？ たしかこつちだったよな？」

稟「ああ、こつちで合ってる筈だ」

一夏「もうすぐのはずなんだがな」

今俺達は若干迷子になりかけていた

シャルロット「ねえ、本当にシヤレにならない時間なんだけど！？」
一夏の隣にいたシャルロット（だったか？）が時計を見ながら急かしている

一夏「わかつてるけど……お？」

稟「どうした、一夏？」

一夏は人工島の岸壁の方を見ている、俺も視線を移動させた

稟「誰か居るな？あの制服は……整備員か？」

そう視線の先には麦わら帽子を被った整備員が岸壁に腰を下ろして、手に釣竿を持って糸を海に垂らしていた

武「なあ、ここはあの整備員に道を聞かないか？」

稟「そうだな、確かにそろそろヤバイ」

俺は時計を見ながら言った

稟「すいませーん！」

義之（稟達は気づいていない）「（若干低い声で）ほいほい？」

整備員はこちらに振り向いた

一夏「ちよつと道を聞きたいんですけど」

義之「別にかまわないが、何処だい？」

稟「はい、第8機動軍です！」

義之「ああ、第8か、……なんなら連れて行ってあげようか？」

優しい整備員さんだな

シャルロット「ええ！ 悪いですよ」

シャルロットが遠慮した

義之「いや、第8には俺もちょうど用事があるからな、別にかまわないさ」

そう言いながら整備員の人は釣竿に糸を巻きつけながら立ち上がった
義之「じゃあ、付いておいで？」

そう言いながら整備員は先頭に立ち歩き出した

稟sideEND

第3者side

義之「そういえば君達は新人かい？」

義之は歩きながら聞いた

稟「はい、今期で新規に配属になりました！」

義之「なるほどね、その制服を見るにMSパイロットか」

一夏「はい」

稟達は質問に答えていく

が整備員の姿の義之を睨みつけている人物が居た、それは……

ラウラ（あの立ち姿に、あの気配は只者ではないな……しかもあの気配は整備員が出すものではない……）

ラウラだった、ラウラは今居る中では数少ない実戦経験者だ

クラリツサ（隊長あの人物只者ではありませんね？）

どうやらクラリツサも気づいていたようだ

ラウラ（ああ、それと今の私は隊長ではない）

クラリツサ（そうでしたね、しかしあの気配は祖国でも放てるのは）
ラウラ（ああ、七英雄と死神部隊ドクトくらいだ、何者だあの男は？）

2人は小声で話し合っていた

そして

義之（ふむ、どうやら薄々感じているようだな、流石は元JEU特
殊部隊の隊長に副隊長か・・・）

それは義之も同じだった

そして

義之「ここが第8機動軍の施設だ」

話しながら歩いていたら着いたようだ

稟「ありがとうございます」

義之「では、入ろうか？」

そう言うと義之はIDカードをカードリーダーに通した

そして開くと

麻耶「あー！ 義之！ 何処ほつつき歩いてたの！！」

義之「やべー!？」

義之以外の新人「「「「「え?」「「「「「

みちる「そう簡単に本部から離れてもらっては困ります大佐?」

新人全員「「「「「大佐!?!」「「「「「

義之「何時気付いた?」

麻耶「約10分前よ! まさかマネキンにカツラと仕官服を被せる
なんて思いもし無かったわ」

義之「むう思ったより早くバレたか、因みに今回の協力者はあちら
に居ます楯無少佐だ」

と義之は右の通路を指し示した

麻耶「え?」

麻耶が見ると

楯無「てへ」

と言いながら扇子を広げている更識楯無が居た（扇子にはドッキリ

成功と書かれている)

麻耶「もう、楯無少佐!!」

楯無「きゃー」

逃走する楯無、そして楯無の扇子には逃走中と書かれている、...

・・何時の間に変えた?

シャルロット「あ、あのー?」

みちる「む? 君達は?」

一夏「はい、自分達は本日付けて第8機動軍に配属することになった、新任少尉です」

麻耶「第8機動軍? 間違いないのね?」

武「はい、この書類にもそう書いてあります」

武は言いながら麻耶に書類を渡した

麻耶「ふむ、本当ね、で義之! いい加減に着替えなさい!!」

麻耶は叫びながら義之に仕官服を投げつけた

義之「あいよ」

義之は着ていた整備員の制服を脱いで、仕官服を着た

稟「!?!? この声は!!」

晴子「英雄!?!」

他の新人達「????え!?!」

義之「おお、そついや自己紹介がまだだったな、俺の名前は桜内義之、階級は大佐だ」

義之は肩の襟に縫い付けてある階級を指で叩いた

新人全員「????え~~~~!!?!?!」

新人達の驚いた叫びがピロティー(入り口の広間)に響いた

所変わって

義之「全員そろったな？」

新人含めて集まっていたのは広大な会議室だった
人数は部屋の中央に居る新人含めて約60名ほど

義之「では、改めて自己紹介しよう、俺はこの特務部隊ワルキュー
レ隊部隊長の桜内義之大佐だ、よろしく」

新人S「ワルキューレ？」

義之「うむ、因みに第8機動軍なんて存在しないからね？」

新人S「え！？」

義之「麻耶？」

義之は右隣に待機していた麻耶に声をかけた

麻耶「ええ、あ、そうだった私は義之の副官のさわいまや沢井麻耶、階級は少

佐よ、よろしくね」

新人S「よろしくお願いします！」

麻耶「じゃあ、モニターを見てね」

そう言うのと麻耶は手元に空中投影式キーボードを出すと操作した、
すると新人達の目の前に空中投影式モニターが出た

シャルロット「あれ？ 第7までならあるけど第8機動軍なんて書
いてない？」

シャルロットの言うとおりモニターには第7までなら書かれている
が第8機動軍なんて書かれていない

一夏「なに？」

セシリア「本当ですわね」

義之「当たり前だ、第8機動軍つてのはワルキューレ隊の隠れ蓑だ」
みちる「ワルキューレ隊は重要機密でな、名前が表に出てるのは隊

長の桜内義之大佐くらいだ」

麻耶「で、ここに特殊任務部隊つてあるわね」

麻耶はそう言いながら大総統の下を指差した

稟「はい、確かに書かれていますね」

義之「これが俺達、初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊だ！」
新人S「「「「「特務隊!?」「」「」」」」」

義之「おう、俺と麻耶は自己紹介したな、じゃあ右から自己紹介していけ」

みちる「私はMS隊の副隊長の伊隅みちる、階級は中佐だよろしく」
みちるが敬礼しながら言うと新人達も全員で返礼した
まゆき「あたしは高坂まゆき、階級は中佐、よろしく」

新人S「「「「「よろしくお願いします」「」「」」」」」

菊理「私は橘菊理です、階級は中佐です、よろしくね」
新人S「「「「「よろしくお願いします」「」「」」」」」

で自己紹介も終わり（俺&私達の登場はまだか!? by未登場の
キャラクター同）

義之「自己紹介も終わったし、これからMS格納庫ハンガーに行つて君達用にMSをカスタムするか」

凜「え? そんなことできるんですか?」

凜は新人を代表して聞いてきた

義之「出来るよ? それじゃ着いて来て?」

義之はそう言うと扉に向かう

新人S「「「「「はい」「」「」」」」」

新人達は義之について行った
しばらく歩くと

義之「ほい、ここがMS格納庫だ」

茜「あ！ あそこにある機体は！」

涼宮茜は黒と金色の機体を指差しながら言った
多恵「私達と交戦した機体だ！」

義之「おお、そついや言つてなかつたな、あれは俺達だ」

新人S「……え！？」「……」

茜「なんで、あんなことをやっただんですか？！」

涼宮が驚きながら聞いてきた

義之「あれが選定試験だったんだよ」

新人S「……選定試験？」「……」

義之「ああ、この部隊に入れるかどうかのな」

新人達は全員茫然自失状態に陥っている

みちる「で、全員合格だったと言うわけだ」

義之「うむ、それじゃあ、虚さん！」

簪「え！？」

虚「はい、あら簪様、お久しぶりです」

虚さんはそう言いながら恭しくお辞儀した

義之「ああ、そつえば虚さんの家は」

虚「はい、布仏家は更識家の使用人家系なんです」

義之「ふむ、それならば楯無少佐！ 居るんでしょ！？」

義之が右の通路を見ながら大声を出した

楯無「あら、バレてた？」

楯無がひよつこりと現れた（手の扇子にはイタズラ失敗の文字……

……どんだけバリエーションあるの？）

簪「お姉ちゃん！」

楯無「やつほ 簪ちゃんこの前は大分強くなってたみたいでお姉

ちゃんビツクリしちゃった」

簪「え！？ もしかしてあの青いアストレイはお姉ちゃん！？」

楯無「そ」

元208一同「……なに！？」「……」

義之「あー、そろそろいいか？」

義之が呆れながら聞いてきた

新人S「……はい！ すいません！」「……」

新人一同一気に整列&直立姿勢である

義之「うむ、では……」

？「おほ！ 可愛いこちゃん発見！！」

義之「……」

義之が上を見ると、キャットウォークから某怪盗？世跳びでくる整備員の服を着たサル顔のバカが1名

バカ（扱い酷くね！？）「可愛いこちゃーん！！！！」

義之「香里中尉！ 修少佐！！」

2名「は！！」

義之が2名の名前を呼ぶと義之の両脇からすばやく影が走り

香里「天誅！！」

と巨大スパナ（長さ1m）で活発そうな少女の本名、なつきかおり奈月香里が頭を殴り

バカ「ゴフ！！」

修「教育的指導！！」

眼鏡をかけて首にヘッドホンをかけた少年の本名、あまみしゆう天見修が某街頭喧嘩の 竜拳並のアップパーを腹部にクリーンヒットさせた

バカ「ガハ！？」

そして技を当てた2名は華麗に着地すると

バカ「ぐえ！！」

バカが頭から落ちた

新人S「……死んだー！？」「……」

義之「あー、大丈夫だ、何時ものことだから」

新人S「……日常茶飯事！？」「……」

そんなやり取りをやっていると

香里「この、バカ匡！ただし あんたはサルなの！？」

修「それにお前は軍曹だろ、新人達は全員少尉だ、上官侮辱罪にな

るぞ？」

匡「お前ら俺に対する謝罪は無しか!？」

頭から落ちた匡こと照屋匡は姿勢を正すと2人に問いただしたてるやだし

2人「無い!!」

匡「断言された!？」

そんな漫才をしていると

義之「照屋匡軍曹!!」

義之が腰に両手を当てて大声を上げた

匡「はい!」

匡は直立して固まった

義之「今はまだ作業中のはずだが？」

匡「あ・・・え・・・その」

義之「今戻るなら今回は見逃してやるが？」

義之は無表情で聞いた

匡「失礼します!!」

照屋匡はダツシユで作業に戻った

新人S「・・・（啞然）」

新人一同茫然自失状態になっていた

義之「さてと、少し時間が掛かったが本来の作業に入るか」

そう言つて義之は新人達1人1人に合わせてアストレイ3型をカス

タムした（カスタム例は各部隊偏の設定参照）

そしてカスタムも終わりました広い会議室に戻ってきた一同

限り最善を尽くせ！ 決して犬死するな！」「」「」

義之「その通りだ、その言葉胸に深く刻み込んでおけいいな？」

新人S「」「」「はい！」「」「」

新人の顔は真剣そのものだった

義之「では最後に上官の朝倉純一大總統あまぐわいじゅんいちのお言葉を伝える」

新人S「」「」「はい！」「」「」

義之「んん！ 『かつたるいから敬礼とか、敬語はなしで』以上」

新人「」「」「……はい？」「」「」

新人一同眼が点状態になっていた

義之「あれ、気付いてなかった？ 俺に対しても敬語とかなかった
る？」

新人「」「」「……あ！」「」「」

新人一同は今日を振り返りながら思い出して声を出した

義之「隊内では一切敬礼とか敬語は無しな？ 因みにこれは芳野さ

くら大統領の命令でもある」

新人S「大統領！？」

新人達はありえない名前が出て驚愕している

義之「そ、ここは大總統の直轄でもあるが大統領直轄でもある、つ

て訳で本日はこれまで！」

全員「」「」「はい！」「」「」

義之「先任は解散して通常シフトへ以降！ 新人は全員こっちに来

い」

全員「」「」「はい！」「」「」

先任は全員部屋を出て、新人が全員義之の前に集まった

義之「えーと、どこに仕舞ったけな？ あ、あった」

義之は大きい封筒の束を取り出すと

義之「ほい」

と机の上に置いた

稟「あの、これは？」

稟が新人を代表して聞いた

義之「ん？ 自宅通勤許可書」

新人S「……え！」「……」

新人達は驚いた、それはなぜかと言うと

シャルロット「自宅通勤許可書は本来佐官からの筈ですが」

そうなのだ自宅通勤は本来ならば佐官からしか許可されないのである
義之「ここでは許可されている、さくらさん曰く家族は仲良くしな
いとね、だそうだ」

新人S「……」

新人達は一同呆然としていると

義之「はいはい、さつさと受け取って今日は帰った帰った、俺はま
だ仕事があるんだ」

と義之が手を叩きながら言ったので新人達は1人ずつ封筒を受け取
って帰宅した

第3者sideEND

稟side

稟「とはいえ俺に帰る家なんてないんだけどなー」

と俺は書類の入った封筒を開けて書類を見ながら言った

稟「はー、ん？ まだ1枚入ってるな？」

俺は書類を仕舞おうとして中を見たらまだ1枚書類が入ってるのを
見つけた

稟「えーと、なにに？ 土見少尉はこの住所に向かうこと？」

俺は首を傾げた、家を借りた覚えは無いんだがな

俺はちょうどよく近くに来た無人タクシーを見つけたので右手を上

げた

無人タクシーはスルリと近くに寄りドアが開いて紙を見ながら住所を入力した

そしてタクシーは発進した

稟「ここは・・・」

俺は呆然と目の前にある家を見た

稟「なんでこの家が・・・」

その家は日本帝国の光陽町で俺と楓と幹夫みきおさんが住んでいた家だった
俺はただの偶然だと思えば表札を確認して驚いた

稟「芙蓉・・・」

その名前を見て俺は2年前を思い出し、足が竦んだ

稟「いや、大丈夫・・・」

俺は恐る恐る呼び鈴のボタンを押すと家の中から電子音が響き、その直後足音が聞こえて

？「お帰りなさい稟くん」

俺の目の前に死んだはずの楓とずっと連絡を絶っていた桜が現れた

稟sideEND

驚愕の配属日と再会（後書き）

このたび私、京勇樹^{けいゆうき}は新しい小説を書き始めました

その為今まで以上に更新が不定期になりますが無卒了承の程をお願いいたします

新しい小説はダ・カーポ？とリリカルなのはstriker'sとオリキャラのクロスです

題名はD・C？なのはstriker's 漆黒と桜花の剣士
ですこちらもよろしく願います

アクセス数1万5千突破記念雑談会（前書き）

雑談（混沌）会の始まり

アクセス数1万5千突破記念雑談会

作者「ここでは初登場の私作者の京勇樹けいゆうきです！」

雪音「こんばんわ、それともこんにちはかな？アシスタントの田原たはら雪音ゆきねです」

作者「と言うわけで今回はアクセス数1万5千突破記念の登場キャラの雑談会です」

雪音「それよりも、本編の執筆は進んでるの？」

作者「う、うむ、一応ゆつくりだが進んでる、読者の皆様どうかこの哀れな私にエールをください！！（土下座敢行中）」（プライド？ なにそれ？ そんなもの犬に食わせたわ！）

雪音「まあ、いいけどあまり待たせないようにね？」

作者「うす！」

体育会系のノリで答える作者

雪音「はあ、では本日のゲストさんどうぞ？」

稟つちみりん「どうも、土見稟つちみりんです」

義之さくらいよしゆき「よ、桜内義之さくらいよしゆきだ」

麻耶あま「お久しぶりね、沢井麻耶さわいあまです」

桜やえなぐさ「えつと、こういうオマケ（？）では初めましてですね、八重桜やえなぐさです」

楓ふゆつかえで「そうですね、私も初めてです、芙蓉楓ふゆつかえでです」

武しろがねたける「こんな大規模は初めてだな、白銀武しろがねたけるだ」

冥夜みつるぎめい「うむ、流石にここまで多いと壮観だな、御剣冥夜みつるぎめいだ」

作者「今回はこの人達に来ていただきました！」

雪音「改めて考えると、この作品の未登場含めるとキャラ数って相当な数よね？ どうして？」

作者「うむ、最初は今の数の3分の2くらいだったんだが、ちょっと構想を練ってたら気付いたらこんな数になってました……」
遠い眼をして明後日の方向を見る作者

雪音「要するに自爆？」

作者「うむ……（ズーーン）」

作者の周囲に黒い影が立ち込めている

麻耶「えーと、なにかよくわからないけどがんばってね？」

作者の肩に手を置いて励ます沢井嬢

作者「ありがとう……」

義之「で、俺の立場（部隊の隊長）は結構最初に決まってたんだよね？」

作者「うむ、それは結構すんなり決まった」

稟「俺の設定と」

武「俺の設定もか？」

作者「うむ、結構すんなりと」

楓「私達（他の女性キャラ）の設定もですか？」

作者「おう、まあ多少悩んだキャラも居たが基本すんなりと決まったね」

冥夜「しかし、私が初音島の軍隊に入って大丈夫なのか？」

作者「なにが？」

冥夜「いや、御剣財閥の本家だが……」

作者「ああ、そちらも万事滞りなく決まっておりますよ？」

冥夜「そうなのか？」

作者「はいな、もう少ししたらそれ関係の話にも突入しますから待っててね？」

冥夜「ふむ、それならば待ってやろう」

作者「あざーす！」

雪音「それじゃ、作品関係の話はここまでにしておいて、ここからは少し作者の身の回り暴露といきましょうか？」

作者「ちよ!？」

作者&雪音以外「「おーー」「」」

雪音「では、まず作者は基本いい加減ね」

桜「そうなんですか？」

雪音「ええ、机の上には本が山積みだし」

作者「待て！ それ以上言わせるk」

義之「お前は少し黙ってる！」

作者「ぐお！」

縄でグルグル巻きにされたあげく猿轡と目隠し及び耳栓された作者

雪音「えーと、こんな感じね？」

と作者の机の写真を見せる雪音

武「うわー、これでよく崩れないな」

雪音「作者曰く絶妙なバランスで保たれてるそうよ？ なんでも大

震災でも大して崩れなかつたらしいわよ？」

義之「それは凄いな・・・」

雪音「むしろ崩れたのは隣の姉の机だとか」

楓「どんな机なんでしょうか・・・」

雪音「こんなだけど」

また写真を見せる雪音

全員「・・・」

麻耶「足の踏み場もないわね・・・」

絶句して言葉が出ない子達に変わって言う麻耶

義之「うおー、掃除してえ」

家事全般得意な義之はどうやら掃除したくなっている模様

雪音「でこちらがそのベッド」

今度は別の写真を見せる雪音

全員「・・・ベッドの意味ない（ねー）！」「」

武「ダンボールで半分埋まって、さらに残り半分は洗濯物の山か

い！」

雪音「実質、2人部屋なのに今は1人だけだそうよ？」

麻耶「お姉さんは何処で寝てるの？」

雪音「下の部屋のソファか、隣の部屋の空いてるスペースらしいわ

ね、でこっちが作者のベッド（2段ベッドの上の段）」

全員「・・・こっちのほうはまだマシだ（です）！」「」

稟「3分の1は本で埋まってるけど、まだ寝るスペースは確保されてるな（縦に）」

義之「お？ 俺達の原作本があるぜ？ ダ・カーポ？が」

麻耶「あら本当」

武「おい、冥夜俺達の原作本もあるぜ？ マブラヴのオルタネイティブが」

冥夜「む？ 本当だな」

稟「お？ 俺達のもあるな、しかも桜が初登場のリアリィ？リアリィ！が」

桜「本当だ！」

楓「これでは私にご迷惑をおかけしましたね」

稟「なんの」

桜「いいよ楓ちゃん」

とその時だった

作者「だーらっしゅー！ー！」

縄を引きちぎって作者脱出

全員「「「「「引きちぎったー！ー！？」」「」「」

作者「火事場のクソ力ってやつだ！ ってかてめえら好き勝手やってくれたな！ー！」

義之「ちい！ 縄じゃなくて鎖にすべきだったか！ー！」

作者「ここからはあのコーナーやるぞ！ー！」

マズは女性キャラからだ！

麻耶「期待してるわよ、未来の旦那様」

義之「……（顔真っ赤）」

麻耶「お願いだから、なにか言ってよ！ 言ったこっちだって恥ずかしいんだから!？」

義之「本望!!」

はい次！

桜「（上目遣い&若干涙目で）お兄ちゃん？」

稟「ごは!?!?（吐血）」

義之「これは……結構破壊力あるな」

楓「稟くん!?! 大丈夫ですか?!」

稟「我が人生にいつぺんのくいなし!」

雪音「北の拳!?!」

もういつちよ!

楓「私を好きになってくれてありがとうございます」

稟「普通にかわいい!」

桜「うう、私もこういう普通のセリフ言いたかった……」

お次!

冥夜「人間を無礼^{なめ}るな——！」

武「なんか似合うな」

作者「しまった！？ 普通だった！！」

お次は男性キャラだ！！

義之「お前の幻想^{おぼせ}は簡単には死^おなないぜ？」

麻耶「なんか似合う……（顔赤い）」

次！

稟「おら、起爆するぞー！ 全機伏せろ——！！！」

桜「おー！ かつこいいー！！！」

楓「似合いますよ稟くん！」

はい、ラスト！

武「これは死ではない！ 人類が生きる為の！！ 生きて未来を切り開け！！」

冥夜「男前だぞ！ 武！！」

はい終了！！

作者「はい、今回はここまで！！」

雪音「少し長いだけで結構疲れるわね」

稟「楽しかったな」

義之「おう、確かにな」

武「またやってもいいかもな」

桜「うう、次は普通のセリフがいいな・・・」

楓「私もです・・・」

麻耶「恥ずかしかった・・・」

冥夜「こういうのも楽しいものだな」

全員「！！！！ お次は本編で会いましょう！ さよーならー！！！！」

アクセス数1万5千突破記念雑談会（後書き）

後書きは割愛しますが、どうか今後もこの作品をヨロシクお願いします！！

おまけ2 黒歴史 恐怖の新人歓迎会（前書き）

本文はもう少し待ってください！

尚今回、花咲茜はなさきあかねと涼宮茜すずみやあかねの見分けのために最初に（ ）で花と書いてあつたら花咲で、涼と書いてあつたら涼宮です。

おまけ2 黒歴史 恐怖の新人歓迎会

今日は、昨日新しく配属になった新人達の配属を記念しての歓迎会だった。

義之「まあ、長ったらしい挨拶はしないで、……今日は無礼講だ！ かんぱーい！」

全員「……かんぱーい！」「……」

そう言つて、全員各々料理を食べ始めた、……あんな事になるとは予想せずに……

稟「そういえば、今日の料理って食堂の料理ではないですよね？ 誰が作つたんですか？」

ふと疑問に思つたのか、稟がそう質問してきた。

義之「んあ？ それなら俺と」

麻耶「私と」

音姫「私だよ？」

新人一同「……え！」「……」

新人一同驚愕である

先任たちは慣れてるのか普通に食べている。

晴子「隊長達って料理できたんですねー」

晴子がそう言つと

？「そうそう、義之のメシは超美味いんだよなー」

そう言つたのは

稟「板橋准尉、雪村少尉に花咲准尉に月島少尉」

アークエンジェルのブリッジクルーの面子だった。

稟は思わず敬礼しそうになったが

渉「あー、敬礼はいらねーよ」

それを渉が先に征した

(花)茜「そうそう、ここではね？」

小恋「うん」

杏「ええ」

雪月花の3人もそれに賛同した

因みに雪月花とは雪村、月島、花咲の頭文字を取った3人の通称だ。

小恋「月島たちも料理はできるけど」

杏「流石に、義之や音姫さんほどではないわね」

と口々に義之たちを賞賛していた。

麻耶「私も流石に2人には敵わないかな？」

義之「いやいや、麻耶も美味いよ？ 寿司は俺あんまり作らないし」

(涼)茜「ええ！？ あのちらし寿司と握り寿司は沢井少佐が作った

んですか!？」

麻耶「ええ、そうよ」

多恵「まるで、本物の板前さんが作ったのかと思いました！」

麻耶「あら、ありがとう」

そう話していると

?「いやー、本当に大佐の手料理はおいしいな」

?「ああ」

?「そうだねー」

そう言いながら現れたのは

義之「おお、如月少佐に真田大尉に穂村中尉か」

そこに居たのはアイギス隊長の如月修史少佐に副官の真田設子大

尉に同隊所属の穂村有里中尉だった。

稟「アイギスの3枚楯ですか!？」

修史「おお、その名前本当に有名なんだな」

設子「だから、そう言ってるだろ」

有里「修史はもう少し情報収集能力上げたほうがいいよ?」

修史「なんだとー!?!」

と、言い合ってたその時だった

?「ごふあ!?!」

駆「賢久!?!」

と誰かが吐いた様な音が聞こえ、続いて鈍い倒れた音が響いた後、ラウンズ隊の副官の皐月駆大尉の驚いた声が聞こえた。

義之「どうした?」

義之が物音の方を見ながら聞くと

?「賢久先輩が倒れましたー!」

と金髪で青い目で小柄な性格が明るい女の子、ラウンズ隊所属の広原雪子少尉が叫んだ

美鈴「どうせ食いすぎで腹を壊したんだろ?」

と、ラウンズ隊の隊長の草壁美鈴が、倒れている肩あたりまで伸ばした灰色の髪が印象の長身の男、田島賢久中尉を、足で小突きながら言った。

雪子「いえ、食べた量自体は何時もより少ないんですけど・・・」

義之「けど?」

菊理「スペアリブを食べたら倒れましたよ?」

とオーティーン4の橘菊理<たちばなくくり>中佐が言ったのを、聞いた義之は首をかしげながら

義之「スペアリブ?」

と、倒れてる賢久の手を見て

義之「あれ? なあ音姉おとねえに麻耶、俺達スペアリブなんて作ってたっけ?」

音姫「ううん」

麻耶「作ってないわね」

義之「だよな、じゃあ誰が作ったんだ?」

と3人で首をかしげていると

？「あ、それ、あたし」

と、言ったのは

修史「蓮れん！？」

シヨートカットの青い髪が特徴の活発な印象を与える、アイギス隊所属の椿原蓮中尉つばきはられんだった。

有里「蓮さんが作ったの！？」

設子「いかん！ 全員スペアリブは食べるな！」

と、設子が切羽詰った様子で叫ぶと

陽菜「なんでですか？」

陽子「おいしそうですけど？」

と新人が疑問に思ったのか聞くと

？「それは見た目だけよ」

？「そうそう」

と言いながら蓮の近くに現れたのは、腰まで伸ばした金髪に緑色の目が印象的なお嬢様という表現がピッタリな女の子で、アイギス隊所属の名前は春日崎雪乃大尉かすがさきゆきのと

小柄な体躯に外国人の祖母譲りの青い目とツインテールにした白髪が特徴のアイギス隊所属の新城鞠奈少尉しんじょうまじなだった。

雪乃「蓮の料理は殺人級でね」

鞠奈「前、訓練校時代に催したお茶会で大惨事が起きたんだよ」

と言つと

設子「通称、死のお茶会事件、あれは酷かった……」

設子は当時を思い出しながら暗い目で明後日の方を見た。

シャルロット「そんなに酷かったんですか？」

シャルロットが聞くと

義之「聞いた話だと、当時参加した訓練生のうち確か6割ほど病院送りになったとか……」

と上を向きながら言った

新人一同「……」6割が病院送り……「……」

と新人達が呆然としていると

修史「さてと、蓮よ今回は何を入れた？」

蓮「え？ 近くにあつた調味料適当に入れたただけだよ？」

料理出来る人一同「「「「適当に入れるな！！」「」「」」

蓮「ごめんなさい！！」

蓮は料理が出来る人達全員に怒られて土下座していた

駆「賢久！ しつかりしろ！！」

駆が賢久をゆすつてしていると

賢久「ああ、大丈夫だ・・・」

と賢久が答えたので

駆「よかつた・・・」

駆が安堵した瞬間だった

賢久「あの、川を渡ればいいんだろ？」

駆「渡るなー！！！！」

というやり取りがあり

賢久「なに？ 6万だ？ ふざけんな、船賃は6文と相場が決まっ

てr」

と賢久が言った瞬間

美鈴「起きろ！！」

と美鈴が拳を腹めがけて振り下ろし

雪子「賢久先輩！！」

と雪子がフライングニードロップを顔面めがけて決めた

賢久「ごは！ は！？ 俺は一体！？」

賢久が起きたのを確認した義之は

義之「よし、これで大丈夫」

と言おうとした瞬間

何故か音姫が義之の腕を掴んだ

義之「あのー、音姉？ なぜに俺の腕を？」

と義之は気付いた

音姫の顔が”赤い”

嫌な予感がした義之は先ほどまで音姫が飲んでいた缶を見ると

<カシス・オレンジ>と書いてあった

義之「飲み物買ってきたのは誰だー！？」
と思わず叫ぶと

みちる「確か、速瀬ですね」

と聞いたので

義之「水月ー！ー！ー！」

と叫びながらアテナ隊長の速瀬水月少佐はやせみづきを見ると

水月「えー、たまにはいいじゃん！」

とビールの缶片手に言った

義之「おま！？ 俺達未成年！」

*良い子の皆は飲むなよ？ 作者との約束だ！！

遥「水月、ダメだよ！」

と幼馴染のであるCP将校「コマンドポスト」（通信役のことね）の涼宮遥すずみやはるかが注意した

義之「音姉は酒に淒く弱いんだよ！！ 前なんて匂いだけで酔っ払

って二日酔いになったのに！！」

由夢「そうですね！ 直接飲んだらどうなるか！！」

と言った瞬間だった

音姫「うふふふ、弟くん」

と不気味に笑いながら掴んでる手に力を入れた

義之「あー、音姉？ 俺の関節はそっちに曲がらな・・・！」

次の瞬間鈍い音がした

義之「がは！？」

義之の肘がありえない角度に曲がった瞬間だった

麻耶「義之ー！ー！？」

みちる「大佐！？ 速瀬！ お前が原因だ！ 音姫大佐を止める！

！」

みちるは原因である速瀬に鎮圧を命じた

水月「りよ、了解！！」

流石にヤバイと思ったのか速瀬も従ったが

水月「うそ！？ 音姫大佐ってこんなに速かったっけ！？」

うまく捕まえられず、次の瞬間

水月「しまった!？」

逆に音姫に捕まり

水月「ちょ!？ それ以上は曲がらな・・!」

また鈍い音が響き、速瀬も餌食になったのだった

みちる「速瀬!?!?!?!」

この騒動はこの後20分ほど続き、音姫が泥酔して眠ってしまったので終息したが、止まるまで被害が続出し、義之と水月含めて5人犠牲になった。

そして、音姫本人は

音姫「頭痛!?!?!」

と翌日二日酔いに悩まされて、義之たちが復活するまで1人で書類を始末するはめになったのだった。

この事件は後に『恐怖の歓迎会』と呼ばれて、現在所属している隊員が全員退役するまで口外無用と、上官である朝倉純一大統領に命じられたのであった。

おまけ2 黒歴史 恐怖の新人歓迎会(後書き)

今回も後書きコーナーは割愛します

邂逅（前書き）

今回は短いですよ

邂逅

俺、土見稟は桜と楓と共に居間に居た

稟「楓生きてたんだな……」

俺は涙を堪えながら聞いた

楓「はい、お久しぶりです稟くん」

俺は無事な楓の姿を確認して

稟「本当に……良かった……」

涙を堪えることが出来なくなり眼の端から涙の筋が滴り、俺は下を向きながら肩を震わした

稟「俺は……楓を……守れなかったと……約束したのに……」

俺の流した涙がマットを濡らして、そこだけ少し黒くなっていく

楓「大丈夫ですよ、私は生きてます、少し大怪我してしまいました
が」

そう言いながら楓は苦笑した

稟「怪我？」

楓「はい、左手の肘辺りから千切れちゃいました」

そう言つて楓は左手を俺に見せた

稟「じゃあ、その左手は？」

桜「神界の医療技術だつて」

稟「そうか……助けてくれた人は？」

楓「神族と人族のハーフの瑠璃^{るり}「マツリ先輩です」

稟「1回会つて挨拶するか……」

俺がそう思った時だつた

呼び鈴の電子音が鳴つた

稟「ん？ 誰か来たな」

桜「楓ちゃん、来たみたいだよ」

楓「はい、稟くん少し待つてくださいね？」

そう言っただけで楓は居間から退出した

楓「ようこそシアちゃん、ネリネちゃん王様方は来てないんですか？」

？「お父さんなら、後で来るっす」

？「はい、なんでもお仕事が溜まってるとか」

声からして女の子、2人か・・・いや”3人”だな

俺がそう思考していると居間の入り口から楓と桜そして神族と魔族の美少女が現れた

楓「稟くんこちらは・・・」

？「こんにちは、私はネリネと申します、よろしければリンとお呼びください」

そう言っただけで魔族の証の耳が異様に長い、背丈はおおよそ一般的だが胸が大きい女の子だった

？「あたしはリシアンサスと言います、長いので気軽にシアと呼んでほしいっす！」

そう自己紹介したのは身長は同じく一般的で魔族ほどではないが神族の証の耳が長い活発な印象の女の子だ

稟「初めましてかな？ 俺の名前は土見稟と言います」

楓「稟くん、それが初めましてではないんですよ」

稟「なに？」

ネリネ「はい、私達は実は」

シア「8年前に会ってるっす！」

稟「8年前？ 帝国でか・・・」

稟が思い出そうとした瞬間だった

シアとネリネが来た時と同じように呼び鈴の電子音が鳴った

稟「今度は誰だ？」

ネリネ「あ、恐らく」

シア「お父さん達だと思っす！」

と言ってシアとネリネは玄関に向かった

そしてドアが開く音が聞こえ

？「おーう、シア来たぜ？」

？「すまんね、少し遅くなってしまった」

渋い声と比較的若い声が聞こえた

シア「グツドタイミングっす！」

ネリネ「はい、居間に稟様が居ますから」

それを聞いた俺は思った、様をつけられるほど俺は偉くも強くも無いんだがな・・・

そうして

？「お？ おめえさんが稟殿か？」

？「ふむ、なるほど、いい眼をしているね」

と言いながら入ってきたのは2人の男性だった

1人は着流しを着たガタイのいい神族の男性で、もう1人は身長が高く、長い髪を1回細い紐で結んだ魔族の男性だった

稟「初めまして、自分の名前は土見稟と言います」

俺はソファから立ち上がりお辞儀をした。

魔王「おお、これはこれは、私の名前はフォーベシイ、ネリネちゃんのお父親であり魔王でもある、よろしくね」

え？

神王「俺の名前はユーストマだ、シアの父親で神王もやっている、よろしくな」

はい？

稟「え？ 魔王に神王・・・え〜〜〜〜！？」

マジかよ！？

稟「つて、ことはシアにネリネは神王さまと魔王さまの娘さんでしたか！！」

俺は思わず敬礼してしまった。

神王「あー、敬礼はするなよ？」

俺は言われてはっとして顔が赤くなった。

魔王「それと、私達に対してそんな硬くなる必要は無いよ」

神王「おうよ、俺たちは家族になるかもしれねえからな！」

稟「え！？ それってどういう意味ですか！？」
「なんだそれは！？」

魔王「おや？ まだ聞いてなかったのかい？ 稟ちゃんはね、ネリネちゃんと」

神王「うちのシアの」

両王「「婚約者なのさ（なんだよ）！！」」

稟「なんだって~~~~~！！」

因みにこの時の叫びは近所さんにも聞こえたとか・・・

横では楓と桜が頷いている・・・って！！

稟「なんで楓と桜が先に知ってるんだよ！？」

俺は聞かずに居られなかった。

楓「えーと、それはですね、私は神王さまの家でメイドをやったからで・・・」

桜「私は、学校で聞きました・・・」

2人とも苦笑いしながら教えてくれた・・・、俺は思わずorsの格好をしてしまった・・・

魔王「これからはうちのネリネちゃんと仲良くね」

神王「おい、抜け駆けは許さねーぞまー坊！ うちのシアともヨロシク頼むぜ稟殿！！」

と2人は俺の肩を叩いた。

そして、この後は俺は神王おじさんと魔王おじさん（せめて様はやめてくれと言われたのでこう呼ぶ）の奥さん達と挨拶を済ませ、そして・・・嫌だ思い出したくない・・・
え？ なにがあつたって？ 聞くな・・・
あれは悪夢としか言えない・・・

俺はその時早く終わってくれと祈り願うしかなかったんだよ・・・

HELP ME！

桜は普通（？）だったが、楓は凄まじかった・・・

邂逅（後書き）

後書きコーナーは割愛します。

後書きコーナーでキャラに言わせたいセリフを募集します！

言わせたいセリフ、言わせるキャラの名前、言わせるセリフの原作名を書いて応募してください。

お待ちしております！

戦いと救出と新たな仲間 前編（前書き）

戦闘描写難しいな・・・

戦いと救出と新たな仲間 前編

第3者 side

義之「さて、これからだが・・・」

と、義之が朝の何時ものミーティングを行おうとした瞬間だった。

広大な会議室に甲高いサイレンが鳴り響いた。

一夏「なんだ!?!」

第「何事だ!?!」

と、新人達が慌てていると

義之「落ち着け!?!」

会議室内に義之の怒声が響いた。

新人達はそれで多少冷静になれたのか先任達の様子を見た。

先任達は全員落ち着き払っている、そこには何時ものアットホームな雰囲気は一切無い。

すると

放送『デフコン 防衛基準1発令! 繰り返すデフコン 防衛基準1発令!』

デフコン 防衛基準1、それは・・・

稟「所属不明か、敵さんが領海に接近したのか!」

自国領土の危険を意味していた。

義之「麻耶!?!」

と、義之は副官の沢井麻耶さわいまやに顔に向けた。

麻耶「既にやっつてるわ! つ! これは・・・」

麻耶は携帯端末の画面を見て驚いている。

義之「メインモニターに情報回せ!」

麻耶「ええ!」

会議室の巨大なメインモニターに初音島の地図が表示され、海上に初音島を囲む様に線がひかれている。

それを一瞥した義之は壇上に登った。

義之「総員傾注!?!」

義之が大声を出してそう言うと、全員が義之を見る。

義之「現在ここ、初音島に接近してくる艦隊を複数確認した」

義之が言うとマップ上に未確認を表す黄色いマーカーは複数表示された。

義之「現在、未確認に向かい警備艦隊と即応MS部隊が出撃した模様」

義之が言うと、今度は味方を表す青いマーカーが初音島方面から黄色いマーカーに向かう表示出された。

義之「それに伴い我々も出撃する！ 全員3分以内に着替えてMS格納庫に集合！！」

全員「了解！！！！」

そこからの全員の行動は早かった、会議室を出てロッカーの向かい走った。

所変わって、ここはMS格納庫

虚「ほらほら、急いで！ ストライカーパックを取り付けたら次は

ベースジャバーの用意よ！！」

整備員全員「はい！！！！」

MS格納庫では全員が所狭しと走り回って作業している。

匡「副長！ アテナ隊の準備完了しました！」

と、布仏虚のほとけつほの上の通路にいた照屋匡てるやただしが大声で報告してきた。

虚「わかったわ！ じゃあ他のところの手伝いに回って！！」

匡「了解！ 聞いたな！？ 他の手伝いに向かうぞ！」

整備員「了解！ 班長！！！！」

匡の指示にアテナ隊の整備をしていた整備員の班員達は走っていく。ここはMSパイロット達とは別の意味での最前線だった。

自分達が失敗すれば死ぬのはパイロット達だ。

だから一切の失敗は許されない！！

全員同じ思いの中最速で作業している。

？「一体誰が領海に接近したのかしらね？」

と、虚の後ろに現れたのは眼鏡をかけた女性で髪は後頭部で扇状に纏められている。

虚「薰子、ウイザード隊の整備は終わったのね？」

薰子「ええ、これから他のところの手伝いに向かうから」

そう答えたのは名前をまゆずみかおるこ薰子と言い、虚の1年後輩にあたる整備員だ。

虚「恐らくもう少しで情報が・・・、来た！！」

と、虚は手に持っていた携帯端末を凝視する。

虚「うそ！？」

薰子「どうしたの？」

虚「来たのはJEU艦隊と、ユーラシア連合の大艦隊よ！」

薰子「なんですって！？」

虚は携帯端末の画面を薰子に見せた、画面にはJEUと書かれたマーカーと、ユーラシア連合と書かれたマーカーが表示されていたが薰子「JEUが6個なのは良いとして、ユーラシア連合はなによこれ！？ 10数個あるわよ！？」

虚「敗残兵を狩るのには過剰な戦力ね・・・」

そして、3分後

義之「よし、全員揃ったな！」

MS格納庫にはパイロットスーツを着た隊員達が全員集合していた。ハンガー義之「状況を説明する、現在接近している艦隊は2勢力だ、まず片方はJEU艦隊だ」

それを聞いた新人達の数人には緊張が走った。

義之「そして、もう片方はユーラシア連合艦隊と判明している、尚先ほどJEU艦隊から救援要請が入り政府はこれを人道的立場から受諾し支援及び援護を決定した」

みちる「受け入れはするんですか？」

義之「恐らくな、初音島は中立国だ、亡命すると言う風ならば受け入れるだろう」

みちる「了解」

義之「他には質問は無いな？」

義之はそう言いながら全員顔を見回した。

誰も手を挙げるのを確認すると、義之はうなずき

義之「全員搭乗せよ！！」

全員「了解！！！！」

そして、全員搭乗した

麻耶「カタパルト正常、進路オールクリアー！ ストライク発進どろぞー！！」

義之「桜内義之、ストライク出撃ぞー！」

義之のストライクが発進すると、後から次々と機体とベースジャバーが発進する。

義之「全機の出撃を確認した！ これより友軍及びJEU艦隊の援護に向かう！」

全員「了解！！！！」

ストライクのサブモニターに全員の顔が映り一斉に返答してくる。

義之「全機フォーメーションはストライクを先頭に傘壱型陣形！」

最大戦速！ 続けー！！

全員「了解！！！！」

そうしてワルキューレ隊は戦域に向かうのだった。

第3者 side END

あきら side

僕、伊隅あきらは先ほど命令が下りJEU艦隊とMS部隊を援護するために海上に出撃した。

が
？『クラツカー1よりHQ！ 応援はまだか！？ このままじゃ保ち堪えられない！ 早くしてくれ！』

僕の所属するクラツカー小隊は圧倒的な数のユーラシア連合軍MS部隊に囲まれていた。

今通信で応援要請したのは隊長の高倉隆久中尉だ。

HQ『HQよりクラツカー1現在そちらにワルキューレ隊が向かっている、戦域到着まで後約200秒』

ワルキューレ！？

隆久『ワルキューレ！？ 守護神率いる部隊か！ 助かる！！ 全部隊聞いたな！ 特務隊が到着するまでなんとしても保ち堪える！』

？『ちくしょー！ 簡単に言ってくれるぜ！ だったらもつと航空支援と支援砲撃を寄せさせてんだよ！！』

そう悪態を吐いたのは、同じく出撃していたもう1つの即応MS部隊の隊長機だ。

確か、坂倉幹彦中尉だったかな？

？『ぐあ！？』

隆久『02！？』

2番機の高尾冬彦少尉のアストレイ2型の左肩装甲が吹っ飛んでる。冬彦『構うな！ 俺は大丈夫だ！』

そう言つと、冬彦少尉は体勢を立て直して攻撃を再開した。

隆久『04回りこまれるぞ！ 03カバーしろ！！』

あきら『了解！』

僕は命令通り4番機、終秋子ちゃんのカバーに向かうが

秋子『うおおおお！』

秋子ちゃんはデタラメにビームライフルを撃ち続けている。

あきら『あぶない！』

秋子ちゃんを、秋子ちゃんの左側、僕にとって正面からダガーIが

ステイレットで狙ってる！！

撃ちたいけど、撃つたら秋子ちゃんの機体に当たる！

秋子『ぐは！？』

あきら「やめるー！ー！」

僕と秋子ちゃんの声が重なった。

ステイレットは秋子ちゃんの機体に直撃して、左腕を肩ごと吹き飛ばした。

秋子『くそ！ 調子に乗りやがって！ っ！？ 動かない？ 動かない！？』

秋子ちゃんの機体が動かない！？

冬彦『どうした！？』

秋子『駆動系が！ 駆動系がイカれました！』

冬彦『バカやろう！ 早く緊急脱出しろ！』

緊急脱出はコクピットハッチが爆圧で吹き飛んでシートごと脱出するシステムだ。

秋子『ひっ！ ひい！』

あきら「早く急いで！」

僕達は秋子ちゃんの機体の周囲に集まって防御陣形を形成したけど秋子『ハッチが歪んで脱出できません！！』

そんな！？

冬彦『うおおお！ がああ！？』

隣に居た冬彦さんの機体の腰部を敵の放ったビームが貫通して、数瞬後爆散した。

あきら「02！？」

僕が冬彦さんの戦死に気をとられて攻撃が疎かになった瞬間。

秋子『た、助け！ ひい！』

守っていた秋子ちゃんの機体にミサイルが直撃して爆散した。

あきら「秋子ちゃん！？」

僕は友人の死に動揺してしまった。

隆久『この野郎！！』

隊長は右手にビームサーベルを保持、抜刀して切り込んだ。正面に居た敵機を袈裟切りにし、更に左手で保持していたビームライフルで後ろに居た敵機を撃ち抜いた。

が、次の瞬間だった。

隆久『があああ!?!』

隆久中尉の機体の胸部をビームが貫通して、数瞬後スパークを起こして爆散した。

あきら「た、隊長!?!」

気付くと周囲は敵機だらけで、味方の援護は期待できない。

その瞬間、僕の頭の中は恐怖で真っ白になってなにも考えられなくなり

あきら「あう、うああああ! あああ!?!」

手に保持していたビームライフルをデタラメに撃ち続けていて。

そして、コクピット内に響いた警告音で正気に戻って右を見ると、

そこには僕にむけてビームサーベルを振りかぶっている敵機が居て。

あきら「ひっ!?!」

僕はこの時死ぬんだと思った、そのときは長く感じた、けれど敵機のビームサーベルがもう少しで当たると思った瞬間だった。

あきら「え?」

ビームサーベルを持っていた敵機の腕が、横から飛来してきたビームにより吹き飛んで、さらにその直後には敵機の頭部に実弾が当たり、胸部にはビームが直撃して爆散した映像が映っていました。

そしてさらに周囲に居た敵機に次々にビームや実弾が直撃して、凄いい勢いで敵機が減っていきました。

義之『オーディー1からワルキューレ隊各機! 襲う事、奪うことしか知らぬユーラシア連合の野獣共に護る者達の強さを教えてやれえええ!?!』

全員『了解!?!?!?!?!』

その声が聞こえて僕はその時初めて友軍が来たと分かりました。

そうして後ろ、初音島のほうを見ると

先頭に赤青白にトリコロールのガンダム率いる60機余りの友軍MS部隊が見えました。

あきら「あ？ え？」

そうして、僕の前を過ぎていくアストレイタイプの新型機達。

そして、呆然としていた僕の近くにトリコロールのガンダム、ストライクガンダムが来て

義之『君、無事だな？』

あきら「と、特務部隊？」

僕は呆気にとられていた

義之『もう1回聞く、無事だな？ 生きてるな？』

あきら「は、はい！」

僕はようやく質問に気付いて返答した。

義之『よし、では一旦下がれ』

あきら「で、ですがここは」

僕はこの場を任された責任を果たしたかった。

と、その時僕の機体の右側に赤い直線的なシルエットのガンダム、イージスガンダムが近づいて

みちる『ここは、我々特務隊が引き受ける！』

その声を聴いて僕は驚きました、だってこの声は！

あきら「み、みちるちゃん！？」

僕のお姉ちゃんのみちるちゃんだったからです。

みちる『その声は、あきら！？』

あきら「やつぱり、みちるちゃん！」

義之『オーデイン2ということだ？』

みちる『は！ この者は自分の妹の伊隅あきらです』

義之『ちっ！ 身内が居るとは予想外だったな、少し待ってる』

そう聞こえて今までくサウンドオンリー>と表示されていた画面が消えました。

みちる『まさか、あきらがここに居るとはな』

あきら「僕もだよ！ まさか特務隊だったなんて！」

僕とみちるちゃんがお互いの素直な気持ちで話し合ってたら

義之『待たせた!』

また画面が表示されて

みちる『大佐、どうでした?』

義之『うむ、あきら少尉、秘匿回線Bを開け』

あきら『りよ、了解!』

僕は言われた通りに秘匿回線Bを開くと

先ほどまでくサウンドオンリーで表示されていた画面に顔が映りました。

義之『顔は見えてるな?』

あきら『はい!』

若い男性だ、まさかこの人が?

義之『では、改めて自己紹介しよう、俺は初音島統合防衛軍特務隊
ウルキユール隊隊長の桜内義之大佐だ、よろしく』

やっぱり! この人が守護神! 初音島の英雄!!

あきら『自分は第1即応MS師団第8小隊所属の伊隅あきら少尉です!』

僕は緊張しながらも自己紹介をした。

義之『うむ、では伊隅あきら少尉!』

あきら『はい!』

義之『君を今から我々ウルキユール隊に所属を変更! 尚今回は臨時コールサインとして以降クラッカー3からオーティーン6のコールサインを使え!』

あきら『え!?』

義之『要するに、ウルキユール隊にようこそってことだよ、あきら少尉』

あきら『りよ、了解!』

みちる『よろしいのですか? 大佐』

義之『仕方なからう、情報の漏洩を防ぐためだよ』

やっぱり、特務隊だから機密のランクが高いんだ

義之『あきら少尉、機体の状況は？』

僕はその声を聴いて急いで機体の状態を確認すると

あきら「機体に異常なしです、ただビームライフルがオーバーヒート1歩手前です」

先ほど乱射したのが原因でビームライフルの銃身が真っ赤で使えない義之『では、これを使い』

大佐はそう言うのと今まで持っていたライフルを僕に渡してきたあきら「そうしたら大佐は？」

義之『大丈夫だ、まだもう1丁ある』

僕はストライクの腰を見ました、確かにそこには予備が懸架されていました。

僕は今まで使っていたライフルをバツクパツクのラックにかけると、大佐から受け取り、それを火器管制が認識したのを確認すると

義之『よしでは』

と、大佐の声が聞こえると

凄じ勢いで色々な設定が変わっていく

あきら「こ、これは！？」

みちる『慌てるな、今お前の認識番号を書き換えてるところだ』なるほど

義之『認識番号変更完了と、では秘匿回線を閉じる』

あきら「了解！」

僕は言われた通り、秘匿回線を閉じました。すると

義之『オーデイーン1からワルキューレ隊各機に通達する！ 今より臨時編入で元即応MS部隊所属の伊隅あきら少尉が編入された、それに伴い、臨時としてコールサインは正式に決まるまで、オーデイーン6とする！』

桜内大佐がそう言うのと、モニターに次々と顔が映り

全員『『『『了解！』』』』

ワルキューレ隊の人達の顔が映りました。

あきら「皆さん、よろしくお願いします！」

僕が挨拶すると

義之『では、我々はこれからJEU艦隊の支援及び援護に向かう！』

全員「『はい！』」

義之『フォーメーションはストライクを中心にウイングダブルファイブ複鶴翼伍陣！ 防衛

線を押し上げる！』

全員「『了解！』」

義之『俺に続けえええ！』

ストライクが先頭に出て突撃すると、他の機体は一斉に指示された、ウイングダブルファイブ複鶴翼伍陣にすばやく陣形を整えてストライクに続いていく。

そうして、少し遠くで戦っているJEU艦隊とJEUのMS部隊の援護に向かいました。

戦いと救出と新たな仲間 前編（後書き）

後書きコーナーは割愛します。

戦いと救出と新たな仲間 後編（前書き）

戦闘描写マジで難しい・・・

後文中でたかむらの字が出てないのは漢字が出なかったからです。誰かたかむら（単字）を出す方法教えてください。

戦いと救出と新たな仲間 後編

? side

? 「このおおお!」

俺、テオドル・エーベルバッハは愛機、ジン・トーナードADVアドヴァンストの右手の80mm重突撃機銃を敵機にむけて3連射した。

弾丸は面白いくらいに敵機のコクピットに直撃して、黒煙を噴き上げて墜落し数秒後爆散した。

テオドル「いい加減にしつこいんだよ!」

俺は悪態を吐きながら機体の状況を確認した。

機体 損傷無し

残弾数 右手重突撃機銃 装填マガジン15発 予備マガジン45発

左手 M-68キャットウズ 500mm無反動砲 残弾1 弾種

キャニスター
拡散弾

腰部折りたたみ式ハルバート

推進剤残量 約70%

バッテリー残量65%

となっている。

テオドル「くそっ! 初音島まであと少しなのに!」

俺は再び悪態を吐きながら重突撃機銃の連射をフルオートからトリプルバリスト射に変更した。

? 「テオドルさん!」

? 「兄さん!」

そこに、ジン・トーナードADVとティン・ラファールが近づいてきた。

テオドル「カティア、リーズ無事か!」

俺は同部隊の後輩であるカティア・ヴァルトハイムと義妹のリーズ・ホーエンシュタインの機体を見ながら聞いた。

リーズ「なんとか無事ですけど、弾薬が残り少ないです」

カティア『私もです』

？『カティアちゃんにリーズちゃん、ついでにテオドールは無事？！』

さりげなく悪口を言いながら近づいてきたのは同部隊の後輩で名前は、アネット・ホーゼンフェルトだつて！！

テオドール「てめえ！ なにかついでだコラ！！」

俺は” ついで ” とホザいたアネットにキレた。

アネット『なによ！ なんか文句でもあるの！？』

テオドール「大有りだ！ このー」

その瞬間コクピット内に警告音が鳴り響いた！

テオドール「全機、乱数回避ランダムかいひ！！」

俺の指示に従い俺の近くに寄ってきた3機は散開した。

先ほどまで俺達がいた場所を極太の閃光が突き抜けた。

テオドール「戦艦のビーム砲か！」

俺は冷静に判断して、その直後に左手のキャットウスを後ろに撃つた。

俺の後ろには敵機が居て、俺の撃つた無反動砲の弾を回避しようとしたが、当たる直前に弾が花卉の様に開き、中から小さい弾が大漁に出てきて敵機を蜂の巣にした。

敵機が爆散したのを確認する暇も無く俺は左手に保持していた無反動砲を投棄した。

テオドール「くそ！」

俺は左手で腰部にマウントしていた折りたたみ式ハルバートを保持した。

その直後だった。

カティア『テオドールさん、逃げてーーーー！！』

テオドール「なに！？」

気がつく俺は囲まれていた。

リーズ『お兄ちゃん！？』

テオドール「しまっ!?!」

しかも、囲んでる敵機のうち1機がビームライフルを俺に向けている、愛機は今体勢を立て直している途中で回避できない!!!

カティアとリイズは遠い場所に居て援護は期待できない。

アネット「テオドール!?!」

珍しい、アネットが驚きながら俺の名前を呼んでやがる。

俺は死の間際にそんな事を考えながら目の前のビームライフルを構えてる敵機を見た。

しかし、次の瞬間

テオドール「なに!?!」

横から飛来してきたビームが敵機のライフルに当たり、敵機はビームライフルを捨てて楯を構えながら退かった。

義之「こちらは、初音島統合防衛軍だ! これより貴官らを援護する!?!」

俺はその声を聴くとビームが飛来してきた方向を見た。

そこに見えたのは、

カティア「あれは!?!」

リイズ「初音島の守護神!?!」

アネット「ストライク・・・!?!」

60機余りのMS部隊の先頭に居たのは伝説のMS<初音島の守護神>ことストライクだった。

テオドール「ストライク・・・!?!」

俺は映像でしか見たことの無いMSを見て驚いた。

テオドールsideEND

第3者side

義之「よし! 間に合った!?!」

義之はJEU所属のMSが無事なのを確認すると安堵した、が義之「ヤバイ！ 囲まれてやがる！！ ウルド3撃てるか？」

ウルド3こと妹分の朝倉由夢あすかに聞いた

由夢『撃てます！』

由夢はそう返事をするとうハイブリット・スナイパーライフルを構えた。

ハイブリット・スナイパーライフルとは実弾とビームを交互に撃ちだせるライフルでマガジン式になっており、上にビーム用のエネルギーパック（通常のビームライフルと兼用）が装着されており、下には実弾のマガジンが装弾されている、スナイパーライフルで、片方が弾切れになったらもう片方を撃ちながらマガジンを交換することが可能なのだ。

由夢『撃ちます！！』

由夢は言った瞬間には撃っていて、ビームは見事に敵機、ウィンダムのビームライフルに当たっていた。

義之「お見事！！ 全機フォーメーションアローヘッド楔式陣形で突撃！ 続けー！！！」

全員『了解！！！！』

この1連の動きを見てあきらは驚いた。

あきら（特務部隊だけあって練度が高い！ 一番驚きなのが、あの新人達だ）

この戦域に突入するまでの間にあきらは全員と軽く自己紹介を終わらせていた。

稟達はあきらの1期（年）後輩にあたるが

あきら（新人達の練度もかなり高い！ うかうかしてたら追い抜かれる！）

新人達は配属してから約1週間の間は本人達にとっては地獄のような特訓をしてきたのだ。

あきら（僕も負けられない！）

義之「こちらは、初音島統合防衛軍だ！、これより貴官らを援護す

る！！」

義之の号令と共に全機が砲撃を開始する。

敵機は回避したり直撃を受けて黒煙を吹き上げながら墜落していく。
？『こちらはJEUドイツ軍テュフォン艦隊所属第666MS中
隊<シュヴァルツェス・マーケン>隊長アイリスディーナ・ベル
ンハルト少佐！ 援護感謝する！』

機体のサブモニターに金色の髪に青い目が印象的な綺麗な女性が映
る。

義之「音声のみで失礼する、こちらは初音島統合防衛軍特務部隊
長の桜内義之大佐だ、貴官らは一時帰艦して、あの戦艦の誘導に従
ってほしい」

義之が指差した方向には白亜の巨艦がこちらに向かっていた。

アイリスディーナ『あれは！』

テオドル『不沈艦、アークエンジェル！！』

不沈艦とは、前タイタン戦争時にアークエンジェルについた二つ名
で、激戦と言われた初音島攻防戦でも決して沈まず最後まで戦い、
勝利に導いたと言われている戦艦で今やストライクと同じくらい伝
説級の扱いなのである。

音姫『これより支援砲撃を開始します！ ゴットフリート、バリア
ント両舷起動！ イーゲルシュテルンは全門自動照準で起動！ コ
リントス撃ええ！』

アークエンジェルから計16本のミサイルが敵機や敵艦隊に向かう。
敵機は回避して、敵艦隊は大型ミサイルや対空砲撃で迎撃しながら
回避していく。

義之「全機、アローヘッドツィ楔式型陣形で突撃！ 俺に続けー！！」
全員『『『『了解！』』』』

ワルキューレ隊は全機義之に続いて突撃していく。
アイリスディーナ『シュヴァルツ1よりシュヴァルツ全機、全機一
時帰艦する！』

シュヴァルツ全員『『『了解！』』』』

シュヴァルツ隊はアイリスディーナの指示に従い、ザンジバル級後期型戦艦ケラウノスに帰艦した。

第3者 side END

? side

? 「閣下! これ以上は危険です!」

私、たかむら唯衣は山吹色に塗装された愛機、龍閃に搭乗して戦っていた。

? 「そうです、後は我々に任せて富士にお戻りください!」

そう言ったのは私と同じ龍閃だが赤に塗装されている龍閃に乗っている男で、耳が見えるくらいで切りそろえられた黒髪に勝気な赤い瞳が印象的なパイロットの名前は、真壁清十郎まかべせいじゅうろうと言う、通称ウルフブレイズ<焰狼>隊の隊長だ、私は白き牙隊ホワイトファンゲの隊長を務めている。

? 「ならぬ、導く者は常に先頭に立って戦うものだ!」

そう言ったのが閣下こと、斑鳩龍峰征夷大將軍いかるがりゅうほうだ。

機体は紫に塗装された龍閃に搭乗しておられる。

? 「アルゴス1よりホワイトファンゲ1! これ以上は保たないぞ!」

サブモニターに映ったのは耳が見えるくらいで切りそろえられた黒い髪に金色の眼が特徴の日系アメリカ人のユウヤ・ブリッジス少尉だ。

唯依「ホワイトファンゲ1よりアルゴス1、あと少しだなんとしても保ち堪える!」

ユウヤ「簡単に言ってくれませ! 初音島の連中はなにしてんだよ!」

ユウヤ・ブリッジスが乗っているのは本来試験評価機体の烈空式れつくうしきだ、帝国の主力機隊だった烈空よりも全体的に性能が4割増しにな

つている機体で本来は今年の7月に正式に生産されるはずだったが、そのまえにユーラシア連合に祖国を落とされたために正式採用は出来なかった。

清十郎『ぐあ!?!』

清十郎の機体の右肩装甲がビームの直撃で弾け飛んだ。

? 『清十郎!』

そう言つてバランスを崩した龍閃を助けたのは

清十郎『すまぬ、助かったイルフリーデ中尉』

以前清十郎がドイツに研修に行つていた間世話になつた(らしい、本人は昔語りの時は少し苦い表情をしていた)本名イルフリーデ・フォイルナー中尉で腰まで伸ばした金色の髪を後頭部で赤いリボンで纏めた女性で、機体はジン・トナーDADVに搭乗しており、支援砲撃が得意なのか機体の腕にはMK-71 120mm長距離突撃支援砲を保持している。

所属はJEUドイツ軍第44MS大隊<ツェルベルス>大隊に所属している。

? 『まったくいきなり隊列を崩すな、連携がしにくくなる』

? 『そうですね、イルフリーデ?』

さらに両手にハルバートと重突撃機銃を装備したジン・トナーDADVとデイン・ラファールが近づいてきた。

イルフリーデ『ごめんね、ヘルガにルナ』

その2人の名前はジンに搭乗しているのがヘルガローゼ・ファルケンマイヤー中尉でデインに搭乗しているのがルナテレジア・ヴィッツレーベン中尉だ。

ヘルガローゼ中尉は肩より少し長い位まで伸ばした青い髪を後頭部で纏めているのと、紫色の眼が特徴の女性で接近戦を得意としており、ルナテレジア中尉は肩より少し短いくらいで切つてある緑色の髪に金色の眼が特徴で高速機動砲撃戦闘が得意で左手に重突撃機銃を右手に対空散弾砲を装備している。

唯依「しかし、あと少して初音島に着くのに!」

私が歯噛みしている。

清十郎「ホワイトフアング1後ろだ!!」

唯依「しまった!」

私は後ろから私を狙っている敵機に気付けなかった。

私は慌てて敵機をロックオンしようとしたが敵機のほうが早い!

ユウヤ「唯依!!」

唯依「くっ!」

その瞬間だった、敵機の胸部にビームが直撃して爆散した。

唯依「なに!?!」

龍峰「一体誰が?」

私はビームが来た方向を確認すると

ルナテレジア「あれは!」

ヘルガローゼ「ストライク!!」

そこにはあの伝説の守護神ストライクの姿があった。

義之「こちらは初音島統合防衛軍! 貴官らを援護する!」

龍峰「そなたらの助力感謝する!」

義之「音声のみで失礼します! ここは我々特務部隊が引き受けますから貴官らは帰艦してアークエンジェルの指示に従ってください!」

ストライクの指示した方向にはアークエンジェルが居て、既にJEU軍で残っているのは我々日本帝国の部隊と我々と共に展開していた第44MS大隊のみだった。

と次の瞬間だった。

義之「あれは!?!」

ストライクが敵艦隊のほうを見て驚いている。

私も確認して驚いた、それは

龍峰「撤退信号弾だと?」

敵艦隊の上に赤青黄色の3色の信号弾が上がっており意味は”全軍直ちに撤退せよ”だった。

義之「オーデイン1よりワルキューレ隊各機、深追いはするな!

今はJEU軍の誘導が最優先だ！」

ワルキューレ全員『『『『了解！』『』『』』』』』

義之『では、これより貴官らを誘導しますので、着いてきてくださ
い』

龍峰『承知した、我々は帰艦する』

私は閣下の指示に従い富士級空母1番艦富士に着艦した、その後に
は近くに展開していたMS部隊が続々と着艦した。

唯依 side END

第3者 side

こうして<JEU軍保護戦闘>は無事に終息した、後に芳野さくら
がJEU軍の受け入れをロシア連合に表明、さらに攻撃した理
由は領海に入り尚且つこちらに攻撃したため正当防衛と説明したの
だった。

戦いと救出と新たな仲間 後編（後書き）

今回も後書きコーナーは割愛します。

新たな出会いと再会（前書き）

今回はちょっと特殊な場面です

新たな出会いと再会

第3者 side

あれから3日経った。

義之「今日はどういった用件ですか、純一さん」

義之は副官兼恋人の沢井麻耶と共に、朝倉純一のところに来ていた。

純一「うむ、今日はな先日助けたJEUの人達がお前に会いたいと言ってきていな」

麻耶「JEU艦隊の人達がですか？」

純一「うむ、助けられた感謝を述べたいと」

義之「気にしなくて良かったんですけどね・・・」

義之は少し照れくさそうにしなから鼻をかいた。

純一「お前ならそう言うと思つて一回断つたが、どうしてもとな」

義之「そうですね・・・、麻耶、今日の予定は大丈夫か？」

麻耶「少し待つてね、・・・大丈夫よ」

麻耶は手元の携帯端末で確認した。

義之「わかった、では純一さん会談場所は？」

純一「ふむ、それならば付いて来い」

と、純一は立ち上がると

純一「やよい、今から桜内大佐を会談場所に連れて行くから、後を頼む」

と、入り口の机に座っていた伊隅いすみやよいに声をかけた。

やよい「わかりました」

伊隅やよいは緑色の少しウェーブが入った髪を三つ編みにしておりそれを腰まで伸ばしており、目は金色で何時も微笑みを絶やさない年上の女性で義之のMS隊副官の伊隅みちるの姉に当たる人物だ。

やよい「後はお任せください」

やよいは綺麗にお辞儀して義之たちを見送った。

義之たちはエレベーターに乗ってしばらく歩いた。

そこは純一の執務室の部屋のある階から上に行き廊下の一番端の大きな会議室だった。

純一「JEUの方々、桜内大佐をお連れしましたよ」

純一は声をかけると同時にドアを開けた。

そこには男女合わせて約10名程居た。

純一「皆さん彼が特務部隊の隊長の桜内義之大佐です」

？「若いな」

そう言ったのは白髪で鷲頭、額の右側から顎先にかけて切り裂き傷がある男性だった。

？「そうだな」

それに賛同したのは浅黒い肌に銀色の髪そして金色の眼が特徴の士官服を着た男性だ。

義之「自分は初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊長の桜内義之大佐であります！」

義之が敬礼すると

麻耶「同じく副官の沢井麻耶少佐であります！」

麻耶もそれに倣い敬礼した。

すると、全員立ち上がり。

？「私は日本帝国征夷大將軍の斑鳩龍峰だ」

と痩身で目元がきりつとしている男性が挨拶すると

唯依「同じく日本帝国近衛軍所属たかむら唯依大尉です」

腰まで伸びた黒髪に同じくきりつとした目が特徴で容姿端麗な若い女性が立ち上がり。

清十郎「同じく近衛所属の真壁清十郎少佐です」

耳が見えるくらいで切りそろえられた黒髪に赤い目が特徴の若い男性が立った。

？「私は帝国陸軍技術廠代表の巖谷榮二准将だ」

次に立ったのは額の左側から大きな裂傷が瞼の上を走り顎先まで続いており、髪は白髪混じりの黒髪でオールバックに纏めており、体格はがっしりしている男性で、雰囲気から歴戦の猛者とわかる。

義之「よろしく、おねがいます」

義之が頭を下げると日本帝国の人達は全員お辞儀した。

？「私はEU代表を務めます、コーディネリア・ギ・ランドグリーズと申します」

そう言いながら微笑んでいるのは、ショートカットの黒髪に青い目の女性だった。

？「自分はEU軍テュフォン艦隊旗艦テュフォン艦長のゲオルグ・フリードリヒ大佐だ」

驚頭で額の右側から顎先まで切り傷がある男性が名乗った。

義之は名前を聞いて反応した。

義之「フリードリヒ？・・・失礼ですが、もしや娘さんにライラという子が居ませんか？」

ゲオルグ「ライラは私の娘だ、知っているのか？」

義之「やはりそうでしたか、ライラ嬢でしたら現在我が隊に所属しております」

ゲオルグ「なんと！」

義之「大総統閣下、よろしければ呼んでも宜しいですか？」

純「構わん」

義之「わかりました、沢井少佐頼む」

麻耶「ええ」

麻耶は携帯端末を取り出すと操作して

麻耶「伊隅中佐ですか？ すいませんがライラ少尉は？」

みちる「ライラ少尉だったら、今はMS格納庫ハンガーだが、どうした？」

麻耶「ライラ少尉のお父上が居るんです、すいませんが呼び出してもらえませんか？」

みちる『わかった、少し待て』

それを聞いたゲオルグ艦長は

ゲオルグ「会えるのか？」

義之「はい、少々お待ちください」
すると

ライラ「お待ちせしました、ライラ・フリードリヒ少尉です！」

携帯端末の画面にライラの顔が映った。

麻耶「あ、ライラ少尉？ 今は大丈夫？」

ライラ「はい、大丈夫です、どうしました？」

麻耶「実は今あなたのお父上がいらっしゃってるの」

ライラ「え！？ 父がですか?!」

麻耶「ええ、ちょっと悪いけどこっちに来れるかしら？」

ライラ「はい、無人電動車を使わせてもらえるならば、すぐにいきます！」

麻耶は義之を見ると義之は無言でうなずいた。

麻耶「許可します、虚技術大尉を呼んで？」

ライラ「わかりました！ 少々お待ちください！」

画面からライラの顔が消えると

ゲオルグ「無事でよかった・・・」

ゲオルグは俯いて肩を震わせながら喜んだ。

虚「お待たせしました、用件はなんですか？」

少ししたら画面に布のほとけつつほ虚技術大尉の顔が映った。

麻耶「すいませんが、ライラ少尉のために車を用意してくれませんか？」

虚「構いませんが、どうしました？」

虚はたった1人の少尉のために車を用意することを、少し疑問に思ったようだ。

麻耶「ライラ少尉のお父上がいらっしゃってるの、お会いさせたい
と思っ」

虚「なるほど、わかりました。場所は軍本部でよろしいですね？」

麻耶「ええ、お願いします」

虚『わかりました、通信を切ります』

そうして、通信は終わった。

麻耶「恐らく、15分ほどで来ると思います」

ゲオルグ「ありがとう」

ゲオルグは素直に感謝した。

それを横にいた銀髪に浅黒い肌金色の眼をした男性が肩を優しく叩いて祝福して

？「私はJEUドイツ軍テュフォーン艦隊所属第44MS大隊隊長のヴィルフリート・アイヒベルガー大佐だ」

そう名乗った。

ヴィルフリート「先日は助かった」

素晴らしい頭を下げた

義之「気にしないでください、失礼ですが、もしやあなたはドイツの七英雄ですか？」

七英雄とは、前タイタン戦争時に首都ベルリン防衛戦の時に活躍した7人のパイロットにつけられた名前で、それぞれが色でに因んだ二つ名を付けられている。

ヴィルフリート「ああ、一応黒き狼王と呼ばれている」

義之「やはりそうでしたか、お会いできて光栄です」

ヴィルフリート「こちらもだ、まさかこんなに若いとは思わなかったがね」

2人はお互い握手しながら話した。

？「私は同隊所属のジークリンデ・ファールホルスト少佐です」

ヴィルフリートの隣に座っていた白髪を三つ編みにした眼が青い女性義之に挨拶した

義之はその名前を聞くと

義之「あなたも七英雄ですね？ たしか白き后狼でしたか？」

ジークリンデ「ええ、その通りです」

そう言いながらまた握手した。

そして、最後に

？「私はテュフォーオン艦隊ケラウノス所属第666MS中隊隊長のアイリスディーナ・ベルンハルト少佐だ」

腰まで伸ばしたストレートの金髪に深い蒼い眼をしたスタイルが抜群の女性が名乗った。

アイリスディーナ「先日は私の部下が助けられたようだ、感謝する」
そう言つて頭を下げた。

義之「いえ、自分は当然のことをしたままです」

そして全員を代表したのか

龍峰「我々はあなたに助けられたその恩を示したい」

義之「いえ、気にしないでください」

龍峰「しかし」

義之「我々は、あなた達が領海に来るまでに散つていった英霊達が作ってくれた細い道を広げたと過ぎません」

その言葉を聞いて散つていった仲間達を思つたのか各々口をつぐんだ。

義之「もし、感謝したいのならばむしろ散つていった英霊達にしてください、そしてその方法は散つていった英霊達を誇らしく語り継いでやってください、それが英霊達にとつての一番の供養です」

龍峰「誇らしく・・・」

唯依「語り継ぐ・・・」

義之「ええ、私達軍人は遺体がマトモに残る事すら稀な職業です、そして軍人にとつて不名誉なのは忘れられることです」

清十郎「忘れられること・・・」

義之「ええ、今我々がここに集いそして話し合つてるのは英霊たちの献身があつたからなのです、我々ワルキューレはそうして散つていった先代達を語り継いでます」

義之がそう締めくくると同時にノック音が響いた。

純「どうした？」

案内係「ライラ・フリードリヒ少尉をお連れしました」

純「入れ」

ライラ「失礼します！ 初音島統合防衛軍特務部隊ワルキューレ隊
所属ライラ・フリードリヒ少尉入ります！」

ライラは入ってから名乗り敬礼した。

ゲオルグ「ライラ！」

ゲオルグは思わずソファから立ち上がった。

ライラ「お父さん！」

ライラは走りよって抱きついた。

今ここに約3ヶ月ぶりに感動の再会を果たしたのだった。

新たな出会いと再会（後書き）

ようやくここまでできたな、長かった。

さて久しぶりに後書きコーナー始まり

作者「どうもお久しぶりです作者の京勇樹けいゆうきです」

雪音「お久しぶりね、アシスタントの田原雪音たはらゆきねよ」

作者「間が空いてすいませんでした」

雪音「まあちよつと都合があつてね許してくださいね？」

作者「さて、ではゲストさんどうぞ！」

駆「久しぶりに呼ばれました、皐月さつき駆です」

雪音「久しぶりの登場ね」

作者「では、これをお願いします」

駆に紙を渡す作者

駆「これを言えはいんだな？」

作者「うい、お願いします」

駆「わかった」

では、スタート！

駆「人は誰しも悲しい過去を越えて現在いまをいま生きているんだ！
過去から逃げて現在いまを捨てたあんたに未来あしたは来ない！！」

はい、終了！

作者「お疲れ」

雪音「どうだった？」

駆「心に響いたな・・・、俺にとっても他人事じゃないからな」

作者「世の中には理不尽なことが多すぎるよな」

雪音「愛する人を失った人や、家族を失ってしまった人なんかね・・・

」

駆「俺は姉さんを失ってしまったから、少し自堕落になってたな・・・

」

作者「でも、今は大丈夫だろ？」

駆「ああ、ちゃんと乗り越えたからな」

雪音「時々乗り越えられなくて犯罪に走ったり自殺する人が居る

のが悲しいわね・・・」

作者「さてと、しんみりしてしまったので、今回はここまで！」

全員「」「また、次回までさよーならー！！」「」

無垢な少女との出会い（前書き）

あの子の登場ですよ

無垢な少女との出会い

稟 side

今日、俺は軍で初めての休暇だった、軍では月に1日休暇が与えられてる。

俺は今日、土曜日だったってわけだ、以前のJEU艦隊救出戦から4日経ってる。

俺は、幼馴染の八重桜やえさくらと芙蓉楓ふよつかえで、そして俺の3人で出かけていた。

桜「いい天気ですね」

楓「はい、絶好のお出かけ日和です」

俺の両隣では2人がご機嫌に歩いている。

稟「しかし、よかつたのか？」

桜「なにがですか、稟くん？」

俺の質問に桜が疑問顔で聞いてきた。

稟「いや、2人にもそれなりに予定があつたはずだろ？」

楓「大丈夫ですよ」

桜「久しぶりに稟くんと一緒にいたいからね」

嬉しいこと言ってくれるね

俺達は家から出て、歩き近くの木漏れ日通りに向かった。

そして、木漏れ日通りに着いて歩いてみると。

稟「ん？」

俺は少し気になる人を見つけた。

桜「どうしたの稟くん」

稟「いや、あそこ・・・」

俺はとある一角を指差した。

そこには・・・

楓「女の子ですね……」

そこにはポロボロの猫の人形を抱いた神秘的な雰囲気の子を見た。

その女の子はゲームセンターのUFOキャッチャーの中をジッと見ていた。

？「……………」

凜「……………」

俺はどうしてもその子が気になってしまった。

桜「どうするの凜くん？」

凜「うーん、声かけてみるか……」

俺は、左手で頭をかきながら女の子に近づいた。

凜「きみどうしたの？」

？「……………」

女の子は数瞬俺を見ると、またUFOキャッチャーに視線を戻した。

凜「？」

俺はUFOキャッチャーの中を見た。

凜「猫……」

それは猫のぬいぐるみだった。

凜（なんか思い出があるのかな……）

俺はそう思い

凜「これが欲しいの？」

俺は視線の高さを女の子に合わせて聞いてみた。

視線の高さを合わせた理由は女の子に威圧感を与えないためと、親近感を与えるためだ。

？「……………（コクン）」

凜「待つてな」

俺はポケットから財布を取り出して小銭居れから百円を3枚取り出して入れた。

ピロリン

俺はボタンを押してクレーンアームを動かして人形の上に動かして

いった。

動かすときは横から見てたが。

そうしてボタンを放すと。

クレーンアームが下がり、

クレーンアームが開き

クレーンアームが閉じると

そのアームにはトラ柄の猫のぬいぐるみが挟まっていた。

稟「よし！」

俺はガッツポーズをした。

稟（久しぶりにやったけど、腕は鈍ってない！）

俺は大体1年近くやってなかったから少し不安だったが、杞憂だったな。

楓「稟くんすごいです！」

楓が後ろではしゃいでる。

桜「はー、相変わらず稟くんは上手だね〜」

桜は感心してるな。

そつえば桜にも何回か取ったっけな。

そして

ガコン

取り出し口にトラ柄の猫のぬいぐるみが落ちてきた。

稟「よつと、・・・はい」

俺は視線の高さを合わせて渡した。

？「ありがと・・・」

女の子は受け取ると分かりにくい嬉しそうにした。

稟「さてと、それじゃあ・・・」

俺は立ち上がりゲームセンターから去ろうとしたら

？「・・・」

女の子に裾を掴まれた。

稟「えーっと」

俺が反応に困っていると

？「稟？」

む？ 俺の名前か？

稟「ああ、そうだよ、俺は土見稟だよ」

俺は肯定すると

ガバ！

稟「はい？」

何故か女の子に抱きつかれた

？「見つけた・・・」

なにを？

桜「おお」

楓「稟くんは小さい子供とかに好かれやすいですからね」

稟「その小さい子供ってのは楓さんや桜さんではなかったかねえ」

俺は少し皮肉を込めて言った。

すると

？「リン・・・ネリネ知ってる？」

稟「え？ ネリネの知り合いなのか？」

俺が疑問をぶつけると

？「・・・（コクン）」

ふむ

稟「ネリネの所に連れて行くか」

俺がそう言つと2人も頷いた。

そして、俺達（女の子は相変わらず俺の裾、基腰に抱きついてるが）
ネリネの家に到着した。

ネリネは家の前で箒を持って掃いていた。

ネリネ「あら、稟様、どうなされました？ なにか疲れた様子です
が？」

ネリネは俺を見てそう言ってきたので。

稟「疲れたと言うべきか、憑かれたと言うべきか……」

俺は視線を腰に引っ付いている女の子に向けた。

ネリネ「？」

ネリネは俺の視線を追って腰を見ると

ネリネ「リムちゃん!？」

眼を大きく開いて驚いていた。

稟「人工生命体？」

場所は変わって芙蓉家のリビング、俺に楓、桜、ネリネ、魔王のおじさんに先ほどの女の子の本名プリムラちゃんが揃っていた。

魔王「そう。神界と魔界とが協力して作り上げた、最強の魔力の持ち主。それがこのプリムラさ」

魔王のおじさんはプリムラちゃんを見ながら言った。

稟「この子が、ですか……」

俺は隣で平然とジュースを飲んでいる少女に眼を向けた。どこからどうみても普通の魔族にしか見えない。

ちなみになぜ芙蓉家のリビングなのかと言うとおじさんがこちらで構わないと言ってくれたからだ。

魔王「気をつけておくれよ。研究のかいあって、間違いなく最強の魔力は持っているだけだね、困った事にまったく制御が出来ていない。暴発したら、この町どころかこの人工島メガフロートが消滅するよ。とにかく無制限に強化したからね」

稟「歩く核兵器ですか……」

俺は思わず唸るように言ってしまった。

魔王「放射能を撒き散らさない分、地球に優しいクリーンな兵器だね」

魔王のおじさんは暢気に言った。

魔王「おっと、稟ちゃん。紅茶のお代わりはあるかい？」

魔王のおじさんは、俺のマグカップが空なのに気付いたのか聞いてきた。

稟「あ、じゃあお願いします」

俺が言くと魔王のおじさんはカップにティーポットから紅茶を優雅に注ぐ

稟「つて、なんで魔王のおじさんが給仕をやってるんですか!？」

俺が突っ込むと

楓「ごめんなさい。私がやるべきなんですけれど、魔王さまがどうしてもって・・・」

楓が申し訳無さそうにいうと

魔王「ふ、安心したまえ稟ちゃん。こう見えても私の趣味は家事でね、こういった作業は大得意なのだよ、いや、それどころか大好きなのだよ!！」

魔王のおじさんはエプロンを装着して誇らしげに言った。

なんたる、世間一般の魔王像が一気に崩れ去ったような・・・

稟「・・・おじさん、ホントに魔王なんですか？」

俺は疑問をぶつけた。

魔王「あつはつはつは。どこからどう見ても魔王そのものじゃないか」

この世界にあつた魔王崇拜とかのイメージは完全に崩れ去ったな、

・・・ある意味で世界は平和になった・・・

桜「なんとも言えないね・・・」

桜は苦笑いしてるし

魔王「家では世間体がどうか言ってるね、ママもネリネちゃんも私に中々家事をやらせてくれないんだよ・・・、その分、休日の家事は私が全部やることになってるんだけどね」

最初の言葉に少し奥さんに同意してしまった・・・。

・・・とりあえず、人間の魔界に対する考えがいかに間違っていたのかはよく分かった。

これからより多くの事実を知っていくだろうけど、今まで持ってい

た認識や知識は全て捨ててから聞こう、そうしないと一々思考が停止しかねん・・・

稟「でも、なんで人工生命体なんて・・・」

俺は魔王のおじさんに聞いた。

これは完全に人道（魔道？）に反する行為だ。

魔王「ここから先は神ちゃんが来てからだね」

と、言った瞬間

神王「よう、まー坊、プリムラが来ちまったんだってな」

神王のおじさんが神妙そうな顔をしながら現れた。

その後ろにはシアも居た。

神王「よう、稟殿お邪魔するぜ」

シア「お久しぶりっす」

稟「どうも」

そして、神王のおじさんは魔王のおじさんの隣に腰掛けた。
ふむ

稟「すいませんがもう1人入れてもいいですか？」

魔王「もう1人？」

神王「かまわねーが」

稟「すいません」

俺は立ち上がり

稟「楓、悪いけど縄ないかな？」

楓に聞いた。

楓「縄はないですけど・・・」

うーん

シア「縄ならあるっすよ」

と、シアが何処からとも無く縄を取り出した。

どこから出した？

神王「なんで縄なんて持ってやがるんだシア？」

シア「お父さんが暴走したようっす！」

ああ、なるほど・・・

稟「悪いけど借りるよ」

シア「どうぞっす」

俺はシアから縄を借りると、縄の端に輪っかを作り、そして窓を開けて外に出た。

そして、縄をカウボーイのように回して

稟「そこだー!!」

生垣に向けて投げた。

?「うきゃー!!」

よし!!

稟「フーッシュー!!」

俺は掛け声と共に思いっきり振り上げた。
すると

?「あ、痛!!」

俺の目の前には金髪の美少女が縄に捕まった状況で現れた。

稟「ゲット!!」

シア「へ!?」

神王「なんだ!?!」

2人が驚いていると

楓「瑠璃先輩!?!」

稟「へ? その名前は確か・・・」

桜「楓ちゃんの恩人さん!?!」

瑠璃「あう」

稟「すみませんでした!!」

俺は現在絶賛土下座中だった。(プライド? そんなもん今は邪魔

だ!!)

瑠璃「気にしないでください! それよりもどうしてわかったんですか?」

稟「一応俺も軍人なんで、それなりに訓練しました」

瑠璃「それでも私の隠密は完璧だったはずですが・・・」

神王「ああ、確かにこいつの隠れ方はプロも認めてるんだ」

稟「それなら簡単です」

瑠璃「簡単!？」

稟「完璧すぎたんですよ、気配を殺しすぎた」

瑠璃「どういう意味ですか？」

稟「確かにあなたの気配殺しは完璧でした、でも完璧すぎたんですよ、あなたの居た場所だけがポツカリと空白地帯になってたんですよ。だから気付けた」

瑠璃「なるほど・・・」

稟「それと、以前も居ましたよね？ しかも同じ場所に」

瑠璃「以前と言いますと？」

稟「俺がこの家に帰ってきて、魔王のおじさんと神王のおじさん、

シアとネリネに初めて会ったときですよ」

瑠璃「気付いてたんですか!？」

稟「はい」

そう、この人は以前（邂逅を参照）にも居たのだ。（俺は3人と言っていたのが証拠。）

神王「それはすげーな」

魔王「そうだね、私ですら気付けなかったのに」

2人が賞賛してくれた。

稟「それじゃあ本題に戻りましょうか」

魔王「そうだね」

神王「そうだったな」

魔王「人工生命体を作ったのはね、とある魔法を研究するためさ」

神王「その魔法を研究するにはどうしても強力な魔力をもつ存在が必要だった」

魔王「その魔法は、実用化されれば三世界の有りようを根底から変えられるほどの力を持っている魔法だね」

神王「そして、人工生命体は全部で3体作られた。皆違った方法によるものだったかな」

魔王「しかし、過去の2体は強大な魔力を制御しきれなかったのさ」つまりは死んでしまったということだろう、一瞬シアにネリネ、神王に魔王のおじさんそして瑠璃さんも沈痛な表情をしていた。

神王「そして、このプリムラはな1番年下の三号体でわけだ」

魔王「あまり他のものには付き合おうとはしなかったんだがね、ネリネちゃんだけには多少懐いてる、まあ姉妹みたいなものだと思うてくれて構わない」

俺はプリムラを見る、プリムラは黙々とケーキを食べている。

どう見ても普通の女の子だろう、人工生命体って言われても実感がわかない……

楓「でも、なんでそのプリムラちゃんが人間界に？」

楓が疑問に思ったのか質問した。

魔王「まあ、それは、本人に聞いてみるのが一番だろうね、プリムラ」

魔王のおじさんに呼ばれてプリムラはわずかに視線を魔王のおじさんに向けた。

プリムラ「……りんに会いに来た……」

プリムラちゃんは抑揚の欠けた声でそう言った。

少女の静かな眼が今度は俺に向けられた。

どこか寂しげな紫色の瞳の中には、俺の顔だけが映っている。

プリムラ「どんな人なのか……会ってみたかった、ずっと……話聞いてたから……」

ネリネ「リムちゃん……」

シア「リムちゃん……」

悲しげなネリネとシアの声が、そっとプリムラの小さな背中にかけるられた。

それでもプリムラは表情を変えることなく、初めて会った時と同じように無表情な顔のまま、ただ俺を興味深そうに眺めていた。

恐らくは、ネリネから俺の話聞いていて興味を持っていた、というところか……

ネリネ「お父様、結局リムちゃんは どうするのですか？」

不安げに聞いたネリねに対して、流石は父親と言ったところか、魔王のおじさんは優しく微笑んで

魔王「まあ、無理に魔界に連れ帰ってダダをこねられても面倒だしね。しばらくウチに住まわせて様子を見るとというのが妥当だろう」

魔王のおじさんの言葉を聞いて

神王「まあ確かにそうだな」

魔王「もつとも、研究そのものが終わったわけじゃない。また施設に戻らなければならなくなるだろうけれど」

魔王のおじさんがそう言ってプリムラを見た。

するとプリムラは否定するように首を左右に振った。

プリムラ「ここに住む……」
「なんですと？」

プリムラ「私は、ここがいい。りんが居る……」

感情のこもってない声で言いながら、プリムラが俺の裾を掴む。

力いっぱい握り締められたその手は、少女の見せた感情だったのかもしれない。

ネリネ「リムちゃん……」

シア「リムちゃん……」

その言葉を聞いた2人の王様は少し考え込むと

神王「よし、それなら話ははええ！」

魔王「どうだろう稟ちゃん、かわいいペットを飼ってみないかい？
トイレのしつけはしっかり出来るし、なんなら抱き枕の代わりにしてもいい！」

稟「あんたは鬼畜かよ……」

……この展開、実は最初から仕組まれてたんじゃなからうか、まるで猫を預かるような話しかただし……

稟「残念ですが、俺自身が居候の身ですから、楓が決めない……」

「俺がそう言つと

楓「私は稟くんが良いと言つなら構いませんよ？」

早！・・・せめて数秒は悩んでくれませんか楓さん・・・

稟「俺は別に構いませんよ」

それに、俺に会いに来てくれたんだ、それを追い返すほど俺は非情ではない

それに、少し話したり一緒に過ごしてみればどうして俺なのかわかるかもしれない。

稟「俺たちのほうで預かります」

プリムラ「・・・りん・・・」

プリムラは無表情に俺を見たがどこか嬉しそうに見えた。

ここにプリムラと一緒に住む事が決まったのであった。

そしてその夜には俺に楓、桜（急遽泊まることになった）、そして新しく家族になったプリムラと一緒に夕食を食べたのであった。

無垢な少女との出会い（後書き）

ようやくプリムラが出せた。

今回は後書きは割愛します。

眠い……

依頼 始まり編(前書き)

今回は少し短いです

依頼 始まり編

第3者 side

義之「それで、純一さん、本日はどういった用件ですか？」

義之は、現在軍本部の朝倉純一の執務室に秘書官の沢井麻耶を伴い来ていた。

それは今朝方に義之の執務室の電話で純一に呼ばれたためだ。

純一「うむ、それはなお前さんに教導任務を頼みたいからだ」

義之「教導任務ですか、それで相手はどの部隊ですか？ 即応MS部隊ですか？」

純一「うむ、それなんだが、まずは初音島内では無い」

麻耶「それって、つまり出張教導任務ってことですか？」

麻耶が確認すると純一は無言で頷いた。

純一「それで、場所なんだがな・・・」

純一が行き先を言おうとした時だった。

？「そこからは、私にお任せください」

義之が声のした方を見ると、そこには赤いメイド服を着た女性が居た。

その女性は髪は薄い緑色で長いのを後頭部で団子状に纏めてシニヨンで仕舞っている、眼は緑色で少し釣り眼気味だがキリッとした印象を与える女性だ。

義之「すいませんが、あなたは？」

義之は警戒するように右足を半歩下げた。

これはすぐに飛びかかれるようにだ。

義之（気を抜いていたとはいえ、俺が気付けなかったとは、何者だ？）

？「申し訳ありません、名乗るのが遅れました、私は御剣財閥会長付きのメイド兼秘書の月詠真那と申します」

麻耶「御剣財閥の！」

義之（なるほど、御剣の会長付きか、それなら納得だ）

御剣財閥、現在世界規模で5本指に入ると言っても過言ではない規模の大財閥で、幅広く事業を手がけており、歯ブラシからコロニーの建造までやる一大企業の面も持つ。

しかも、財閥としては珍しく後ろ暗い噂なども一切ない綺麗な財閥だ。

純一「立ったままもなんだから、座ったらどうだ？」

義之「私たちは純一の言葉に従って応接セットのソファに座った。

義之「それで、天下の御剣財閥が自分になんの御用ですか？」

真那「はい、教導任務を頼みたいのは我々なんです」

義之「御剣財閥が？」

義之が月詠の言葉に驚いていると

純一「義之、今年の1月に国際会議で決められた法案、覚えてるか？」

義之「はい、それはもちろんです」

決められた法案というのは

それは、始まりはタイタン戦争が終わってから少したった頃まで遡るタイタン戦争が終わったのが新太陽暦71年12月末

事件が始まったのは新太陽暦72年1月末だった、その頃から海賊被害が続出し始めたのだ

最初はまだ各船などの自衛などで事足りたが、だんだん激化し始めたのだ。

そして、同年8月某日最悪の兵器が海賊側に現れた。

海賊がMSを保有し始めたのだ。

それに従い各船は警備会社などに警備を依頼し始めたが、普通の警備船や戦闘機程度では太刀打ちできるはずも無かった。

それを重く見た世界各国は国際会議を開き新太陽暦73年1月に警備会社もMSの保有の許可を出したのだ。

月詠「その法案の可決に伴い御剣財閥の警備会社MSS《御剣シークレットサービス》でもMS課を設立したのですが、教官が居ない為隊員たちの練度がなかなか上がらないのです」

義之「なるほど、それで私達に教導任務をお願いに来たのですね？」

月詠「はい、それとMSもなのですが」

義之「機体もですか？」

月詠「はい、我々のMSは再生した機体なのです、ご迷惑でなければ機体も譲っていただけませんか？ 金額は言い値で適額をお払いします」

それを聞いた義之は少し考えると

義之「純一さん、確か解体待ちのM1アストレイがありましたね？ それを聞いた純一は、秘書官のやよいに命じてデータを端末に呼び出して確認すると

純一「ああ、全部で20機ほどな」

義之「だったら、その機体と、後、未だにアストレイを使ってる部隊の機体を2型に機種交換してそれを当てたら全部で何機になりますか？」

純一はまたデータを確認すると

純一「全部で35機だな」

義之「この数ならばどうでしょうか？ 機体の状況は全て程度の良い機体ですが」

それを聞いた月詠は驚いた表情をしながら

月詠「はい、大変ありがたいですが、宜しいのですか？」

義之「なにがですか？」

月詠「我々にそこまで便宜を図ってくれるのがですよ」

義之「大丈夫ですよ」

純「今回ののは、機体の払い下げですからな」

月詠「そうですね、それで本題の教導任務ですが、お引き受けしてもらえますか？ こちらもできるだけ便宜は図りますので」

純「義之、どうする？ 判断はお前に任せる」

それを聞いた義之は少し考えると

義之「わかりました、お引き受けいたします、行く人数ですがまずは自分と沢井少佐とパイロットは自分を入れて4人と、整備員を大體30人ほどでよろしいですか？」

義之は返答してから人数を確認すると

月詠「はい、構いません、人選はお任せいたします」

義之「わかりました、それで期間はどれくらいですか？」

月詠「はい、おおよそ2ヶ月を予定しています」

義之「わかりました」

月詠「ありがとうございます」

義之「いえ、新人にもいい教育になりそうです」

こうして、義之たちの御剣財閥への出張教導任務が決定したのだった。

依頼 始まり編（後書き）

ようやく月詠さんを出せた。

今回も後書きコーナーは割愛します

依頼 人選と通達（前書き）

今回は短いです

依頼 人選と通達

義之たちは翌日、ワルキューレ隊の隊長格を全員集めていた。

義之「さて、俺が先日純一さんに呼び出されたのは知ってるな？」

全員「……………はい……………」

全員、義之の言葉にうなずいた。

義之「用件はな、出張教導任務だ」

みちる「出張教導任務ですか？」

義之「ああ、相手は御剣財閥の警備会社のMSSのMS課だ」

千鶴「御剣財閥って、もしかして!!」

義之「ああ、お前さんのとこの御剣少尉の実家だな、さて問題は人選だ」

みちる「人選ですか？」

義之「ああ、人数はパイロットは俺を入れて4人、後は整備員を30人ほどだな」

まゆき「なるほどね」

修史「どうしますか？」

義之「まずは整備員兼秘書で麻耶は確定な、それと、まゆき先輩、お願いします」

麻耶「わかったわ」

まゆき「お任せ」

義之の言葉に麻耶は何時もどおりに答えて、まゆきは右手の親指を立てて答えた。

義之「虚さん、整備員でおすめの人物居ませんか？」

義之は整備員代表として来ていた、布のほとけつほ虚に聞いた。

虚「それならば、黛薰子はどうでしょうか？ 彼女は優秀ですよ」

義之「ふむ、麻耶？」

麻耶「ええ、彼女なら大丈夫ね」

義之「なら薰子技術少尉と後は……」

虚「ならば、私の妹の本音はほんねはどうでしょう？　少しのんびりやですが腕は保障します」

義之「妹？　今年入った整備員か？」

虚「はい、どうやら父親に似たのかのんびりやですけど」

義之「というと、虚さんは母親似ですか」

虚「はい」

義之「なるほどね、麻耶どう思う？」

麻耶「あの子ね、まあ確かにのんびりやだけど、腕はいいわね」

義之「よし、採用するか、後は虚さんと麻耶に任せていいか？」

虚「お任せください」

麻耶「選んでおくわ」

義之はその言葉を満足そうに聞くと

義之「後はパイロット2名だな、さーと誰を選ぶかな？」

みちる「それならば、1名は白銀少尉ではどうでしょう？」

千鶴「白銀にですか!？」

義之「いや、あいつは機体の負担を考えなさ過ぎ、この間整備班の

栗山一等兵から泣きつかれた」

義之はそう言っていると、携帯端末の画面にあるデータを出した。

みちる「これは……」

まゆき「酷いね……」

千鶴「あの、白銀がすいません……」

みちるとまゆきはデータを確認すると沈黙し、部隊長である千鶴は頭を下げた。

そこには各部隊の部品損耗率が出ており、バルキリー隊がダントツで多いのだ。

しかも、その内の約4割が白銀武が原因なのだった。

義之「と言うわけで、白銀少尉に関しては伊隅中佐と楯無少佐、みちる「了解しました」

楯無「まーかーせて」

義之が”みつちり”の部分強調すると2人はそれぞれ返事した。
千鶴「重ね重ねすいません……」

決定を聞いた千鶴少尉は終始平身低頭状態だった。

義之「さてと、2名か……」

義之が悩んでいると

まゆき「それなら、織斑少尉は？」

まゆきが隣に座っていた一夏の肩を叩きながら推薦した。

一夏「俺ですか!？」

まゆきの言葉に一夏が驚いていると

義之「ああ、いいかもね」

一夏「マジですか!？」

義之「オオマジです」

義之と一夏がそんなやり取りをしていると、

みちる「ふむ、それならもう1人はデュノア少尉かな？」

みちるがシャルロット・デュノアを推薦した。

一夏「シャルですか？」

義之「ああ、なるほどね、織斑少尉は近接戦闘系だから、デュノア

少尉の万能系と合わせればあらゆる状況に対応できるな」

義之はみちるが推薦した理由を察した。

義之「だったら、パイロットは俺、まゆき先輩に、織斑少尉にデュ

ノア少尉でいいか？」

全員（一夏以外）「……はい」「……」

一夏「頑張ります！ 後シャルには俺が伝えておきます」

義之「ああ、そういえば一緒の家だったな」

一夏「はい、訓練生時代にどうやらどなたか知りませんが画策して

くれたみたいです」

それを聞いた義之は

義之「ああ、それは俺と杉並とさくらさんだな」

一夏「マジですか!？」

義之「オオマジです!！」

2回目のやり取りである（笑）

義之「さて、メンツが決まったから日程だが、出発は3日後だ」
全員「「「「了解！」「」「」」

場所は変わり織斑邸

一夏「シャル、3日後から俺とシャル出張な？」

一夏は夕食時に目の前に座って食事しているシャルこと、シャルロ
ット・デュノアに言った。

シャルロット「へ？ 出張？」

シャルロットはポカンとしながらも聞いた、これも訓練の賜物か

一夏「ああ、大佐と沢井少佐と整備班30人と高坂中佐と俺とシャ
ルで出張教導任務だ」

シャルロット「教導任務、ワルキューレってそんなのも請け負うん
だ、で相手は？」

一夏「なんでも御剣財閥の警備会社のMS課らしい」

シャルロット「御剣財閥！？ ってあの御剣財閥?!」

シャルロットは名前を聞いて驚いた。

一夏「シャル驚きすぎな、まあその御剣財閥だ」

シャルロット「ふえー、そんな大財閥からも依頼されるなんて、凄
いね」

一夏「ああ、出発は3日後に軍用第7湾口からだ、準備しといてく
れよ？」

シャルロット「わかった」

シャルロットは返事をしたが頭の中は別の考えでいっぱいだった。

シャルロット（一夏と出張かー、御剣財閥ってことは私有地かな？

水着持って行くのかな？）

好きな男性（一夏）と出張できると聞いたシャルは想像を繰り広げ

る。

好きな男性を交えた空想と想像は恋する乙女の特権である。

そうして織斑邸での夕食は終わったのだった。

依頼 人選と通達（後書き）

今回も後書きは割愛します

依頼 出発とレクリエーション編(前書き)

ここでフラグが!!

依頼 出発とレクリエーション編

義之「全員揃ったな？」

全員「「「「はい！」「」「」

義之たちは早朝の7時に軍用第7番湾口に集合していた。

義之「忘れ物ないな？」

全員「「「「はい！」「」「」

まるで、ピクニックのノリである。

義之「よし、俺たちは今から”あれ”に乗る」

義之はそう言いながら背後のとある巨大艦を右手の親指で示した。

義之と麻耶以外「「「「え！？」「」「」

一夏「はあー、しかしすごいな」

一夏は自分が乗ってる巨大艦をもう1回見て驚いていた。

シャルロット「そうだね、まさか富士級空母に乗れるなんて思わなかったね」

義之「そりゃそうだ、俺も今朝聞いたんだからな、なんでもJEUの方達が名乗り出てくれたそうだ、まあおかげでアストレイを全部搭載出来たけどな」

一夏「大佐！？」

シャルロット「何時の間に!？」

一夏たちは隣にいた義之に気付いて驚いていた。

義之「お前ら驚きすぎな？ しかし、本当にデカイな」

義之も富士級空母の大きさに驚いていた。

富士級空母1番艦<富士>

日本帝国が作った超弩級空母で、縦に3層構造、横にはタンカーが4隻並んだようになっており、内部にはMSが優に30機近く収納できる、さらには甲板にもMSを係留できるため、総数では約40機も収納できる。

陸地に着岸した場合は横と前が開きMSを迅速に展開及び収容できるようになっている。

以上補足説明終了

義之「到着するまで2日かかるから、好きに行動しろ、艦長殿から許可は得てるから水着に着替えたらどうだ？ 持ってきてるんだろ？」

義之はイイ笑顔でシャルロットを見た。

シャルロット「ふえ！？ た、確かに持ってきてますけど・・・、いいんですか？」

シャルロットは顔を赤くしながら聞いた。

義之「構わん、なにかあったら俺が責任とるから」

義之は手をヒラヒラさせながら言った。

一夏「でも、俺水着なんて持ってきてないですよ？」

一夏が自分の荷物を思い出しながら言った

シャルロット「それなら大丈夫、僕が持ってきたから、一夏は多分持っていないだろうなって、予想して」

シャルロットがそれを遮った。

一夏「いつのまに・・・」

一夏は驚いて言葉も出ない。

義之「よし、なら着替えて甲板な？ 俺も着替えるか、麻耶とまゆき先輩にも言つとくか」

義之はそう言いながら歩き出した。

シャルロット「ほら、一夏も行くよー！」

シャルロットは一夏の手を引っ張って部屋へと走り出した。

一夏「わかった、わかったから、手を引つ張るな！」
一夏は転びそうになりながらも割り振られた自分の部屋へと走り出した。

現在7月1日、午後13時、気温は28度

義之たちの乗った富士級空母は海を走っていた。

あれから約20分後

富士級空母の甲板の一角には色とりどりの水着を着た男女が居た。

義之は普通のトランクスタイプで色は灰色、そしてサングラスをかけており、鍛えられた肉体を惜しげもなく晒していた。

隣には同じく水着に着替えた麻耶が居て、水着はパレオタイプで、腰に巻いた布は水色で胸を覆う布は白、そして麦わら帽子を被っていて、綺麗な白い肌だった。

まゆきは何処から持ってきたのかビーチチェアに寝転がっている、水着は彼女らしく青を基調にしたビキニを着用しており、サングラスをかけていて、鍛えられた脚線美、健康的な体だった。

そして、一夏は白いボクサータイプの水着を着ており、以外にも腹筋が割れている

シャルロットはオレンジ色を基調に黒いストライプのパレオタイプの水着で彼女らしく活発かつ可愛らしさを強調している。

尚一番謎な水着（？）を着ているのは布のほこけほんね仏本音で、見た目は完全にキツネのきぐるみなのである、暑そうというのが全員の共通の認識だが、本人は至って普通で、何故か尻尾まで動いている、どういう原理なのだろうか？

黛まゆみかおのこ薫子は、緑を基調に黒の斑点が入ったビキニを着ており、首には

何故かカメラを引っさげている。

義之「しっかし、壮観だねー、この人数は流石に」

義之は手で影を作りながら周囲を見回して言った。

麻耶「まあ、全部で30人近くいるからね」

麻耶が人数を述べて

まゆき「だけどさ、音姫も来たかったんじゃないの？」

まゆきは今回外れた親友を思い出した。

義之「音姉まで来たら誰が書類を処理するのさ」

義之が正論を述べた。

ちなみに、そのころワルキューレ隊舎では

音姫「弟くん、こんなに書類任せてごめんなさい……」

書類の山を見て絶望している朝倉音姫の姿が目撃されたのだった。

なお、帰ってからの義之の書類が減ったとか。

閑話休題

義之「ふむ、見渡す限り青い海で」

義之は景色を堪能していた。

麻耶「そうね、私達初音島から出るの久しぶりなものね」

麻耶は義之の言葉に賛同していた。

忘れてるかもしれないから言うが、この2人は恋人である。

義之「なんか今説明があったような？」

麻耶「どうしたの？」

義之「いや、気のせいかな？」

麻耶「？」

義之「気にするな」

麻耶「わかった」

そして、義之は少し思案顔をすると

義之が言つと、コートコートの右側に一夏とシャルロットが入り、左側に長身の黒髪の国木田正樹くろぎだましまきとサル顔の照屋匡てるやただしが入った。

義之「試合は10点先取したほうが勝ちな？ 審判は今回は俺がする」

義之は借りたのだろう脚立の上に座った。

義之「両方とも準備はいいか？」

両方「はい！」

義之は両方が頷いたのを確認すると

義之「試合開始！」

結果から言つと

一夏&シャルロットペアの圧勝だった。

理由は、正樹と匡エロスのお互いの足の引つ張り合いである。

しかも最後は匡エロスが自分の欲望でシャルロットを凝視して、一夏のスパイクを顔面に食らったのである。

なお、一夏&シャルロットペアはまさしく阿吽の呼吸と言える連携であった。

シャルロットがボールを上げて一夏がスパイクと言つた形である。

その連携は一緒に訓練したのと一緒の家に生活しているが所以だろう。

義之「続いて、明久&光輝あきひろ&みつてるペア対まゆき&薫子かおるペア！」

コートコートの右側に整備員の高島明久たかしまあきひろと同じく整備員の朝霧光輝あさぎりこうきが入り、左側に高坂まゆきたかさかと薫子かおるが入った。

義之「準備はいいか？」

全員「はい！」

義之は返事を聞くと、左手を上げて

義之「はじめ!」
言うと同時に下ろした。

これも結果から言うともゆきと薫子の勝ちだった。

以外なのは薫子の活躍で、整備員とは思えない身軽さでボールを拾い続けたのだ。

それをまゆきがさかさずコートに叩き込むという連携だった。

義之「さて次の試合は・・・」

義之が次の対戦の組み合わせを言おうとした時だった。

「すまないが、我々も参加していいだろうか？」

義之は声のした方向を見た。

そこに居たのはメガネをかけている男性で、痩身だが目元はキリッとしており、髪は黒くショートカット、雰囲気から猛者とわかる。

男性の隣にいるのは女性で、こちらもメガネをかけており、髪は黒く後ろだけ長いのを後頭部でピンで纏めている、優しそうな雰囲気
の女性だった。

義之「はい、構いませんが、お名前は？」

義之が確認すると

「私は日本帝国本土防衛軍帝都守備連隊所属の狭霧直哉少佐、
でこっちは私の副官の」

「同じく帝都守備連隊所属の駒木春香、階級は大尉です」

2人は義之に敬礼しながら自己紹介した。

義之「帝都守備連隊！ それはかなりの猛者というわけですか」

帝都守備連隊

それは日本帝国の帝都東京を護る最後の砦で、全員エリート、もしくは各部隊からのトップガンが集められた精鋭部隊だ。

その少佐と大尉、まさしく精鋭中の精鋭と言っても過言ではないだろう。

直哉「自分の国すら護れなかった軍人だがね」

直哉は肩をすくめて言った。

義之「っと、すいません、自己紹介してませんでしたね、自分は初音島統合防衛軍特務部隊、ワルキューレ隊隊長の桜内義之大佐です」
麻耶「自分は同隊の副官を勤めてます沢井麻耶少佐です」

2人は敬礼したが、格好が水着なので威厳がない。

ちなみに日本帝国の2人も同じく水着で、直哉がブルーメランタイプで、春香のほうは競泳水着タイプだった。

直哉「ほう、君がかの有名な初音島の守護神か！ 予想よりも若いな」

直哉は義之の名前を聞いて驚いた。

春香「ええ、自分もせめて同年代かと思いました」

副官の女性も同じだったようだ。

それを聞いた義之も苦笑いを浮かべて

義之「会うたびに結構言われますね」

麻耶「ええ、予想より若いって言われてるわね」

麻耶も笑っている。

直哉「それはそれは、それで自分達の対戦相手はどうしますか？」

それを聞いた義之は少し考えると

義之「では、自分と少佐が相手をします、それでどうですか？」

義之が提案すると

直哉「構わん、それではお互い健闘しよう」

直哉が手を差し出すと

義之「そうですね、お互い頑張りましょうー！」

義之も手を差し出して握手した。

まゆき「それじゃ、審判はあたし高坂まゆき中佐がします！」

まゆきは脚立に登り
まゆき「双方準備はいいですね？」
義之たちに確認を取った。
両方「……ああ（はい）！」「……」
まゆきは両方の準備が完了したのを確認すると
まゆき「試合開始！！」
合図を出した。

試合は接戦になっていた。
現在点数は9対9、サーブ権は義之ペア、これが最後のサーブだ。
観戦していた外野は最初は全員声を出して応援していたが、今は全
員黙って手を握っている。

まさしく「手に汗握る試合」だった。
まゆき「サーブ義之、ゲームスタート！」
まゆきが合図すると

義之「はっ！」
義之はボールを高く上げてジャンピングサーブを右側のラインギリ
ギリを狙って打った。

春香「はい！」
春香はそれをレシーブで上げた。

直哉「せい！」
上げられたボールを直哉が同じようにラインギリギリを狙って打っ
た。

麻耶「くっ！」
それを麻耶がジャンピングレシーブで上げた。
義之「それ！」
それを義之がアタックして真ん中を狙う
直哉「なんの！」

尚、この後の結果を報告すると

義之たちが棄権したので、まゆき&薫子ペア対一夏&シャルロットペアの戦いになったのだが

ここで大番狂わせが発生して

一夏&シャルロットペアが勝利したのだ。

義之「って訳で、優勝は一夏&シャルロットペア！」

義之が言っていると周囲から拍手が一夏とシャルロットに送られた。

因みに現在には着替えて食堂にいる。

理由は汗をかいたからだ。

義之「それでは賞品を渡します」

義之は内ポケットから封筒を取り出して

義之「賞品は、さくらパークのペアチケットです!!」

それを一夏とシャルロットに渡したのだった。

因みにさくらパークとは初音島のメガフロートの1つの半分を使っている一大遊園地であり敷地内にはホテルまで完備しているのだ。

そして、そのチケットにはホテルに泊まってよいという権利付きなのだ。

*一夏とシャルロットにデートフラグが発生した!!

依頼 出発とレクリエーション編（後書き）

さーてと、一夏とシャルロットのデート内容を考えなければ。
とことん甘くしてやる……！

後書きは割愛します

依頼 到着（前書き）

久しぶりにあの子たちが登場です

依頼 到着

義之「ようやく着いたか・・・」

義之は艦から降りると背伸びをした。

7月3日、午前11時

富士級空母は御剣財閥の私有島に到着していた。

麻耶「ほら義之、気を抜かないの」

麻耶は義之の行動を嗜めた。

義之「悪い悪い」

義之が麻耶に謝っていると

真那「ようこそ、お越しくございました」

月詠真那が優雅にお辞儀して歓迎してきた。

義之「お久しぶりです、月詠さん、今日からよろしくお願いします」

義之は代表者として握手した。

真那「それではご案内します」

義之「はい、よろしくお願いします・・・ん？」

義之は着いて行こうとしたが、視線をずらして遠くを見た。

麻耶「どうしたの？」

真那「どうしました？」

2人は義之の視線の先を見るが、先にはビルが屹立しているだけだ

義之「どうやら俺たちを見ていた子が居たようだな」

義之は笑顔で言う

真那「まさか・・・」

月詠は頭を抱えた。

麻耶「知ってるんですか？」

真那「ええ、訓練生の中に恐ろしいほどに情報通な子が居おりまして、

恐らくその子かと・・・」

義之「なるほどね、まあ今から追っても無駄でしょうね、気配は既に無くなっていますから」

真那「そうですね、……それでは気を取り直して案内しますね、こちらです」

義之たちは月詠真那に着いていった。

第3者 side (別視点)

？「いい天気だねー、刹那さん」

腰より少し長い位まで伸ばしたツインテールが特徴の女の子が隣を歩いていた黒髪の美少女の桜咲刹那に言った。

刹那「そうですね、明日菜さん」

桜咲刹那は隣のツインテールの少女の神楽坂明日菜にそう返した。

2人の言う通り天気は晴天で雲1つない眩しい青空だった。

因みに2人の格好は上はTシャツでズボンは灰色のズボンで統一されておられ、2人の首元にはタオルが垂れ下がっており、それで時々汗を拭いていた。

そして2人が適当に散歩していたら

？「おーい、アスナに刹那さん」

2人は声のした方向を見た。

2人のほうに右手に一眼レフカメラを持った少女が走ってくる。

髪型は肩より少し伸ばしたくらいだろうそれを後頭部でパイナップルみたいに束ねており前髪はヘアピンで留めている。

明日菜「朝倉じゃん、どうしたの？」

カメラを持った少女の名前は朝倉和美と言い、明日菜と刹那の同期の訓練生の1人である、尚その背後には色素の薄い白髪の少女が”

浮いている”

刹那「相坂さん、お元気そうですねによりです」

刹那は背後の少女に笑顔で問いかけた。

その少女の名前は相坂さよと言い、驚く事なかれ”幽霊”なのだ、しかし未練があったらしく現世に残ってしまい、それを朝倉に見えられて友達関係になったのだ。

さよ「はい、まあ私は幽霊ですから、大丈夫ですけど」
さよは刹那の挨拶に苦笑いしながら返答する。

和美「ほら、今日私達の教官が来るって予定だったでしょ？」

和美は明日菜の質問に答えた

明日菜「ああ、確かそうだったね、もしかして来たの？」

明日菜は思い出したように言いながら、和美に質問した。

和美「うん、今から約60分前にね、で早速撮影してきたんだけど」と和美は右手に持っていたデジタル一眼レフの画面を刹那と明日菜に見せた。

和美「えつと、ほらこの人達なんだけど」

和美は画面に映っている30人越えの人数の中から先頭にいる4人を示す。

明日菜「へー、この人達が私達の教官なんだ、若いね」

刹那「そうですね、私達と同じ年くらいでしょうか？」

和美「多分ね、それで驚きなのが、この仕官服を着た人なんだけどね、次の写真見て」

和美は画面を操作すると写真が変わり、義之がズームされて首元まではつきりと写った。

刹那「この男性がどうしたんですか？」

和美「ほら、首元の階級見て」

明日菜「えーつと、・・・これってまさか佐官!？」

和美「そう、しかも大佐階級なのよ、で問題は次の写真」

和美はまた画面を操作して写真を変えた。

刹那「っ！ こつちを見てる!？」

刹那の言う通り義之はこつちを見て微笑んでいる

和美「驚いちゃったよ、私距離800くらいは離れてたのに、迷いなくこつちを見たからね」

明日菜「偶然じゃないの？」

明日菜が懐疑的に言う

遠くからエンジン音が聞こえる

刹那「このエンジン音は聞きなれませんか？」

明日菜「そうだね、それにこれは戦闘機かな？」

明日菜と刹那の2人は空を見ながら視線を左右に動かす

和美「ねえお二人さん、あれじゃないかな？」

和美はある方向を指差した。

2人も指先を見る。

そこには白を基調にオレンジと黒の配色がされた戦闘機が飛行して
いて翼はリバーズデルタの形をしている。

刹那「見たことない機体ですね、新型でしょうか？」

明日菜「多分ね」

2人がそう言っていると、その戦闘機は高空から一気に低空まで降り
てから、垂直に上昇した

その時だった。

明日菜「うそ!？」

刹那「変形した!？」

2人は驚いた、なにせその戦闘機は変形してMSになったのである。

和美「見たことないな、……あのペイントは!」

和美は機体を凝視していると突如カメラを構えて撮影した。

可変したMSはしばらく旋回していると、ある方向に飛んでいった。

明日菜「あの方向は!」

刹那「私達の訓練施設の建っている方向ですね」

2人は可変式MSが飛び去った方向を見て喋っていると

和美「やっぱり!」

和美はカメラの画面を見ていて突如大声を上げた。

その大声に気付いた2人は和美を見る

明日菜「朝倉どうしたの?」

刹那「どうしましたか?」

さよ「朝倉さん?」

さよは朝倉の肩越しに画面を見る

さよ「え!？」

さよまで驚いたのを見て刹那と明日菜は不審に思い同じく画面を見た。

刹那「な!?!」

明日菜「このマークは、初音島!?!」

2人も画面を見て驚いた、画面に映っている機体は右胸に桜の花の上に斜めに書かれています。楯と刀がペイントされていたのだ。

明日菜「もしかして、今日来た初音島の新型機!?!」

明日菜は気付き驚く。

刹那「とにかく訓練棟に戻りましょう!」

3人「うん(はい)!!」

そして、3人は訓練棟に向かい走り出した。

そして、この時新しい出会いで伝説と会えるとは思わない4人だった。

依頼 到着（後書き）

久しぶりに登場しましたよ、ネギまー！のキャラが

依頼 出会い(前書き)

最近短いな・・・
ヤバイなんとかしないと・・・

依頼 出合い

義之「ふむ、MVF-11は予想以上だな、あとはもう少し変形時間の短縮とスラスターの調整をすれば・・・」

義之は可変式MS、MVF-11<ムラサメ>から降りて思案している

麻耶「あんな危険な飛行するなんて聞いてないんですけど？」

麻耶が義之の耳を引っ張った。

義之「痛えっ！ 悪かったって！！ ちょっと勢いに乗ったんよ！！」

義之は必死に弁明している。

薫子「まあまあ、沢井少佐その辺で、それで大佐どうでした？」

薫子が間に入りとめると薫子は機体を見ながら聞いた。

義之「ふむ、予想以上の性能だったな、ただ変形時間が少し遅かったかな？ 後スラスターの出力がもう少し欲しいな」

義之は少し考えてから発言して、それを聞いた薫子はそれを聞いて

薫子「わかりました、今回持ってきた部品で少し調整しますので、終わったらまた乗ってください」

義之「わかった」

そうしてムラサメがMS格納庫ハンガーに收容されて整備兼調整されていると？「あつ！ さっきの可変式MSだ！！」

足音が複数聞こえたと思うと女の子の声が聞こえた。

初音島関係全員「……ん？」「……」

その声の方向に全員視線を向けるとそこには4人の女の子が居たが、1人浮いている。

義之「えーと、すまないが君たちは？」

義之は代表して近づき質問する

明日菜「はい、私達はMSのMS課に所属している訓練生で、私の名前は神楽坂明日菜と言います！」

明日菜は義之に敬礼しながら自己紹介すると、それならい他の人も

刹那「同じく私は桜咲刹那さくらざきせつなと言います」

和美「私は情報管制担当の朝倉和美あさくらかずみです」

さよ「私も情報管制担当の相坂さよあいさかです！」

義之は幽霊が居ることに驚きつつも全員を見て

義之「なるほど、君たちか、俺は今回君たちを鍛える事になった桜内義之大佐だ、よろしくな？」

4人に対して義之も敬礼しながら名乗る

4人「……はい！」「……」

4人は義之の階級を聞いて驚いているが冷静に返事をした。

すると、義之は少し考えると

義之「えっと、確か朝倉訓練生だったな？」

義之は朝倉和美を見ながら聞いた。

和美「はい、そうですけど？」

和美は少し身構えた。

義之「君だろ？ さっき俺を見てたの？」

和美「なっ！？」

和美は義之の指摘に驚いている

義之「それに、カメラも使ったろ？ レンズが光ってた」

和美「うぐっ！？」

明日菜「朝倉諦めなさい」

刹那「そうですね、ここまで完璧に言われてわ、どうしようもありません」

さよ「そうですよ、朝倉さん」

全員に言われて観念したのか

和美「そうね、確かに私です」

頭を下げた

義之「ああ、いや別に責めようってわけじゃないから安心しろ、どうせ明日になれば自己紹介するんだし」

義之は慌ててそう付け加えた。

明日菜「明日ですか？」

義之「ああ、今日は機体のメンテナンスが中心だな」

刹那「なるほど、それである機体が大佐殿の専用機なんですか？」

刹那はムラサメを指差して聞いてきた。

義之「いや、あれは試験評価機体でね、俺の専用機はあれだ」

義之はムラサメが整備されているのとは反対側の右側の壁を指差した。

そこに立っているのは鉄灰色の機体で頭部には特徴的なV字型アンテナ

明日菜「嘘！？まさかストライク！？」

刹那「間違いありません！あの機体はストライクです！！」

和美「マジだ！？」

全員驚いてストライクを見ている

明日菜「ってことは、もしかして、伝説の<初音島の守護神>！？」

義之「あー確かにそう呼ばれてるな」

刹那「な！？あなたが！？」

和美「うわー、予想外に若いし、優しそう」

麻耶「で、こちらに居る高坂中佐の搭乗機はアレね？」

麻耶はついでとばかりに見た目が重厚な機体を指差す

刹那「あれは確かデュエルAS！？」

明日菜「うわっ！！GATタイプが2機揃ってる！！」

全員は流石に2機も居るのは予想外だったのか驚天動地といった感じである。

？「あ、明日菜さん、こんな所に居た！」

義之たちは声のした方向に視線を向けた

そこに居たのは赤髪を短く切りそろえて後ろにゴムで纏めている小さいメガネをかけた、10歳くらいの少年だった。

初音島全員（（（子供？）（（（

義之たちが不思議に思っていると

明日菜「あー、ごめんねネギ、ちょっと新しい教官の人達を話しちゃって」

ネギ「へ？ あ、あなたが今日来てくださったMSの教官さんですね？ 僕はMSのMS課で教官をしています、ネギ・スプリングフィールドと言います！」

ネギは明日菜に言われて義之たちに気付き挨拶した。

義之「これはご丁寧にも、俺は今日から約2ヶ月間教官を務める桜内義之大佐だ」

麻耶「私は副官の沢井麻耶少佐よ、よろしくね」

まゆき「あたしは高坂まゆき中佐よ、よろしくー」

一夏「俺は織斑一夏少尉だ、よろしくな」

シャルロット「僕はシャルロット・デュノアと言います、よろしくね？」

ネギは全員の名前を聞きそして中の機体を見ると

ネギ「桜内・・・もしや、あなたはあの<初音島の守護神>ですか！？」

ネギは眼をキラキラさせながら聞いた

義之「ああ、そうだが」

義之が質問に答えると

ネギ「凄い！ お会いしたいって思ってたんですよ！ 握手とサインいいですか！？」

義之「ああ、それくらいなら構わないが・・・」

義之はネギが何処から出したのか色紙にサインしてから握手した。

ネギ「そういえば明日正式に挨拶でしたね、今日は僕が部屋に案内しますね」

義之「いいのか？」

ネギ「はい、月詠さんに任されたので」

義之「わかった、じゃあよろしく頼むよネギ君」

ネギ「はい！ それじゃあこちらです、あ、明日菜さんたちは自分の寮に戻ってくださいね？」

ネギは本来の用事を思い出して明日菜に言ってから案内した。

因みに部屋割りはこちらだ

1号室 義之&麻耶

2号室 一夏&シャルロット

3号室 まゆき&薫子

4号室 本音&京子

以後整備班男性が2名組みで一部屋ずつ

それを聞いた一夏は

一夏「マジで!?!」

と言い

シャルロットは

シャルロット（一夏と同じ部屋かー、えへへ）

と顔を赤くしていたそうなの……

依頼 出会い（後書き）

尚、今年の更新はこれが最後です。
また来年もお願いします！！

後書きコーナー！！

作者「よ！ 久しぶりです！ 作者の京勇樹だ！」けいゆうき

雪音「どうも、お久しぶりです、アシスタントの田原雪音です」たはらのゆきね

作者「今年はこれが事実上最後の更新だ！」

雪音「来年もよろしくお願いしますね？」

作者「最初は後書きは書かないつもりだったが、やっぱり書くこと
思ってたな」

雪音「急遽書きました」

作者「てなわけで、今回のゲストよ試験召喚！！」サモン

足元に幾何学的な魔方陣が浮かび上がり煙

シャルロット「けほ！ なんか煙いんですけど！？ 後今の作者の

言葉はちよつと問題ありだよ！？」

気にしない！！

作者「はいはい、では今回はこれをお願いします！！」

シャルロットに紙を渡す作者

シャルロット「これを言えばいいの？」

雪音「ええ、お願いね」

シャルロット「わかった」

ではスタート！！

シャルロット「私に命をくれてありがとう……」

はい、終了!!

作者「どうだった？」

シャルロット「なんか心に響くね……」

雪音「えっと、説明するとね、それはアニメの『エンジェル・ビーツ』のキャラの立花奏たちばなかなでつて子が自分に心臓の移植のためにドナー登録してくれた主人公の音無結弦おとなしゆずるに言った言葉ね」

作者「更に説明すると、主人公達がいたのは死後の世界なんよね、あの作品は命の大切さを教えてくれたよ……、もし今自殺を考
えている人がここを読んでいるならば、今すぐに『エンジェル・ビーツ』を見る!!」

シャルロット「なんだろ、このセリフを言うのに違和感が無い……」

作者「さてと、今回はここまでだな」

雪音「そうね」

シャルロット「では」

全員「……また来年もよろしくお願いします!!」「」「」

依頼 始まり(前書き)

義之が少し強すぎたかな？

依頼 始まり

義之たちが到着した翌日のとある一室

ネギ「皆さんの出席を確認しました、皆さんおはようございます！」

全員「…………おはようございます、ネギ先生！」「…………」

ネギの挨拶に全員元気良く挨拶する

義之（部屋の外）「元気なのはいいことだよ」

麻耶（同じく部屋の外）「いきなり老け込まないですよ……」

一夏（同じく外）「大佐も十分若いですから」

シャルロット（同じく外）「そうですよ」

ネギ「さて、もう話は知ってると思いますが先日新しい教官の人達を招待しました」

全員（明日菜、刹那、和美、さよは抜く）「…………おー！」「…………」

義之「いや、本当に元気だね」

麻耶「何時の間にお茶を出したの？　そして飲むな！」

一夏「ここから出したのか？」

足元のクーラーボックスを見る一夏

シャルロット「早業だね……」

ネギ「それでは、どうぞ入ってください！」

ネギに呼ばれたのでお茶を仕舞い部屋に入る義之たち

義之「失礼する」

麻耶「失礼します」

まゆき「どうも」

一夏「失礼します」

シャルロット「失礼します」

ネギの隣に立つ5人

ネギ「では御1人ずつ自己紹介をお願いします」

義之たちをお願いするネギ

義之「あいよ、俺は初音島統合防衛軍所属の桜内義之、階級は大佐だよろしく」

全員（明日菜、刹那、和美、さよを抜く）「……………大佐！？」「……………」

ネギ「更に補足しますと、この方はかの伝説の＜初音島の守護神＞さんです」

全員（明日菜、刹那、和美、さよを抜く）「……………えー！？」「……………」

義之「まあ、確かにそう呼ばれてるね」
腕組みしながら笑う義之

麻耶「私は副官で秘書官を勤めてます沢井麻耶少佐です、よろしくね？」

全員「……………よろしくお願いします！」「……………」
まゆき「あたしは副隊長の1人の高坂まゆき中佐だよ、よろしく」

全員「……………よろしくお願いします！」「……………」
一夏「俺は新任少尉の織斑一夏少尉だ、よろしくな！」

全員「……………よろしくお願いします！」「……………」
シャルロット「僕はシャルロット・デュノア少尉です、よろしくね？」

全員「……………よろしくお願いします！」「……………」
全員が挨拶したのを確認したネギ

ネギ「それでは全員でMS格納庫ハンガーに移動しましょう！」
全員「……………はい！」「……………」

そうして、訓練生たちは自分達の居た教室のあった3階から移動して1階のMS格納庫ハンガーに移動した。

ネギ「今日から皆さんの機体はこの機体に統一されます」
そう言つてネギはMS格納庫内ハンガーに収納されている機体群を指差す

明日菜「この機体は……………」
明日菜は収納されている機体を見て驚いている

義之「MBF-M1 M1アストレイ初音島で1番最初に作られた

量産型機だ」

義之が全員の前に立つ

刹那「初音島産の……」

麻耶「ストライクの試験稼動データを基に量産した機体です、違うのはPS装甲ではなく発泡金属という軽量金属を使用しているので、既存の機体の中では機動は高いのですが防御力が低いです」

麻耶の説明を聞き少し不安な顔をする訓練生一同

義之「だが、使いこなせればそんなしょそらの量産型には負けない、俺が試しに操縦したらイージスと互角だった」

？「そうなのですか？」

義之の説明を聞いて金髪の女の子が前に出た

義之「えーと、君は……」

あやか「申し送れました、私はこの訓練生たちの部隊長を務めます
雪広あやかと申します」

あやかは礼儀正しくお辞儀する

義之「ふむ、あやか嬢の疑問への返答はこの映像を見せよう」

義之が言うところ麻耶が手元の情報端末を操作してMS格納庫のプロジ
エクターを起動すると

映像が写った

そこには2機のMS、画面の右側にはM1アストレイが、そして左
側にはGAT-X303イージス

義之「始まるぞ」

義之が言った瞬間だった

最初にアストレイが勢い良く踏み込む

それをイージスはビームライフルで迎撃する

アストレイはそれをビームサーベルを抜刀して弾く

刹那「ビームサーベルでビームを弾いた!？」

イージスは構わずライフルを連射する

アストレイは時には避けて、時にはシールドで防ぐ

そして、お互いの距離が近距離になる

イージスはライフルを腰に懸架して、両手両足のビームサーベルを形成する

アストレイはシールドを捨てて両手にビームサーベルを保持するするとイージスが左手で切りかかってくる

それを同じく左手のビームサーベルで受け止めるアストレイ今度は右手で切りかかってくるイージス

それをアストレイは腕を交差するように右手で受け止める

受け止めた直後、アストレイは右足でイージスの腰部を蹴り飛ばす

明日菜「す、すごい……」

刹那「これほどは……」

明日菜と刹那は模擬戦の激しさに驚いている

義之「因みにイージスのパイロットは副隊長の伊隅みちる中佐だ、腕はかなりのものだ」

刹那「副隊長……」

画面では尚も激しい模擬戦とは思えない戦いが巻き起こっている。

和美「これが量産型……」

そして何合も切りあいが続く

しばらくするとイージスのビームサーベルが1本だけになる

刹那「なぜ1本だけに？」

義之「バッテリー残量がレッドゾーンに入りそうになったからだよ」

するとアストレイもビームサーベルを1本捨てて両手で保持する次の瞬間イージスが突撃してきて、ビームサーベルを振り下ろす

それをアストレイは避けようとしめない

だが次の瞬間アストレイの前に捨てたはずのシールドが飛び出す

明日菜「な、なにが!？」

義之「足で落ちてたシールドの淵を踏んで飛ばしたんだよ」

飛び出したシールドによりイージスのサーベルは弾かれた

その瞬間アストレイのサーベルがイージスの首を飛ばして、イージスは倒れた

義之&麻耶を除く全員「……」

全員茫然自失となっていた

義之「さてと、今見たようにアストレイは使いこなせればこのようにGATタイプとも対等に渡り合える、わかったかな？」

全員「……………はい!!」「……………」

全員が返事するとネギが訓練生全員の前に立ち

ネギ「それでは今から機種交換による操縦の誤差に慣れるために慣熟訓練をしたいと思います、全員シュミレータールームに集合してください!」

全員「……………はい!」「……………」

そうして全員シュミレータールームに移動して義之たちの手ほどきを受けて機体の慣熟訓練を始めた

こうして約2ヶ月に及ぶ教導任務が始まったのだった。

依頼 始まり（後書き）

今回は後書きは割愛します

質問や言わせたいセリフを受け付けます！

質問は、質問内容、質問するキャラを書いてください

セリフを言わせたい場合は言わせるセリフ、セリフの原作及び言っ
たキャラ、言わせたいキャラを書いてください！

応募待っています！！

依頼 海（前書き）

いかん少しggaggだ・・・

依頼 海

あれから1週間経った。

最初は機体に振り回されていた訓練生たちもアストレイに慣れて現在連携訓練中だ。

義之「神楽坂訓練生、余り前に出すぎるな、龍宮訓練生が援護しにくい」

義之は画面を見ながら指示を出す

明日菜「はい！」

真名「すいません」

画面に明日菜と、肌が黒く黒髪が長い女の子の龍宮真名の顔が映る
義之「桜咲訓練生はもう少し動きを小さくしろ、いちいち大きい」
刹那「はい、わかりました！」

義之が言うのと画面に同じく桜咲刹那の顔が映る。

義之「古菲訓練生はもう少しビームサーベルに慣れる、動きが大雑把過ぎる」

古菲「わかったネ」

義之が指摘すると画面に肌が少し焼けており紙を髪留めで両側頭部で纏めた女の子の古菲が映った。

義之「長瀬訓練生はスラスタに頼りすぎだ、機体全体を使い」
楓「あい、わかった」

画面に映ったのは目が細く、髪を後ろだけ腰辺りまで伸ばした長身の少女で少し古い喋り方が特徴の女の子の長瀬楓訓練生だ。

義之「ふむ、後は順調かな？」

義之は各訓練生が映っている画面を見ながら呟く、そこには10数機のアストレイが映っており映像上だが仮想敵と戦っているのだ、端から見たら1人相撲だが。

しかし、訓練生たちにとっては目の前に敵が居るのだ、それもくタイタン>が。

と、そこへ

まゆき「弟くん、今ので今日最後の訓練パターンだけど、どうする？」

まゆきが義之の近くに来た。

麻耶は整備班の責任者として整備班担当の訓練生に整備方法を教えている。

義之「今何時ですか？」

義之は画面から眼を外さないうでまゆきに聞いた。

まゆき「もうすぐ11時半だね、機体を戻して大体12時くらいになるね」

義之はその言葉を聞いて少し考えると

義之「ふむ、だったらこれで今日は終わりにするか」

そう言うとき義之は右手を耳のヘッドセットに持っていくと

義之「お前ら今日はここまで、上げれ！」

全員『『『『はい！』『』『』『』』』』』

そして機体をMS格納庫に収納して簡易整備すると

義之「今日は少し早いがこれで終わりだ、お前達も今までずっと訓練漬けだったからたまには休みたいだろ？ だから午後は特別に休

みだ！」

義之がそう宣言する

全員『『『『やったー！』『』『』『』』』』』

全員は義之の言葉を聞くと手放して喜んだ。

ネギ「いいんですか？」

ネギが義之の近くにより聞いてきた。

義之「構わんさ、それにたまには休まないと疲れて逆に効率が悪くなる」

ネギ「なるほど、確かにそうですね」

ネギは義之の言葉に納得したのか頷く。

そして全員手早く食事を済ませて遊ぶために移動した。

そして移動した場所は……

義之「流石は御剣財閥の私有地か……」

砂浜、所謂プライベートビーチなのだ。

しかも……

麻耶「広いわね……」

そうなのだ、その広さは大体学校の校庭並に広いのだ。

一夏「なんか俺たちの感覚が壊れそうですね……」

シャルロット「そうだね……」

一夏の呆然とした言葉にシャルロットも同意した。

現在砂浜には義之たちを含めて70名近く居るがそれでも広く感じるのだ。

そして各々好きなように遊んでいる。

明日菜「うわ、木刀でスイカが真っ二つに切れた!？」

義之は声のした方向を見た、するとそこでは桜咲刹那が目隠しした状態で木刀を持ちスイカ割りをしていたが

義之「砕けてるんじゃないかって、本当に真っ二つってどうよ……」

そこには見事に真っ二つになっていたスイカがあったのだ。

木乃香「おー、さすがはせつちゃんや」

そう褒めているのは、競泳水着を着ている女の子で、髪は黒く腰まで伸ばしており、ほんわかとした雰囲気の特徴の大和撫子と言える

子の近衛木乃香だ。

因みにくせつちゃん>というのは刹那のことで幼馴染らしく仲がよく時々暴走気味になっている。

刹那「我が神鳴流しんめいりゅうに斬れないものはありません!」

刹那はそう言いながら木刀を振るう。

神鳴流というのは彼女が習っている剣術の流派らしい。

その刹那は真つ二つにしたスイカを更に食べやすく切っている、
・ ・ ・ 木刀で ・ ・ ・

義之「どうやってるんだか ・ ・ ・」

義之には到底できない業わざである。

麻耶「義之もやってきたら？ 剣術やってるんだし」

麻耶が義之の側に来てそう言ってきた、水着は富士級空母で着ていたものだ。

義之「やめとく、それに俺がやってたのは護身術だし、それに俺のは中途半端な技術だ」

義之は自分の剣術を思い出して苦い表情をする。

麻耶「私は結構上手だと思っけどな」

義之「ありがと」

麻耶は素直に賞賛して、義之はそれに返答する

一夏「しかし、見事に女子ばかりですね ・ ・ ・」

一夏は周囲を見回して呟いた

義之は同じく周囲を見回す

義之「確かにな ・ ・ ・」

一夏の言葉に同意した、約70人中7割近くが女子ばかりである。

シャルロット「これは不思議だね ・ ・ ・」

女子のシャルロットも同意するほどであった。

まゆき「弟くん、泳がないの？ この海綺麗だよ！」

まゆきは今海から戻ったのかゴーグルを外す。

御剣財閥の私有地の海は透き通るような青で海底が見えるほどである。

義之「泳ぐか、麻耶はどうする？」

義之は簡易テーブルの上に置いていたゴーグルを掴むとビーチチェアに優雅に寝転がっていた麻耶に尋ねた。

麻耶「私も泳ごうかしらね、たまには体を動かさないと」

麻耶も特注の度付きのゴーグルをつけると海へと義之とともに向かった。

そして時は過ぎ夕方になった。

義之「そろそろ戻るか」

麻耶「そうね」

義之が言うと麻耶も同意したので、ネギを見ると

ネギ「皆さん、そろそろ寮に戻りますよー」

訓練生全員「「「「「はーい！」「」「」

ネギが呼ぶと全員が元気よく返事した。

義之「おらー、俺たちも戻るぞ！」

義之もそれにならない呼び戻した。

初音島全員「「「「「おー！」「」「」

初音島の全員も返事した。

そして全員寮に戻り、食事をしてから寝たのだった。

依頼 海（後書き）

今回は後書きは割愛します

新しい家族の誕生（前書き）

あの子の話です

新しい家族の誕生

義之たちが出張を始めてもう1ヶ月が経つ。

その頃こちら初音島では1つの事件が起きていた……

稟「雨が降りそうだな……」

稟は軍の仕事が定時（5時）で終わったので自宅に帰っていた。

空は曇っており一部は黒くなっている。

稟「早く帰るか……ん？ あれはプリムラか？」

稟が家に早く帰ろうと足を速めた時、公園が眼に入り、ブランコの近くにプリムラが居るのを見つけた。

稟「おい、プリムラなにしてんだ？」

稟はプリムラの近くに駆け寄って声をかけた。

プリムラ「……リコリスを待ってるの……」

稟（リコリス？）

稟はプリムラの言った名前を知らなかったので内心首をかしげた、が稟「楓が夕食を作ってくれてるはずだから帰ろうぜ？」

稟は雨が気になっていたので促した。

プリムラ「……（こく）」

プリムラは寂しそうに頷いた。

稟（なんだろ、胸騒ぎがする……）

稟はプリムラの手を引いて家に帰宅したのだった。

そして、夕食後

稟は自室で音楽を聞きながら本を読んでいると。

楓「稟くん、開けていいですか？」

楓がドアをノックしながら聞いてきた。

稟「ああ、大丈夫だ」

稟は音楽を一時停止して楓に促した。

楓「稟くん、リムちゃんを見ませんでしたか？」

リムちゃんとはプリムラの愛称だ、主に桜や楓シアにネリネが呼んでいる。

稟「プリムラか？ 見てないな、俺はずっと部屋に居たし・・・、居ないのか？」

稟は自分の胸騒ぎを思い出す。

楓「夕食が終わったら部屋に居るって言ったのに部屋に居ないんです」

稟「なに？ 他の部屋は？」

稟は縋る思いで楓に聞いた。

楓「それがどの部屋にも居ないんです、それに先ほど玄関を見たら靴も無いんです」

稟は楓の言葉を聞いて窓から外を見た。

窓の外は雨が降っており、窓ガラスに激しく雨粒がぶつかっている。

稟は少し考えると

稟（そういえばプリムラはリコリスを待ってるって言っていた、それが関係あるのか？）

顔を上げて

稟「楓悪いが、魔王のおじさんと神王のおじさんと呼んでくれるか？ 大至急！」

矢継ぎ早に楓に言った。

楓「分かりました！」

楓は少し驚いていたが頷くと電話のある1階に下りていった。

稟（プリムラ・・・）

稟「すいません、いきなり呼び出して……」

芙蓉家のリビングには神王と魔王、それに稟に楓が居た。

神王「いいってことよ」

魔王「プリムラが居なくなっただって？」

稟「はい、それに関して1つ聞きたいことがあるんです」

魔王「なんだい？」

神王「言ってみねえ」

稟「リコリスって誰ですか？」

稟の言った名前を聞いた瞬間神王と魔王の2人の顔が強張った

神王「稟殿おめえ」

魔王「その名前を何処で聞いたんだい？」

稟「プリムラから聞きました、リコリスを待ってるって言っていました」

稟はプリムラが言った言葉を2人に聞かせた、その言葉を聞いた2

人は表情を少し暗くした

神王「前に、人口生命体は3対作られたと言ったな？」

稟「ええ」

稟は記憶を掘り起こして頷いた。

魔王「その3体は全て別々の方法で作られた、1体目は強化だった」

稟「強化？」

神王「ああ、あらゆる方法で魔力を強化したのさ」

魔王「だけど、失敗した、強化した魔力に体が追いつかなかったの

さ

神王「暴走を起こしてな、研究所ごと吹っ飛んだ」

稟「……」

魔王「2体目は複製さ」

稟「複製……」

神王「ああ、もともと魔力が強い者を選んでその人物の遺伝子を使
って魔力を強化したんだ」

魔王「その2号体がりコリスさ」

稟「なるほど・・・」

稟はそこで少し考えた

稟「その2号体の元はネリネですね？」

稟の言葉を聞いた2人は驚いた

神王「稟殿・・・」

魔王「なんでそう思ったのかな？」

稟「少し考えれば分かりますよ、プリムラはネリネには例外的に懐いていますが、魔王のおじさんにすら懐いていないのに、更に2号体のリコリスは複製と言いましたね？ リコリスはネリネに似ていたのならばリコリスはネリネの複製となります、違いますか？」

稟の言葉を聞いた2人は観念したのだろう

魔王「その通りさ、リコリスはネリネのクローンさ、プリムラにとってはお姉さんみたいな存在だった」

稟「・・・」

魔王「そして、プリムラが持っている人形は以前に人間界こうちに来たときに買ったらしくてね、それをプレゼントしたらしい、恐らく稟ちゃんを買った店と同じかな？」

稟は以前の休暇のさいにプリムラの日用品の買い物に付き合ったのだが、その時に三毛猫と黒猫の人形を買ってプレゼントしたのだ。

稟「あの人形が・・・」

稟はプリムラがいつも抱きしめていたボロボロの猫の人形を思い出した。

魔王「だけど、リコリスは死んでしまった、その時からだね、プリムラが感情を表情に表さなくなったのは・・・」

魔王と神王の2人は俯いた

稟「死んだ原因は・・・」

神王「悪いがそれは言えねえな」

稟「すいません」

稟は機密ということを理解する、自分も軍人だからこそだ

魔王「プリムラはリコリスをずっと待ってるんだね・・・」

稟はその思いを理解する、自分も最近まで楓が死んだと思っていた、しかも最初は死んだという事を理解できずに楓が帰ってくるまで待っていた、しかし、政府から死亡扱いの報告が来たことで初音島に逃げた

稟「俺が迎えに行きます」

神王「稟殿・・・」

魔王「稟ちゃん・・・」

稟はソファから立ち上がりドアに向かう
すると

楓「稟くん、はい」

楓が傘を手渡してきた

稟「楓・・・ああ！」

稟は楓から傘を受け取った

魔王「稟ちゃん、プリムラを頼んだよ！」

魔王が後ろから声をかけてきた

稟「はい！」

稟は返事をすると同時に部屋を飛び出して靴をはいて家を飛び出した。

第3者 side END

稟 side

稟「プリムラ・・・！」

俺は家を飛び出してから傘を開かず雨の中を走っていた。

傘を開かない理由はプリムラのためだ、プリムラを見つけるまで開

くもんか！

俺はある場所を目指して走っていた
その場所は今日帰る時に見た公園だ、プリムラは恐らくあの公園に
居る

あの公園は帝国にあったのを再現しているらしい
俺は公園を目指して走った。

そして

稟「見つけた・・・」

プリムラは案の定公園にいた。

プリムラ「・・・」

プリムラはずっと公園の入り口、つまり俺のほうを見ている
だから俺が来た時少し反応したがすぐに落胆していた。

稟「プリムラ帰るぞ？」

俺は手をプリムラに向けて伸ばしながら言った

プリクラ「・・・（ふるふる）」

プリムラは俯きながら首を振った。

稟「プリムラ・・・」

プリムラ「リコリスお姉ちゃんを待ってるの・・・だけど、いくら
待っても来てくれないの・・・」

プリムラは傘も差さずに雨の中言った

稟「・・・」

俺はかける言葉を考えた

そして、俺は目線の高さをプリムラにあわせるためにしゃがんだ。

稟「リコリスは居ないけど、俺たちが居る」

プリムラ「え？」

稟「魔王のおじさんに聞いた、リコリスはプリムラのお姉ちゃんだ
ったって、けど亡くなった」

プリムラ「……」

稟「リコリスの代わりにはなれないけどさ、俺たちはプリムラの家
族なんだ」

俺はプリムラの眼を見ながら言った。

プリムラ「家族？」

稟「ああ、俺もそうだし、楓、桜もプリムラの家族なんだ、だから
さ、頼っていいんだ」

これは俺の推測だ、プリムラは少し感情表現が苦手なだけだ、しか
も今まで頼れる人間が居なかった、唯一頼れたのがリコリスだった
プリムラ「頼っていいの……？」

プリムラの眼元に涙が溜まる

稟「ああ、おいで？」

俺は両手を広げながら言った。

プリムラ「う、うあああん！」

プリムラは泣きながら俺の腕の中に来た。

それを俺は優しく抱きしめた。

稟「今まで我慢させてごめんな？ だけど、これからは一緒だ」

プリムラ「うん、うん、うあああん！」

それから俺は泣き止むまでずっとプリムラを抱きしめていた。

あれから約10分後

稟「それじゃ、帰ろうか？」

俺は傘を差しながらプリムラに言った。

プリムラ「うん」

俺はプリムラの手を握った

稟「楓も心配してるし、桜も恐らく来てるな……」

プリムラ「あのね、稟……」

お？

稟「なんだ？」

プリムラ「お兄ちゃんって呼んでいい？」

これは・・・

稟「ああ、いいぞ？」

いい変化だよな

プリムラ「ありがとう、お兄ちゃん」

稟「ついでに楓と桜もお姉ちゃんって呼んでやれ」

プリムラ「うん！」

そうして俺とプリムラは手をつなぎながら家に帰り、プリムラは速攻風呂に入ることになったが・・・

プリムラ「心配かけてごめんね？ 楓お姉ちゃん・・・」

プリムラは恥ずかしそうに楓をそう呼ぶと

楓「いいんですよ、リムちゃん」

楓は一瞬驚いたが優しく微笑みながら返事をした。

プリムラ「桜お姉ちゃんもごめんね？」

桜は俺の予想通り家に来ていた。（家は近いらしい）

桜「いいんだよリムちゃん」

こうして、俺たちに新しい家族が生まれたのだった。

新しい家族の誕生（後書き）

この話だけはどうしても書きたかった！
書いてよかったぜ！！

あ、そうそう、アクセス数が3万を突破しました！
今まで読んでくれた皆様に感謝します！
これからも頑張って書くので応援よろしくお願いします！！

尚後書きコーナーへの応募は随時受け付けてます！
質問や言わせたいセリフなど、何時でも送ってください！
質問の場合は質問したい内容、質問するキャラクターを書いてくだ
さい

セリフを言わせたい場合は言わせるセリフ、セリフの原作、セリフ
を言わせるキャラクターを書いて応募してください！
応募待ってます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7601v/>

機動戦士ガンダム 英雄黙示録

2012年1月12日01時51分発行